

# 平安京土御門烏丸内裏跡

— 左京一條三坊九町 —

平安京跡研究調查報告

第10輯

財團法人 古代學協會

昭和58年

## 序 文

財団法人古代學協會・平安博物館は、永年にわたって平安京の発掘調査を行い、平安京の歴史の解明に寄与して来た。

近年、幸いにも大内裏に模して建造された最初の里内裏である土御門烏丸内裏跡を発掘調査する機会に恵まれたことは、我々の欣びとする処である。

この地の第宅としての出発は、文献の上では村上天皇の皇子・具平親王が同地を下賜された10世紀より始まるものと推定される。親王の子孫である村上源氏の権中納言・源師時(1077～1136)の時に至って里内裏となり、永久5年(1117)、鳥羽天皇はここに遷幸された。しかし保延4年(1138)の災上のは、遂に再建をみる事がなかった。続く鎌倉時代から室町時代にかけては、浄土宗の名刹である清浄華院がこの地に伽藍をかまえ、皇室の崇敬をえていた。さらに江戸時代には、水戸徳川家の藩邸が営まれ、朝廷との深い関係が結ばれていた。

このように、平安時代以降江戸時代に至るまでこの地は、政治・文化の中心地であった。発掘調査後は、KBS京都放送会館がここに建設され、それは京都の文化・報道の有力な機関として栄えている。

なお、文末ではあるが、この報告書を諸賢の前に公にすることが出来たのは、橋本仁四郎氏を初めとして諸方面の方々の御援助を負うている。ここに深甚の感謝の辞を申し上げる次第である。

昭和58年9月

財団法人古代學協會専務理事

平安博物館館長兼教授

角 田 文 衛

## 目 次

例 言	vii
第 1 章 調査の経緯	1
第 2 章 周辺の遺跡	3
第 3 章 文献学的考察	6
第 1 節 平安初期の土御門大路とその性格	6
第 2 節 土御門烏丸内裏	7
第 3 節 清浄華院	9
第 4 節 水戸藩邸	11
第 5 節 幕末維新	12
第 6 節 明治以降	13
第 4 章 発掘調査の経過	15
第 5 章 層序と遺構	18
第 1 節 層 序	18
第 2 節 遺構の概要	22
第 3 節 平安時代の遺構	35
第 4 節 江戸時代の遺構	39
第 6 章 遺 物	46
第 1 節 平安時代の瓦類	46
第 2 節 平安後期の土器・陶磁器類	62
第 3 節 江戸時代の瓦類	70
第 4 節 焼塩壺	75
第 5 節 土城78の出土遺物	90
第 6 節 その他の主要遺物	97
第 7 章 むすびにかえて	104

## 図 版 目 次

- 図版第1 上：遺跡の現況  
(KBS京都放送会館，東北より)  
下：付近にみられる石碑
- 図版第2 上：上杉本『洛中洛外図屏風』  
下：『洛中洛外図』  
(享保六年頃成立，平安博物館蔵)
- 図版第3 発掘前の遺跡全景  
(上：南より，下：西より)
- 図版第4 上：東トレンチ(南より)  
下：西北地区西壁断面と溝4  
(東より)
- 図版第5 上：東北地区北壁断面と土御門  
大路面(南より)  
下：同西壁断面と溝3・4  
(東より)
- 図版第6 上：東北地区南壁断面と溝2  
(北より)  
下：西南地区南壁断面と溝8  
(北より)
- 図版第7 西南地区全景  
(上：西より，下：東より)
- 図版第8 溝9(上：東南より，下：西南より)
- 図版第9 上：溝10・11(東より)  
下：7・8G区の石列(西より)
- 図版第10 上：西南地区終了状況(西より)  
下：東南地区終了状況(東より)
- 図版第11 上：東北地区終了状況(南より)  
下：西北地区終了状況(西より)
- 図版第12 左：東南地区における溝1・2  
(北より)  
右：東北地区における溝2～4  
(北より)
- 図版第13 上：東北地区における溝2～4  
(南より)  
下：東南地区における溝1・2  
(南より)
- 図版第14 上：溝1北端(南より)  
下：東南地区南壁における溝1  
断面(北より)
- 図版第15 上：東北地区における溝2  
(北より)  
下：東南地区北壁における溝2  
断面(南より)
- 図版第16 土御門大路道路面と溝3・4  
(上：東南より，下：北より)
- 図版第17 土御門大路道路面と溝3・4  
(上：南より，下：東より)
- 図版第18 上：溝3・4(東より)  
下：同断面(東より)
- 図版第19 溝3西部  
(上：南より，下：東より)
- 図版第20 西北地区における溝4・6  
(上：東より，下：西より)
- 図版第21 西北地区における溝4  
(左：東より，右：西より)
- 図版第22 左：溝8(南より)  
右：石垣1・2全景
- 図版第23 石垣1(上：北より，下：南より)
- 図版第24 上：石垣1(東北より)  
下：石垣1と2(東北より)
- 図版第25 石垣1  
(上：8C区，下：6C・7C区，  
ともに東より)
- 図版第26 上：石垣1に伴う礎石  
(9C区，西より)  
下：石垣2(東より)
- 図版第27 暗渠1(上：南より，下：北より)
- 図版第28 上：暗渠1(東より)  
下：同主要部(南より)
- 図版第29 上：暗渠1東溝(北より)  
下：同西溝(南より)
- 図版第30 上：暗渠1南溝(東より)  
下：同西南隅(東北より)

図版第31 暗渠 1 東南隅  
(上：北西より, 下：東南より)

図版第32 上：暗渠 1 東北隅(西南より)  
下：同北西隅(東南より)

図版第33 上：暗渠 1 北溝北側(南より)  
下：同東溝西側(東より)

図版第34 上：暗渠 1 内の礎石(西より)  
下：同c-d断面(東より)

図版第35 上：暗渠 1 i-j断面(北より)  
下：同e-f断面(南より)

図版第36 暗渠 1 延長溝  
(上：東西溝, 南より,  
下：南北溝, 東より)

図版第37 暗渠 2(上：北より, 下：南より)

図版第38 暗渠 2 東溝  
(上：西より, 下：東より)

図版第39 上：暗渠 2 東溝(西より)  
下：同北溝(東より)

図版第40 暗渠 2 断面  
(上：東溝, 下：西溝, ともに北より)

図版第41 土城78断面  
(上：北より, 下：西より)

図版第42 土城78出土自然遺物・1  
(上：貝類 下：魚骨)

図版第43 土城78出土自然遺物・2

図版第44 上：輪宝 下：石仏

図版第45 石造遺物

図版第46 上：組紐用錘具 下：泥メンコ

## 挿 図 目 次

第1図	調査地の位置	1	第25図	遺構外出土軒丸瓦拓影・ 実測図・1	55
第2図	調査地周辺の遺跡	4	第26図	遺構外出土軒丸瓦拓影・ 実測図・2	57
第3図	源師時の系図	7	第27図	遺構外出土軒平瓦拓影・ 実測図・1	59
第4図	内裏復原図	8	第28図	遺構外出土軒平瓦拓影・ 実測図・2	61
第5図	同志社看護学校図	14	第29図	土師器・黒色土器実測図	63
第6図	グリッド配置図	16	第30図	須恵器実測図	65
第7図	地区の大別とトレンチの位置	16	第31図	陶磁器類実測図	67
第8図	層序実測図・1	19	第32図	江戸時代瓦類部別別 計測値頻度図	73
第9図	層序実測図・2	20	第33図	江戸時代軒平瓦拓影・実測図	74
第10図	層序実測図・3	21	第34図	江戸時代平瓦実測図	76
第11図	西南地区, 東南地区全体図・1	30	第35図	江戸時代軒丸瓦拓影・実測図	78
第12図	西南地区, 東南地区全体図・2	32	第36図	江戸時代丸瓦実測図	79
第13図	東北地区全体図	34	第37図	焼塩壺実測図・1	81
第14図	西北地区全体図	34	第38図	焼塩壺実測図・2	82
第15図	溝1～8全体平面図と断面図	36	第39図	焼塩壺実測図・3	84
第16図	『延喜式』による 土御門大路南築垣の想定図	39	第40図	刻印の変遷と参考資料	88
第17図	石垣1・2実測図	40	第41図	焼塩壺関連資料実測図	89
第18図	石垣2出土焼塩壺実測図	41	第42図	土城78実測図	91
第19図	暗渠1・2実測図	42	第43図	土城78出土遺物実測図	92
第20図	溝1出土軒瓦拓影・実測図	46	第44図	洛北木野の土器作り	93
第21図	溝2・4・5出土軒瓦拓影・ 実測図	49	第45図	古銭拓影	100
第22図	溝6出土軒瓦拓影・実測図	51	第46図	石帯・瀬戸内型土錘実測図	100
第23図	溝8出土軒瓦拓影・実測図	52	第47図	金箔瓦拓影・実測図	101
第24図	土城・井戸出土軒瓦拓影・ 実測図	54			

## 付 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	3	第7表	焼塩壺出土数量一覧表	80
第2表	水戸家と公卿との婚姻関係・1	12	第8表	土城78出土素焼土器一覧表	93
第3表	水戸家と公卿との婚姻関係・2	12	第9表	素焼土器計測値一覧表	94
第4表	遺構一覧表	23	第10表	土城78出土自然遺物種名一覧表	95
第5表	土器・陶磁器類溝別数量表	69	第11表	土城78出土貝類数量表	96
第6表	暗渠出土瓦計測表	71	第12表	出土古銭一覧表	98

## 例 言

1. 本書は、昭和53年に財団法人古代学協会・平安博物館が、近畿放送株式会社(KBS 京都放送)の委託を受けて実施したKBS 京都放送会館新築工事に伴う発掘調査の報告書である。
2. 発掘地は内裏跡で、土御門大路に面しているため、土御門内裏跡と称していた。発掘時にもこの名称を使用した。しかし、現在の京都御所を始めとする内裏は、土御門大路に面し「土御門内裏」と呼ばれているため、縦の通りを附して「土御門烏丸内裏跡」と称して、他の内裏と区別する必要がある。本報告書刊行に当たっては、この新名称で統一をはかった。
3. 水平基準線は、海拔49mを0とする。
4. 遺物・諸記録は、平安博物館において保管されている。また、一部は京都放送会館1階ロビーに陳列されている。
5. 本書の執筆分担は、次のとおりである。

渡辺 誠(名古屋大学文学部助教授、元平安博物館助教授)

第1・4章、第5章第3・4節の一部、第6章第3～5節、  
第7章

南 博史(平安博物館考古学第2研究室助手)

第2章、第5章第1・2節、同第3・4節の一部、  
第6章第1・6節

藤本孝一(同文献学研究室講師)

第3章

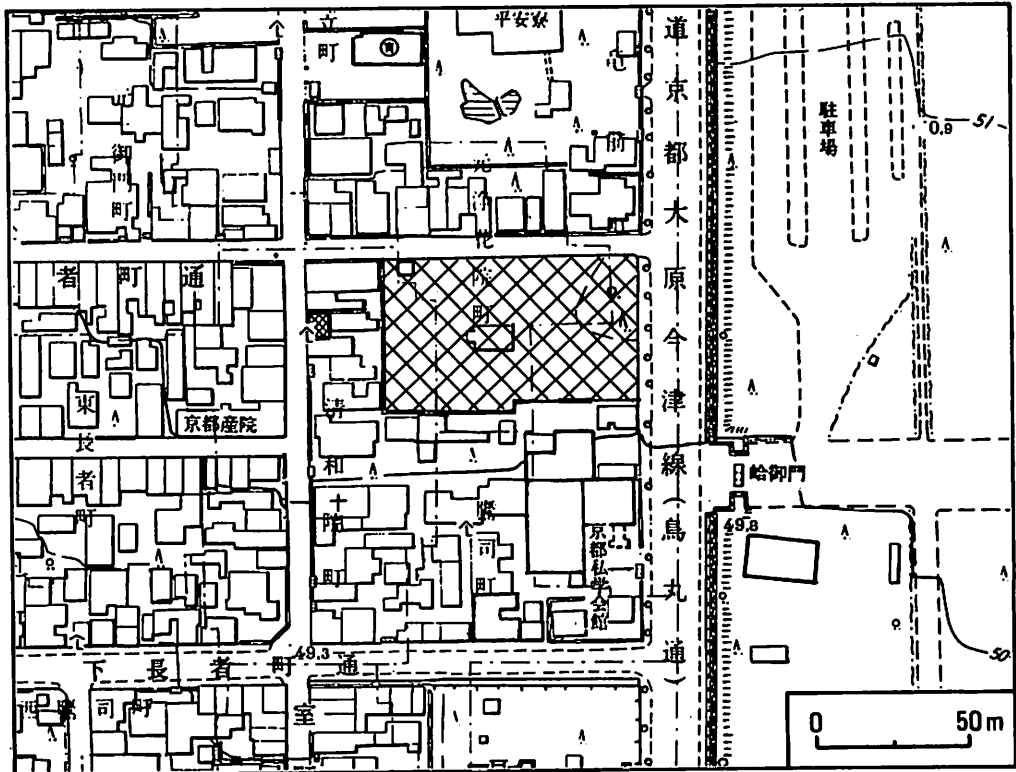
森田 稔(神戸市教育委員会文化財課技師)

第6章第2節

## 第1章 調査の経緯(第1図, 図版第1上参照)

京都御所西側の門の一つである蛤御門の近接地(第1図参照)において、京都放送会館が建設されることになり、三菱地所株式会社大阪支店より、当館にその事前調査の打診がなされたのは1978年9月のことである。

この地区は幕末の禁門の変の舞台であり、また水戸藩邸の所在地でもある。そしてさらに遡った平安時代にあつては、里内裏である土御門烏丸内裏の所在地でもあり、平安京研究にとっては重要な地域である。また発掘面積の広さからみて、土御門大路関連遺構等、今後の平安京研究にとって重要な遺構の検出される可能性が大きいと推定された。こうした重要性に鑑みて、当館々長角田文衛博士は具体的にその対応策を検討するように指示された。これにもとづき、調査期間・方法・経費および重要遺構検出の場合の対処等について、近畿放送株式会社・三菱地所株式会社大阪支店と協議を重ね、最終的には直接準備工事を担当する戸田建設株式会社大阪支店との間に契約書を交わすことになった。そして同年12月10日付をもって、京都市文化財



第1図 調査地の位置



保護課を経て文化庁宛に埋蔵文化財発掘調査届出書を提出した。

発掘調査は、1979年1月10日より着工し、同年5月31日に終了した。

発掘に当っては研究部考古学第2研究室を主体とし、平安京調査本部もこれに協力することとなり、文献調査については文献学研究室の協力も得て、次のような調査団を編成した。また関連する諸分野からの指導助言を仰ぐべく、9先生に指導委員をお引受け願った。

調査主体 平安博物館

調査団長 角田文衛（平安博物館館長）

調査主任 渡辺誠（平安博物館考古学第2研究室，現名古屋大学文学部助教授）

調査員 藤本孝一（平安博物館文献学研究室）

松井忠春（平安京調査本部，3月31日まで，現京都府埋文センター）

佐々木英夫（平安京調査本部）

南博史（平安博物館考古学第2研究室）

指導委員 榎崎彰一（考古学）名古屋大学文学部教授

堅田直（同）帝塚山大学教授

八賀晋（同）京都国立博物館考古室長

亀井節夫（地質学）京都大学理学部教授

粉川昭平（植物学）大阪市立大学理学部教授

嶋倉巳三郎（同）関西外国語大学教授

岩井宏実（民俗学）大阪市立博物館学芸員，現国立歴史民俗博物館教授

福田栄治（同）京都府立総合資料館資料課

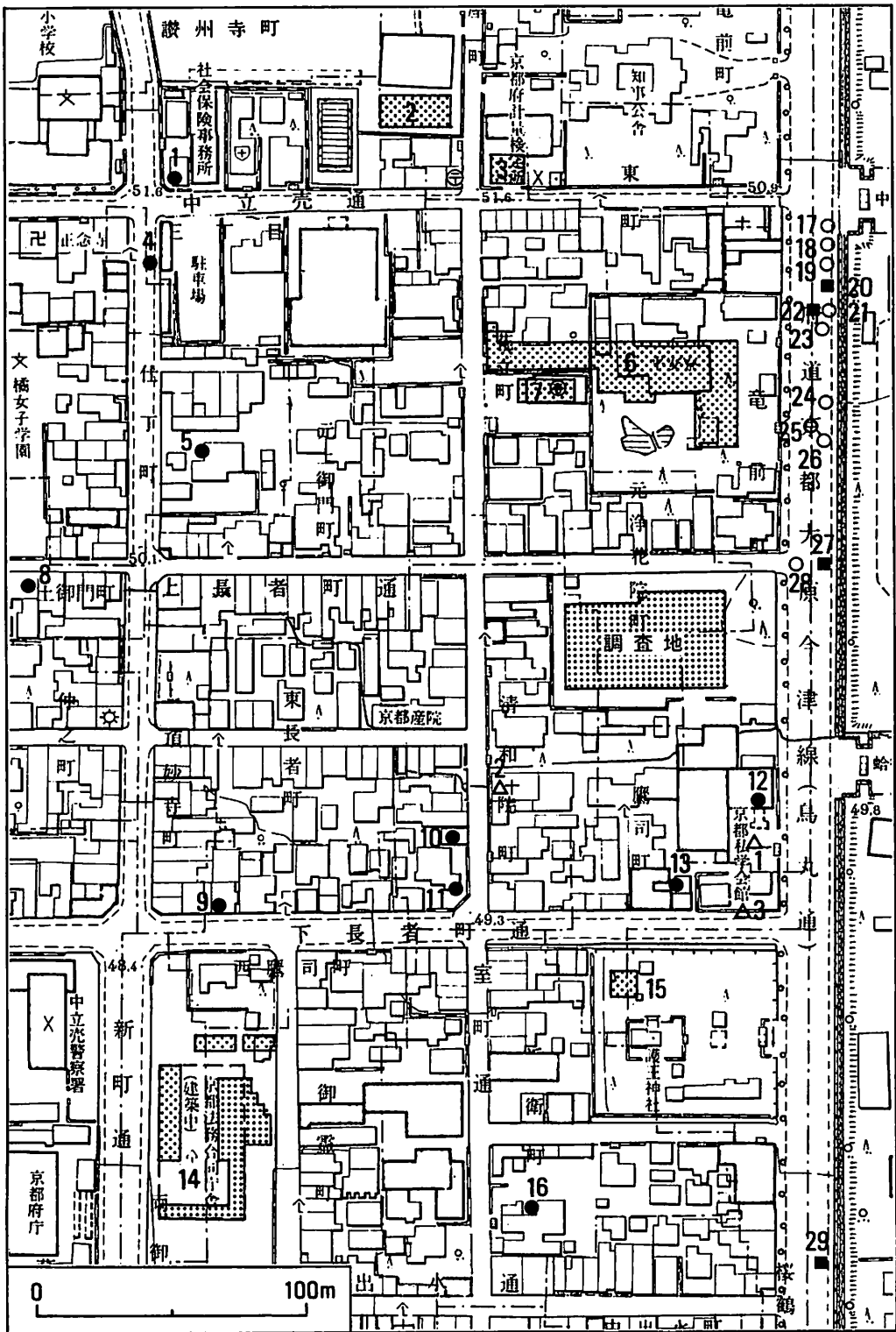
増沢文武（保存科学）元興寺文化財研究所保存科学研究室々長

## 第2章 周辺の遺跡(第1表, 第2図, 図版第1下参照)

今回の発掘調査地は、京都御苑の西側に位置し、その東側、北側はそれぞれ烏丸通・上長者町通に面している。また、京都御苑蛤御門はその南東方向にある。そして、この周辺の地域は平安京内における発掘調査の中で、もっともその件数が多い地域の一つであり、その重要度を知ることができる。これらの調査のおもなものには、内膳町跡(京都府計量検定所敷地<sup>1)</sup>、平安会館敷地<sup>2)</sup>、一条三坊十町(護王神社内<sup>3)</sup>)、一条三坊七町左衛門府町(京都府法務合同庁舎敷地<sup>4)</sup>)等がある。また、平安京を南北に通る烏丸小路は、京都市地下鉄烏丸線建設に伴っ

第1表 周辺の遺跡一覧表<sup>6)</sup>(番号は第2図に一致する)

番号	位置および名称	調査の種類
1	京都市上京区中立売通新町3丁目461-2	立会
2	同市同区室町通中立売上ル薬屋町・上京中学校	発掘
3	同市同区同町431・京都府計量検定所	"
4	同市同区新町通中立売下ル仕丁町	立会
5	同市同区同町337	"
6	同市同区烏丸通上長者町上ル龍前町598-1他・平安会館	発掘
7	同市同区室町通中立売下ル花立町・京都市保育所	"
8	同市同区上長者町通新町西入土御門町327	立会
9	同市同区下長者町通新町東入鷹司町4	"
10	同市同区室町通下長者町上ル清和院町571-10	"
11	同市同区同町565	"
12	同市同区烏丸通下長者町上ル龍前町・京都私学会館	"
13	同市同区下長者町通烏丸西入鷹司町21-14	"
14	同市同区新町通下長者町下ル御霊町・法務合同庁舎	発掘
15	同市同区烏丸通下長者町下ル中出水町・護王神社	"
16	同市同区室町通水上ル近衛町42	立会
17	地下鉄烏丸線内遺跡 立-8	"
18	同 上 立-6	"
19	同 上 立-2・7・12	"
20	同 上 Na13トレンチ	発掘
21	同 上 立-3・9	立会
22	同 上 Na2トレンチ	発掘
23	同 上 立-1	立会
24	同 上 立-5	"
25	同 上 立-11	"
26	同 上 立-4	"
27	同 上 Na16トレンチ	発掘
28	同 上 立-10	立会
29	同 上 Na21トレンチ	発掘



第2図 調査地周辺の遺跡 番号は第1表に一致する(網点は発掘調査地点, ●は立会調査地点を示す)。また, 17~29は, 地下鉄烏丸線内遺跡の調査地点である(■はトレンチ地点, ○は立会調査地点を示す)。なお, △は石碑の位置を示し, 番号は図版第1下に一致する。

て発掘・立合調査などが行なわれており<sup>5)</sup>、本調査地東北方の烏丸上長者町の交差内のテストトレンチにおいては、江戸時代のものと思われる東西方向の石組溝が検出されている。

上記の中でもっとも注目されるのは内膳町跡の調査である。とくに平安会館敷地内の調査では、平安時代初期から18世紀初頭にかけての遺構が検出されている。とくに12世紀から13世紀初頭にかけての遺構・遺物がまとまって検出されており、平安時代後期の内膳町の様相を考える上で重要である。

#### 註

- 1) 高橋美久二「内膳町遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概要1974』所収, 京都, 昭和49年)。
- 2) 平良泰久他「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1980』第3分冊所収, 京都, 昭和55年)。
- 3) 花園大学考古学研究会「京都市護国神社境内遺跡の発掘調査概報—江戸時代遺跡の考古学的調査—」(『花信風』創刊号所収, 京都, 昭和52年)。
- 4) 杉山信三・長宗繁一・前田義明「京都府法務合同庁舎新営地に於ける埋蔵文化財発掘調査概報—平安京左京近衛町尻—」(『埋蔵文化財発掘調査概報集1976』所収, 京都, 昭和51年)。
- 5) 大矢義明・小森俊寛・永田信一・原山充志「京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 I (1975年度)」(京都, 昭和55年)。
- 6) この表の作成については、上記の文献のほか、下記の文献を利用した。
  - 1・8・9・13: 梶川敏夫・北田栄造・鈴木広司編「京都市内遺跡試掘・立合調査」昭和54年度(京都, 昭和55年)。
  - 2・4・5・7・10・11・16: 大矢義明編「京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立合調査一覧」1981(京都, 昭和57年)。
  - 12: 近藤喬一・甲元真之他「平安京古瓦図録」(京都, 昭和52年)。

### 第3章 文献学的考察(第2・3表, 第3～5図, 図版第2参照)

#### 第1節 平安初期の土御門大路とその性格

桓武天皇が長岡京より平安京の地に遷都したのちも、都市の造営は進められた。この工事は、蝦夷地への征討軍の派遣と重なって国家財政の破綻を招いた。が、延暦二十四年(805)十二月七日、天下徳政について藤原緒嗣と菅野真道とが相論し、緒嗣の「方天下所<sub>レ</sub>苦、軍事与造作也。停<sub>レ</sub>此兩事<sub>レ</sub>、百姓安<sub>レ</sub>之。<sup>1)</sup>」とする意見を入れ、天皇は十日<sup>2)</sup>に造宮職を廃止した。遷都から11年間が経過して、平安京の造営も一応終わったことでもあった。

平安京造営と土御門大路とについて、最近、瀧浪貞子氏によって平安京も藤原京タイプの都市計画によって造られ、土御門大路は初めは一条大路であったことを提言された。重大な意見であり、肯定されるので、まず瀧浪氏の説を紹介する。

『山槐記』長寛二年(1164)六月二十七日条である。記事は賑給定めに関するものであるが、注目されるのは、上卿に提出された定文のうち、左京両京の一条に「加<sub>レ</sub>北<sub>レ</sub>辺<sub>レ</sub>」と付記されている点について、日記の著者中山忠親が、「亦北<sub>レ</sub>辺者、一条南土御門北也、昔以<sub>レ</sub>土御門<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>一条大路<sub>レ</sub>、其後北<sub>レ</sub>辺二丁被<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>宮城<sub>レ</sub>、既為<sub>レ</sub>京中<sub>レ</sub>」と述べていることである。すなわち忠親の指摘によれば、

(1)かつては土御門大路が一条大路であった。

(2)その後(一条大路を二丁北上したことで)、北<sub>レ</sub>辺二町(分)が宮城(大内裏)に取り込まれ(それに伴い北<sub>レ</sub>辺の南翼部も)京中とされた。

というのである<sup>3)</sup>。

北上の時期は、四千町歩の官田を設置して、そこからの米を京に運送させた元慶三年(879)の「元慶官田の制」にもとめ、

大蔵省倉庫群の大内裏内への移行—具体的には、大内裏北<sub>レ</sub>辺の垣を二丁北に延長して宮城を拡大したこと—は、元慶官田の制と対応して行われた「京庫」の充実整備を目的としたものであり、かつその有機的な運用を意図してなされた措置であった<sup>4)</sup>、

と結論している。瀧浪氏は、元慶年間(877～885)頃に一条大路が二丁北上し、その間を北<sub>レ</sub>辺と称し、大内裏の門の形体から土御門大路と呼ばれたと考証した。

この説をもとに、大路の性格を考えてみる。左京の大路北側大内裏から東へは、織部・内教坊・女官・内膳・采女の各町。南側東へは、織部・大舎人・内豎・左衛門府の各町。右京の大路南側大内裏から西へは、兵庫・隼人司・右近衛の各町があり、諸司厨町が他の横大路と比べて一番多く設置されている。また邸宅では、左京の大路北側大内裏から東へ北<sub>レ</sub>辺第(源信・嵯峨源氏)・土御門第(藤原安親)・高倉第(藤原邦綱)・土御門第(源雅実・村上源氏)・土御門第(具平親王・村上源氏)・清和院(藤原良房)。左京の大路南側大内裏から東へ土御門

烏丸内裏(源師時・村上源氏)・高倉殿(藤原基経)・鷹司殿(源雅実・宇多源氏)・京極殿(源雅信・宇多源氏)がある。右京では宇多院があり、大路の向い側に近年9世紀の寝殿造の跡が出現した(山城高校校内の発掘による)。延喜二十一年(921)二月五日に醍醐天皇の皇子7人が源朝臣を賜ったのち、左京一条一坊に貫ぜられた例<sup>5)</sup>もみえ、この大路に面した地域に多くの賜姓源氏の人々が屋敷地を下賜されていた。これも土御門大路がも一条大路で、市中において空闲地が広く残っていた故と思われる。

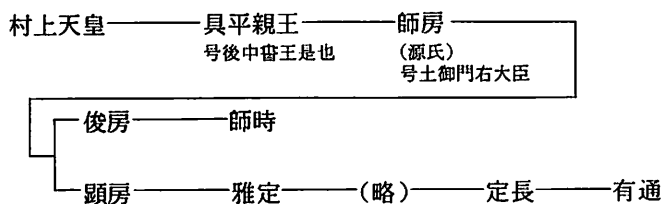
土御門烏丸内裏の発掘地も、村上源氏の子孫、源師時邸で、村上天皇の皇子具平親王が邸宅を賜った10世紀頃より、本格的な建築物が営まれたと推量される。

## 第2節 土御門烏丸内裏

『百鍊抄』永久五年(1117)十一月十日条に、

天皇遷幸新造之土御門皇居。殿舎大略摸大内。但無承明門代。件地本是師時朝臣領也。讃岐守頭能募重任功造進之云々。

とあって、棟上にあたり指図を提出させて種種検討をくわえるなど<sup>6)</sup>、里内裏として本格的な造営であった。この記事で承明門の代りとなるものがないとあるのは、西門より出入<sup>7)</sup>することがみえているので、南面の鷹司小路は塞がれていたためであろうか。西側の室町小路が正面となる内裏であった。さらにこの地は「本是師時朝臣領也。」とあり、源師時の所領であった。師時の日記を、彼の官職の唐名から『長秋記』と呼び、この時代の根本史料の一つであるが、残念なことにこの年の記事は伝えられていない。



第3図 源師時の系図 (『尊卑分脈』第3巻、村上源氏より作成)

源師時の系図(第3図)は、村上天皇の皇子具平親王から始まる。賜姓源氏は前述のごとく、土御門大路に面して所領を賜っていた。

具平親王は『池亭記』を著

し、「後中書王」と称賛された高名な文人であった。宝徳元年(1449)五月九日<sup>8)</sup>に頭房系の定長が子息有通の遺言により大徳寺如意庵に寄進した土御門北万里小路東の土御門第は、具平親王よりの相伝した地であった。この第の伝領と同様に、師時邸も村上天皇より親王に下賜された邸宅であった、と思われる。またその由緒により里内裏として選定されたと考えたい。『中右記』は「皇居新造土御門烏丸第也<sup>9)</sup>。」と呼んでいる。土御門大路に面した両側の邸宅を、「土御門第」と呼べるわけで、何カ所も同名の邸宅があることになり、紛らわしいため、「土御門烏丸内裏」と縦の路を入れて、発掘地を称することとする。

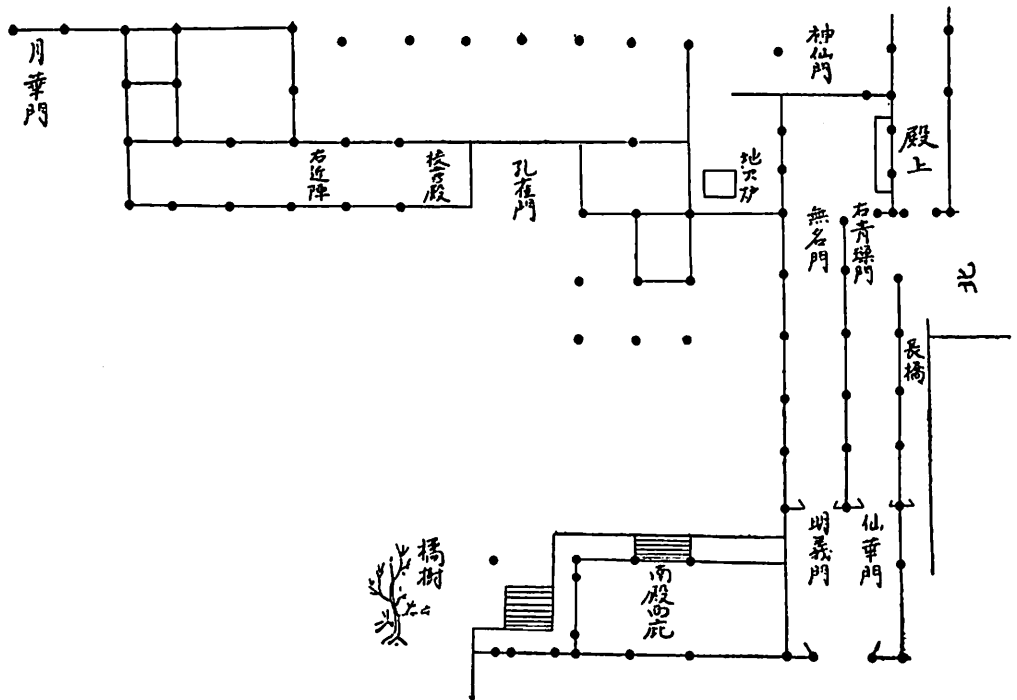
この里内裏で、保安四年(1123)正月二十八日に鳥羽天皇は顕仁親王(崇徳天皇)に譲位をした。さらに崇徳天皇の元服も大治四年(1129)元旦<sup>10)</sup>にこの里内裏で行なわれた。さらに同年十

8 第2節 土御門烏丸内裏

二月八日に「今夕主上從本皇居土御門烏丸第<sub>一</sub>、渡<sub>二</sub>御院御所三条京極第本皇居<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>加舎<sub>一</sub>、仮渡御也<sup>11)</sup>。」とあって、皇居の増築にともない、天皇は三条京極第に移られた。同月二十四日に「今日土御門皇居中舎屋、被<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>加棟上<sub>一</sub>也<sup>12)</sup>。」と工事が進捗している。修造が終った翌年三月四日「今夕可<sub>レ</sub>還<sub>二</sub>御本土御門烏丸<sub>一</sub>、皇居<sup>13)</sup>也。」と還幸された。長承二年(1133)十二月になって「天皇自<sub>二</sub>土御門皇居<sub>一</sub>、還<sub>二</sub>幸<sub>二</sub>二条殿<sub>一</sub>、二条南<sup>14)</sup>湖院東。」された。二条殿はもと藤原道長第で曾孫の師通が、白河天皇に寄進したものである<sup>15)</sup>。保延四年(1138)二月二十四日に二条殿が焼亡したため白河殿に渡御し<sup>16)</sup>、さらに六条坊門南烏丸西の小六条殿に移り、四月十九日に「天皇自<sub>二</sub>小六条<sub>一</sub>、還<sub>二</sub>御土御門殿<sub>一</sub>、伊賀守光房<sub>一</sub>、<sub>二</sub>還<sub>レ</sub>任之功<sub>一</sub>、<sub>二</sub>修<sub>レ</sub>造之<sub>一</sub>。<sup>17)</sup>」と再び土御門内裏に還幸した。だが十一月二十四日に火災にあって焼亡したため、天皇は小六条殿に難を逃れた<sup>18)</sup>。二年後の保延六年(1140)十一月四日「天皇自<sub>二</sub>小六条<sub>一</sub>、還<sub>二</sub>御新造土御門内裏<sub>一</sub>。<sup>19)</sup>」された。永治元年(1141)十二月七日にこの里内裏で近衛天皇が踐祚<sup>20)</sup>された。しかし久安四年(1148)六月二十六日午二刻に再度焼失<sup>21)</sup>してしまった。翌翌日、

範家仰曰、明年正月、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御元服<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>何所<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>行乎。将可<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>土御門内裏<sub>一</sub>歟。一<sub>レ</sub>同定<sub>二</sub>申可<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>土御門内裏<sub>一</sub>之由<sub>一</sub>。範家參<sub>レ</sub>院。久之帰參。依<sub>二</sub>群卿定<sub>一</sub>行<sub>レ</sub>之。即退出。

と『台記』にみえ、天皇の元服のためだけに内裏再建が決定した。だが翌翌年正月四日に「天皇於<sub>二</sub>東三条皇居<sub>一</sub>、元服<sub>二</sub>、去年依<sub>二</sub>攝政故障<sub>一</sub>、延引<sup>22)</sup>」とあり、元服の場所は、



第4図 内裏復原図(『大内裏図考証』より)

東三条皇居であった。それは土御門内裏の再建が、計画のみであったことをうかがわせる。久寿三(保元)年(1156)四月二十七日の『兵範記』の記述に、

今日土御門内裏事始。上卿左大将・藏人弁資長、来月二・棟上云々。<sup>(日)</sup>先帝御時被<sub>レ</sub>始<sub>レ</sub>之、  
棟上之後、有<sub>レ</sub>事廢<sub>レ</sub>矣。当今更被<sub>レ</sub>行也。但元奉行右中弁範家、依<sub>レ</sub>病改定云々。

とあって、棟上はしたが「事廢」あったため工事が中止された。6年後に内裏建築が始まったわけであるが、七月二日に鳥羽法皇が崩御されると保元の乱が起こり、後白河天皇の勝利に終わった。この乱以降、土御門内裏の造築記事がみえない。原因は乱のためか、本来の大内裏建設の再開かは明確にしないが土御門烏丸の地における里内裏の終焉を迎えた。

土御門内裏の様子的一端は『台記』康治二年(1143)正月八日条に、柴宸殿の西側が描写されている(裏松固禪が復元した指図<第4図>を掲げた)。鎌倉時代に入ると、清浄華院として史料にあらわれる。

### 第3節 清浄華院

発掘地の町名「元浄花院町」のごとく、現在上京区北之辺町にある清浄華院(単に浄華院とも呼ぶ)は鎌倉・室町時代には、この地にあった。

浄華院の由来は、貞観四年(862)清和天皇により禁裏内道場として創建され、円仁を開基とする。のちに禁裏外に移された。天曆五年(951)に全焼し、翌年村上天皇により再建された。しかし貞元元年(976)の大地震に遇い、円融天皇がふたたび建立された。さらに後白河法皇が法然に帰依し、浄華院を与えたことにより、天台宗から浄土宗へ転じた。このため法然を寺では、中興の祖とする。以上が寺伝である。この史実は、他の史料が混入されて縁起が作成されたようである。

外に寺の創建を伝える史料がある。国の重要文化財に指定されている『真如堂縁起<sup>23)</sup>』(全3巻)である。この縁起の大永四年(1524)八月十五日付奥書によると、応仁の乱による衰頹から伽藍の復興が成ったことを記念して、掃部助久国に絵を描かせ、後柏原天皇・伏見宮邦高親王等が詞書に染筆された。特に応仁の乱のありさまが描写されていることで、この絵巻を有名にしている。その中の一段に、向阿上人が真如堂で靈験を得たことを記して、

抑向阿と申は、もとは園城寺の住侶浄花房証賢として無双の碩学也。然而弘安十年行年二十二にして発心し離山しけるが、如意寺の大門の柱に、

おもひたつ衣の色はうすくとも

かへらじ物よ墨染のそで

と一首を書つけ。洛川にいで花開院<sup>五辻高台</sup>にして則隠遁墨衣の身となり。其後浄華院を開基して是心上人と号す。浄土鎮西の一流名匠やむごとなき聖人也。

と、上人と浄華院創建について説明している。ここでは弘安十年(1287)以降のある時期に向阿が開基したとするが、円仁開基とする寺伝とが相違する。これをどう考えるべきであろうか。

南北朝期の公忠の日記『後愚昧記<sup>24)</sup>』に、



10 第3節 清浄華院

終日雨下。浄花院長老玄心上人。浄土宗最長、才学拔群僧也。此四五日。円寂之由聞<sub>レ</sub>之。仍以<sub>レ</sub>状訪<sub>レ</sub>弟子証法房<sub>附屬之</sub>。有<sub>レ</sub>返事<sub>附</sub>。終焉如<sub>レ</sub>本意<sub>附</sub>云々。故向阿上人<sub>玄心上人、師。</sub>之時ヨリ、故入道相国以来代々師壇也。即代々菩提相訪事。

とある。公忠の祖祖父太政大臣実重(嘉暦四年〔1329〕薨去, 71才)以来, 三条家が師壇となっている。また他の箇所では浄華院を「浄土宗寺也。向阿上人開基也。旧在二条万里小路。」とする。向阿上人は俗名を武田大膳大夫信繁といい、伊豆守源満信の子で貞和元年(1345)六月二日<sup>25)</sup>亡くなった。歌人としても『新千載和歌集』雑歌上に、

題不知

めぐりあふ春やむかしのもの身と 月だにしらじ墨染の袖

と一首入集している。このようにみえてくると、浄華院は向阿上人が創建したのち、実重の帰依によって土御門烏丸内裏の跡地に二条万里小路から移転し、伽藍の整備が行なわれた。寺伝を編纂するにあたり、内裏における諸仏事が修せられる内道場の歴史を取り入れ、宗祖の法然と後白河院との関係をもとに作成されたと考えたい。

その後の浄華院は、将軍・管領等の継嗣問題に端を発した応仁の乱(1467~1477)がおこり、応仁元年(1467)九月十三日山名宗全が細川勝元邸を攻めた戦火で、災上<sup>26)</sup>してしまった。10年間の戦乱も京中を廃墟として終り、それ以降、群雄割拠の戦国の世となった。浄華院は文明十五年(1483)に再建が始まり、長享元年(1487)八月三日<sup>27)</sup>に落慶供養が行なわれ、本尊が遷座した。また大永七年(1527)十月二十七日に「土御門室町殿在家三十間焼亡<sup>28)</sup>」があり、塔頭二ヶ所を焼失した。

浄華院は皇室の崇敬厚く『建内記』永享十一年(1439)二月二月条に「被<sub>レ</sub>預<sub>レ</sub>置浄華院御文書内、御記一合ッ次第々々可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>御覽也。」とあり、醍醐天皇・村上天皇の『延喜・天曆御記』已下の記録であったことがみえ、天皇の御記を預けられた程の寺格であった。

永禄十一年(1568)、将軍足利義昭を擁立した織田信長は入洛し、ただちに勘解小路室町に二条城を造営して義昭を入城させた。しかし、信長と義昭とは不和となり、天正元年(1573)三月二十三日に義昭は打倒信長の兵を挙げた。信長は反撃にでて、四月三日二条城に籠った義昭への威圧と反信長派の上京町衆を征圧するため、民家に放火した。この時、浄華院も焼亡した。7月18日義昭追放によって室町幕府は崩壊し、戦国の世を統一する第一歩となった。焼失前の浄華院のようすは、狩野永徳が永禄年間(1558~1570)前半頃の京都の町の風景を金地の上に見事に表現した『洛中洛外図屏風』<sup>29)</sup>—天正二年(1574)に織田信長が上杉謙信に送ったものと伝えられている。—に「上げい寺」と表題して、大寺院として描かれている(図版第2上)。

浄華院も復興がなったが、豊臣秀吉の聚楽第の造営に始まる都市改造が行なわれた。天正十八年(1590)から翌年にかけてお土居を構築し、城下町の機能を持たせるため、町並を強制移転させた。浄華院もこのとき土御門烏丸から現在の地に移させられた。跡地は、黄金塗の瓦で葺いた大名屋敷が建ち並んだ。発掘でも、この時代のものと思われる金箔瓦が出土している。文禄四年(1595)七月十五日に秀吉は関白秀次を自害<sup>30)</sup>させ、聚楽第の取り壊して新たな伏見城の

造築をさせた。それにもなつて、大名屋敷の移転が行なわれた。この結果、城下町の構能は消え、もとの上京町組が復旧したが、寺院などは移動した地にそのまま残り、跡地は町衆が住むこととなったのである。

#### 第4節 水戸藩邸

上京組再編成のとき、片山家を始めとする数軒がこの地を獲得したと思われる。寛永十二年(1636)に医師片山意庵が自邸(表口16間余、裏行29間余)を水戸藩に売却した文書が『水城金鑑<sup>31)</sup>』巻2に収録してある。その文書は

京長者町御屋敷之事

水戸中納言様御用<sub>二</sub>付者、拙者家差上候<sub>二</sub>付、御返礼金被<sub>二</sub>下置<sub>一</sub>、慥<sub>二</sub>頂載仕候。御前可<sub>レ</sub>然様<sub>二</sub>仰立可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。以上。

寛永十二年亥極月六日 意庵判居判

三木仁兵衛殿

飯田新衛門殿

伊藤玄蕃殿

水戸中納言様御用<sub>二</sub>本浄慶院町之屋敷、永代<sub>二</sub>指上申候。町役不仕来候。於<sub>二</sub>屋敷<sub>一</sub>已来遊乱候儀無<sub>二</sub>御座候。仍為<sub>二</sub>後日<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>件。

三木仁兵衛殿

飯田新衛門殿

伊藤玄蕃殿

令<sub>レ</sub>啓候。然者 水戸中納言様御用<sub>二</sub>、本浄慶院町之町意庵家屋敷被<sub>二</sub>指上<sub>一</sub>候様<sub>二</sub>、拙者肝煎申候。何方<sub>二</sub>も申分無<sub>レ</sub>之、家屋敷<sub>二</sub>而<sub>一</sub>御座候間、右之通御年寄衆へ慥<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰上<sub>一</sub>候。依如<sub>レ</sub>此<sub>二</sub>候。恐惶謹言。

亥極月六日 角倉与市居判

佐藤久兵衛殿

松屋藤衛門殿 人々御中

請取相渡金子之事

合大判百枚、但<sub>レ</sub>今極也。

此銀四拾七貫八百目

但<sub>レ</sub>大判壹枚<sub>二</sub>付、銀四百七拾八匁<sub>一</sub>。

とある。意庵は、屋敷地を銀47貫800匁で水戸家へ売却した。また角倉与一も請状をだしている。さらに水戸家は宝永五年(1708)に南側の宅地を買得し、屋敷地を拡げた。このときの文書も『水城金鑑』巻2に収められ、

上長者町通室町東江入町南側

12 第4節 水戸藩邸

水戸様御屋敷西隣<sub>ニ</sub>而 吉右衛門所持之屋敷一ヶ所<sub>表口貳間半壹尺五寸余裏行六間半余</sub>

右之屋敷地、今度御所望被<sub>レ</sub>成候<sub>ニ</sub>付、吉衛門差上被<sub>レ</sub>申候。為<sub>ニ</sub>其代地<sub>一</sub>東之方出張之所、表口貳間半・裏行拾間五尺之所、金子千六兩相添被<sub>レ</sub>指遣<sub>ニ</sub>候。溝之儀者、今度者吉衛門仕候。自今以後、破損之儀者、西之方ハ御屋敷<sub>ヨリ</sub>又可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>ニ</sub>候。此屋敷<sub>ニ</sub>付、以後乱妨申者、少も無<sub>ニ</sub>御座<sub>一</sub>候。諸事家役・町役等之儀者、只今迄之通、吉衛門替地<sub>ニ</sub>而 為<sub>ニ</sub>相勤<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>申候。御屋敷一ハ、少も構申儀無<sub>ニ</sub>御座<sub>一</sub>候。依<sub>ニ</sub>而<sub>一</sub>年寄・五人組加<sub>レ</sub>判如<sub>レ</sub>件。

宝永五年酉九月 屋敷主吉衛門印  
 年寄市郎兵衛印  
 五人組市兵衛印  
 水戸様御役人 同 市兵衛印  
 畠山佐左衛門殿

とある。拡大した屋敷地の様子が、平安博物館蔵『洛中洛外図』にみえている(図版第2下)。この図は享保六年(1721)頃の模様を現している。それによると通りは土御門に面し、南に拡大したと思われる部分が東側に少しつき出されている。発掘で南北に一列の石組や、食事用の貝類等の生活物が多数出土している。

藩邸の機能としては、第2・3表で示したように、公家との婚姻による掛りが重要な位置を示めていたと思われる。光圀の皇室崇拝による意向が受け継がれていたわけである。それが大日本史の編纂に象徴されている。編輯にともない水戸学派と京都の伊東仁斎の古学派と交渉も深く、古学派の学者たちを水戸の彰考館に招聘している。さらに公家達の祖先の日記類を採訪書写を行なって、大日本史の史料としている。これらの仕事を藩邸では、担っていたのである。

第2表 水戸家と公卿との婚姻関係・1  
 (『徳川諸家系譜』より)

城主	室	室ノ父
綱條	季君	右大臣今出川規公
宗翰	絢君	准后一条兼香
治保	八代君	准后一条道香
斉昭	吉子女王	有栖川宮熾仁親王
慶篤	熾子女王 鋭姫(継室)	有栖川宮熾仁親王 内大臣広幡基豊

第3表 水戸家と公卿との婚姻関係・2  
 (『徳川諸家系譜』より)

城主	姫	婿
治保	嘉君 国君	左大臣二条治孝 内大臣今出川実種
治紀	順君 鄰君	左大臣二条齐信 関白鷹司政通
慶篤	茂君	有栖川宮熾仁親王

第5節 幕末維新

嘉永六年(1853)六月の浦賀にペリー来航、翌年の日米和親条約の調印による江戸初期以来の鎖国政策が終焉し、開港へと大転換がなされた。これに反対し、尊皇攘夷を唱えていた長州藩

は、文久三年(1863)八月十八日の政変で、公武合体派の公卿・諸大名のために、それまで行っていた御所警備を解任され、京都から追われた。このとき尊皇攘夷派の三条実美等七人の公卿たちも長州へ逃れた。これが七卿都落として有名な事件であった。

この屈辱を雪がため、翌年七月十九日に、長州藩の家老福原越後等が兵を率いて入洛した。来島又兵衛を隊長とする遊撃隊は、蛤御門を守護する会津藩兵を敗走させたが、再び薩摩と桑名両藩により撃退されてしまった。この戦いにより京都は兵火で大被害をうけた。この事件を蛤御門(禁門)の変と呼ばれている。長州藩の敗北により、第一次長州征伐が行なわれた。これらの一連の事件は、太政奉還から明治維新へと連動する契機となったのである。

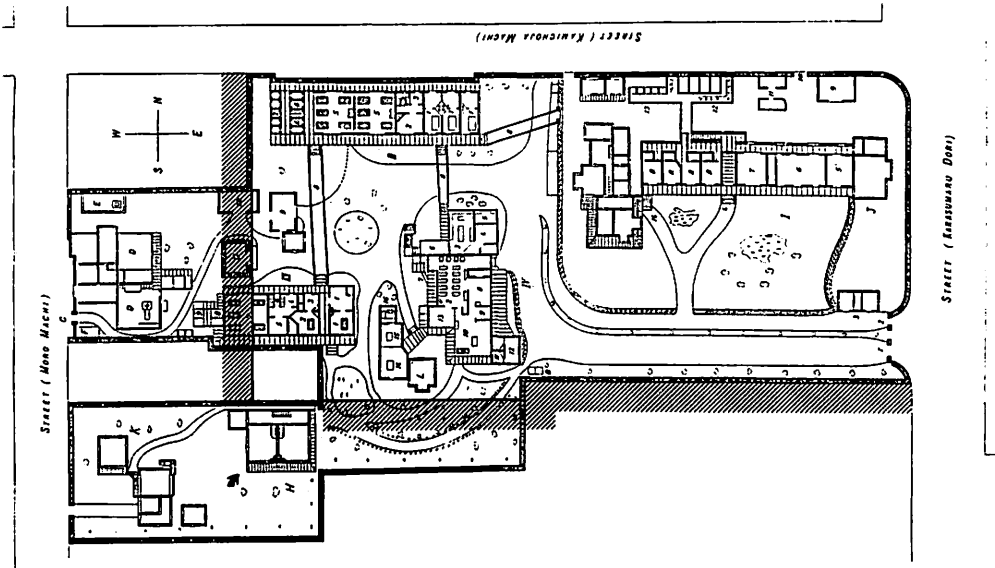
幕末動乱期において、朝廷が歴史の舞台に登場すると、各大名が多数の家来をともなって京に参集し、本陣を各寺院に定めた。大部分の藩は京都に屋敷を持っていたが、規模も小さく、藩主が宿泊・政務に適さなかったこと、門跡寺院などにみるように朝廷と長年の深い関係があることにより寺院を利用し、朝廷内部に取り入りやすかったことが、大きな理由であった。水戸藩も宿泊を本圀寺に定めた。

本圀寺は現在、山科区御陵大岩(昭和46年移転)に伽藍をかまえるが、もと堀川小路西・六条坊門小路南に位置する洛中法華二十一ヶ本山の一刹である。元和元年(1615)に徳川家康より寺領安堵うけた。さらに貞享二年(1685)徳川光圀が母の追善供養を行なって以来、水戸藩から庇護をうけ、それまでの本国寺から「国」の字を改め、本圀寺とした。この因縁より、水戸藩がこの寺を宿泊に決めたのである。

水戸藩邸も蛤御門の変の戦いで全焼してしまった。寛永五年(1628)三月、天明八年(1788)一月、嘉永七(安政元)年(1854)四月等にも火災に遇った。そのつど再建されたが、この変以降完全な再興は行なわれなく明治に入った。

## 第6節 明治以降

明治維新以後、水戸藩から所有権移転が如何に行なわれたか不明であるが、明治十八年に同志社看護学校がこの地に開校し、明治二十八年まで授業が行なわれた。第5図はその敷地概要であり、図中Hと記されている2階建西洋人病室は、調査地区に接して現在でも残っている。同志社看護学校閉校後は京都産院として引き継がれたが、その後京都新聞の前身である日出新聞社社長後川文蔵氏の所有に帰す。敗戦後は米国駐留軍によって接收されたが、返還後昭和二十八年四月民生会館となる。そして昭和四十三年京都新聞社の所有となり、今回の発掘終了後、京都放送会館が完成した(図版第1上)。



第5図 同志社看護学校(註32文献より, 枠内は調査地区)

註

- 1) 『日本後紀』延暦二十四年十二月七日条。
- 2) 同上, 延暦二十四年十二月十日条。
- 3) 瀧浪貞子「一条大路の北上一初期平安京の構造(その二)一」(『京都市史編さん通信』No. 164所収, 京都, 昭和58年)。
- 4) 瀧浪貞子「第二次平安京の成立一初期平安京の構造(その三)一」(『京都市史編さん通信』No. 165所収, 京都, 昭和58年)。
- 5) 「太政官符」延喜二十一年二月五日付(『類聚符宣抄』巻第4所収)。
- 6) 『殿暦』永久五年六月九日条。
- 7) 『永久五年遷幸記』(宮内庁書陵部蔵)。
- 8) 「土御門敷地寄進文書」(『大日本古文書, 家わけ第十七, 大徳寺文書之四』1542号文書)。
- 9) 『中右記』元永元年元旦条。
- 10) 『百鍊抄』大治四年元旦条の割注に「雖、有内裏-, 於、里内、有、此事-。」とある。
- 11) 『中右記』大治四年十二月八日条。
- 12) 同上, 大治四年十二月二十四日条。
- 13) 同上, 大治五年三月四日条。
- 14) 『百鍊抄』長承二年十二月条。
- 15) 同上, 保延四年二月二十四日条。
- 16) 同上, 同条。
- 17) 同上, 保延四年四月十九日条。
- 18) 同上, 保延四年十一月二十四日条。
- 19) 同上, 保延六年十一月四日条。
- 20) 同上, 永治元年十二月七日条。
- 21) 『本朝世紀』久安四年六月二十六日条。
- 22) 『百鍊抄』久安六年正月四日条。
- 23) 詞書は『統群書類従』巻第784に所収。
- 24) 『後愚昧記』康安元年四月三日条。
- 25) 『勅撰作者分類』
- 26) 『宗賢卿記』応仁元年八月十三日条。『経覚私要鈔』応仁元年九月十六日条。
- 27) 『親長卿記』長享元年八月三日条。
- 28) 『二水記』大永七年十月二十七日条。
- 29) 重要文化財指定(上杉本と通称す)。
- 30) 『言経卿記』文禄四年七月十六日条。
- 31) 彰考館蔵。小宮山楓軒編, 文政十二年成, 全43巻補遺6巻。
- 32) *The seventh annual report of the Doshisha mission hospital and Training school for nurses* (Kyoto, 1893).
- 33) 近畿放送株式会社提供資料による。

## 第4章 発掘調査の経過(第1・6・7図, 図版第1・3・4参照)

発掘調査地域は、烏丸通・室町通・上長者町通・下長者町通に囲まれた四角い地域の、北半分の中央と東側を占め、東西に長い長方形を呈している(第1図)。その広さは、東西約82m、南北約50mで、約4000㎡である。このうち建設予定建物の大きさとプランから、第6図に示す約3000㎡が発掘調査の対象となった。その地籍は次のとおりである。

京都市上京区烏丸一条下ル竜前町600-1

同 市同 区上長者町通烏丸西入ル元浄花院町578,578-1,587

同 市同 区室町通上長者町通下ル清和院町552,556-1

発掘調査地域の南には京都私学会館があり、その敷地内には『土御門内裏跡』の石柱が建てられている(図版第1下の1)。またその南の下長者町通北側歩道上には、『水戸藩邸跡』の小石柱が立てられている(同3)。発掘調査地域と京都私学会館の西側は人家が密集しており、室町通に面した私邸には、『清和院 土御門内裏址』の石柱が建てられている(同2)。

発掘対象地区には、真南北方向を基準にした4m四方のグリッドを全域に設定することとし、南北に1~10列、東西にA~O列を設定し、各グリッド名は、これらの数字とアルファベットを組み合わせて用いることとした。平安京条坊復原の成果によれば、土御門大路の南側築垣跡が2列南半から4列北半に推定され、これより北は土御門大路であり、南側は土御門烏丸内裏跡である(第6図)。しかし1・2列の西寄りA~Gまでは建物建築予定地とはなっておらず、残念ながら調査対象外となった。ここに調査事務所を設定した。

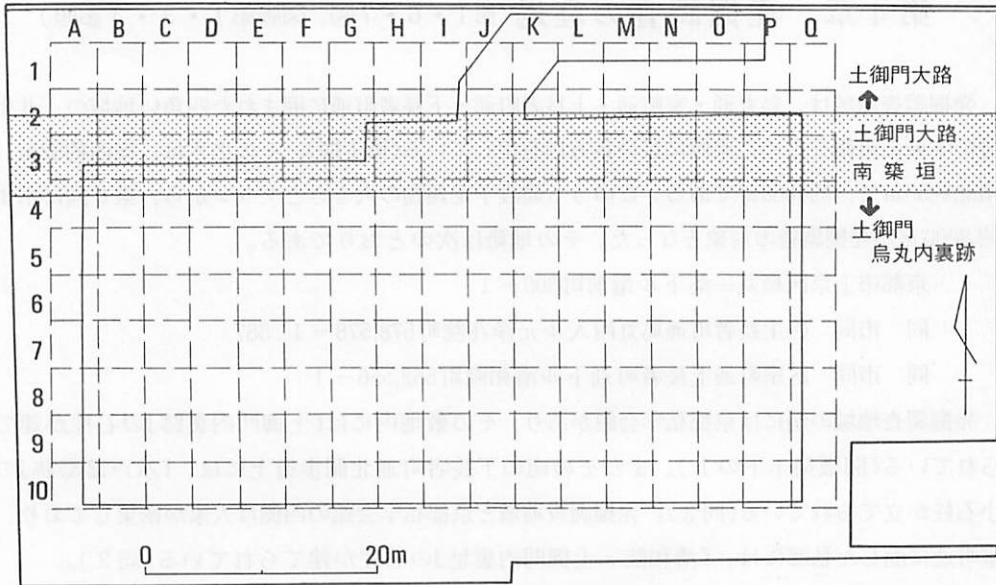
発掘作業は、1979年1月10日より着手し、同年5月31日に終了した。

作業はまず基準杭の杭打ち作業から始まり、ついで基本的な層序を観察するため、発掘調査区の東西と中央とに南北に、A列・H列の西半とO列東半とに2m巾のトレンチを設定し、深さ2m、部分的には3mまでユンボで掘削した。3トレンチは、それぞれ西・中央・東トレンチと名づけられた(第7図)。

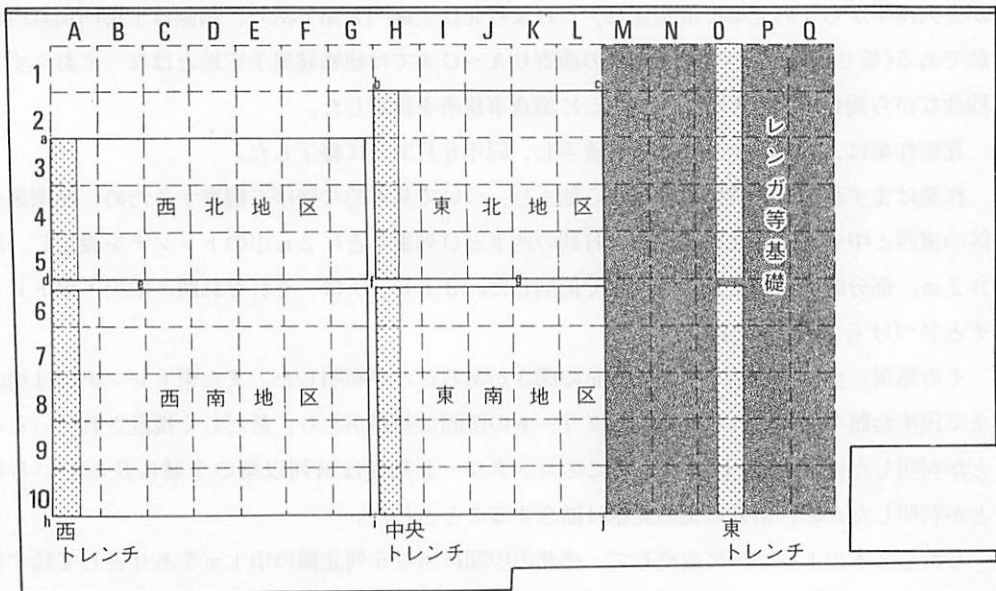
その結果、全体に地山までは約3mの深さがあることが判明した。また東トレンチには地山まで民生会館のものとみられるコンクリートの堅固な基礎があり、甚だしく攪乱されていることが判明した(図版第4上)。そしてこのコンクリート基礎はM列以東の全域に及んでいることが判明したため、M列以東の発掘は断念することとした。

これら3本のトレンチに直交して、南北の中間に当る6列北側の巾1mをあぜとして残すこととし、また中央トレンチの西に接するG列の東寄り巾1mを南北のあぜとして残すこととし、この2本のあぜによって、全体を4地区に大別することとした。大まかには西南→東南→東北西北地区の順に発掘した(第7図)。

層序については次章に詳しく記すが、幕末の禁門の変による大火の整地層とみられる第3層



第6図 グリッド配置図



第7図 地区の大別とトレンチの位置  
(M以东は発掘中止区, a~jはセクション作成箇所を示す)

が地表下1.2～1.5mに現われることから、この上面までは機械掘りを実施することとし、まず西南と東南地区を掘削した。そして本格的な発掘は、1月22日にまず西南地区から着手した。そしてB列とC列の境界付近に、南北に長い建物の基礎の石列が現われ、水戸藩邸のもとと推定された。さらに第3層下面を掘り下げ、石列の東に長方形の暗渠が検出された、両者は関係があると推定された。この他にも井戸や土壌が多数検出されたが、主にこれら水戸藩邸にかかわる遺構の精査によって作業が遅延し、この間他地区の作業のため度々中断されたこと等があり、第6層下面に検出された平安後期の溝8を発掘して西南地区の全作業を終了したのは、全発掘作業の終了と同じとなった。

西南地区につづき、2月13日には東南地区の発掘を開始した。この地区は近世の攪乱の著しい地区で、平安後期の溝1・2を発掘して4月11日に終了した。

4月18日には、東北・西北地区上部の機械掘りを行ない、24日より東北地区、26日より西北地区の発掘を開始した。東北地区には、東南地区より北に伸びてきた溝2の他に溝3・4の他、土御門大路の道路面が検出され、5月16日に全作業を終了した。

西北地区は、東北地区より西に伸びてきている平安後期の溝3・4等を集中的に調査し、5月23日に全作業を終了した。

そして最初に着手した西南地区も5月31日までかかって終了し、全発掘作業を完了した。

この間約5カ月の長期発掘となり、初期には大雪に見舞われることもあったが、5月の葵祭の頃には御所の大ケヤキなどもうっそうとしてきて、枯木立の間に見えていた比叡山もすっきりみることができなくなり、季節の移り変わりの早さを知らされたことであった。

発掘後特に土御門大路の確認された2H・2Iグリットを中心とする地区に関しては、設計変更等により保存処置をとらえることを近畿放送株式会社に申し入れ、諒解を得られたことは幸いであった。

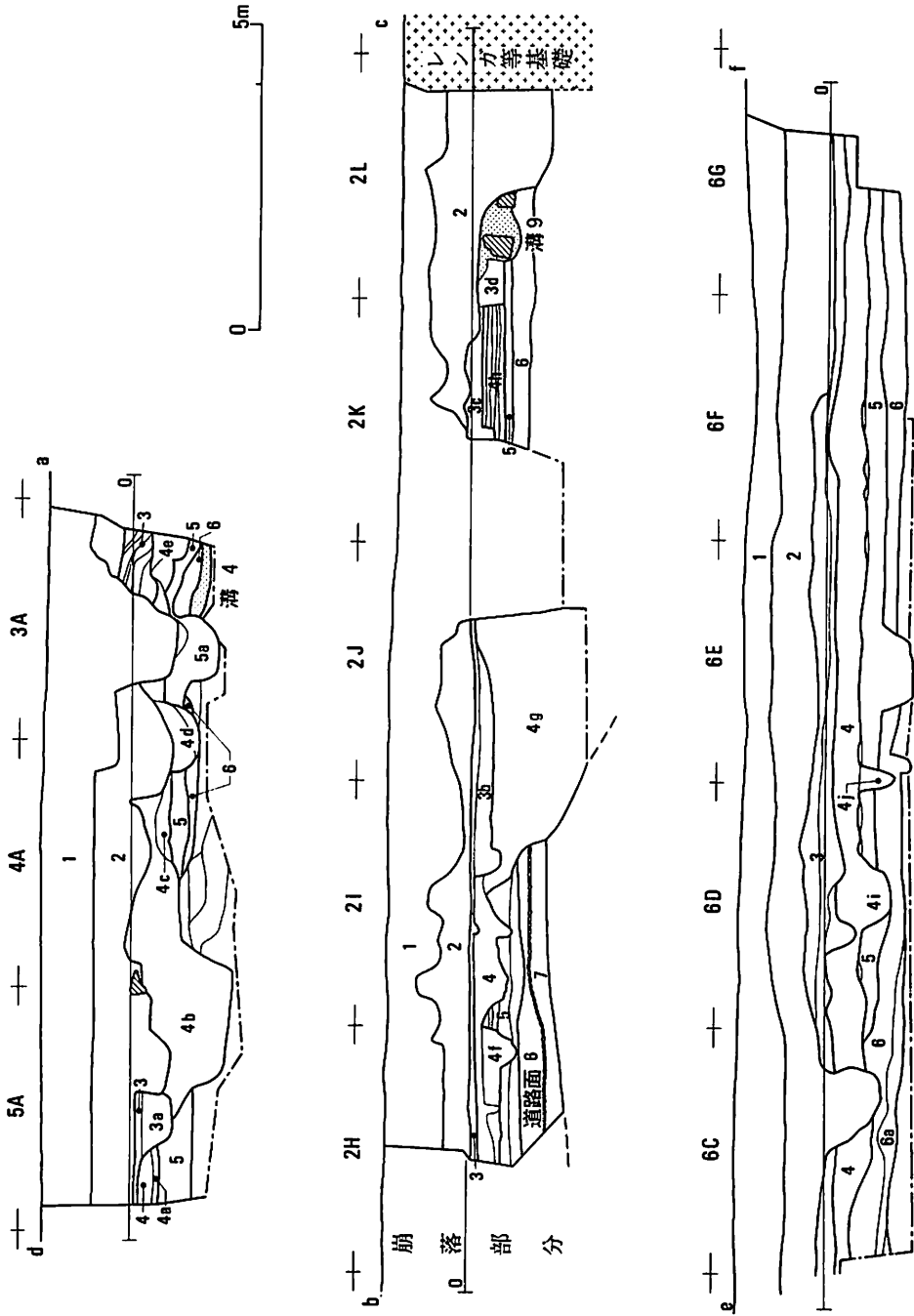


## 第5章 層序と遺構(第4表, 第8~19図, 図版第4~41参照)

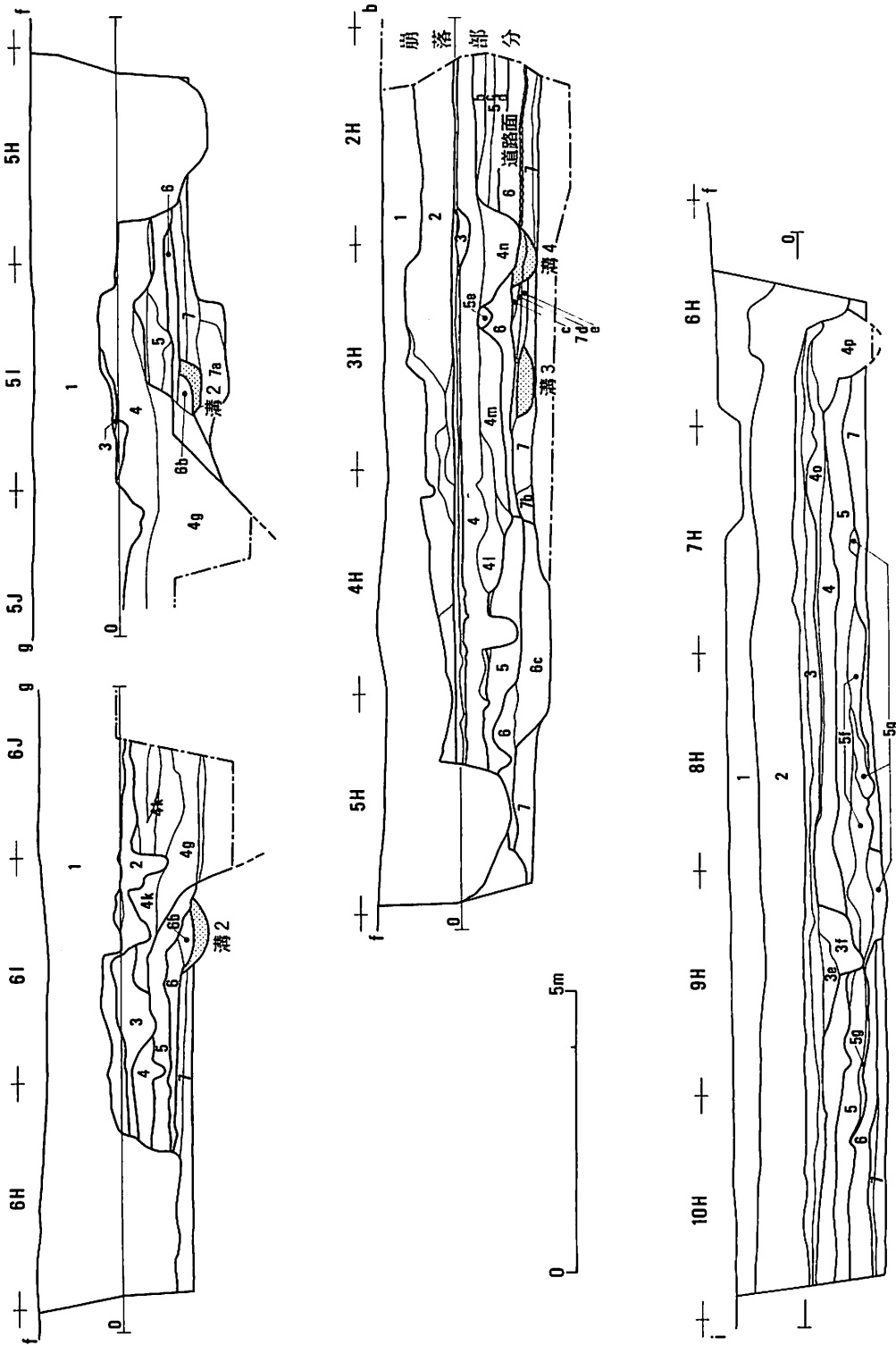
## 第1節 層 序(第8~10図, 図版第4~6参照)

本遺跡の層序は次のとおりである。

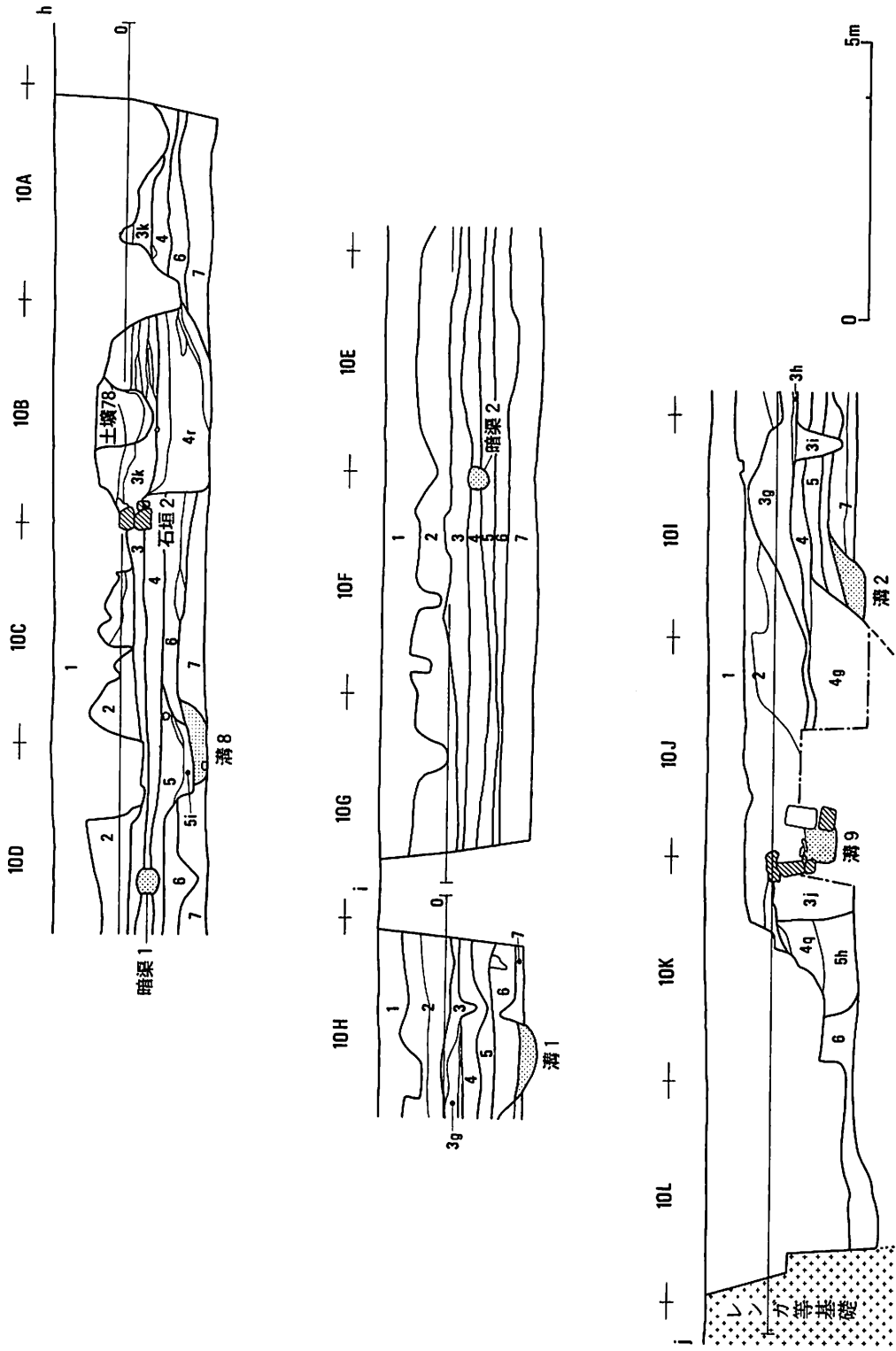
- |                                  |                               |
|----------------------------------|-------------------------------|
| 第1層 表土層                          | 第4 k層 褐色~黄褐色土層…部分的に砂礫土を含む     |
| 第2層 砂礫層                          | 第4 l層 褐色土層(落込み)               |
| 第3層 黄灰褐色~灰褐色の粘質土層群               | 第4 m層 黒褐色土層( " )…径2~3 cmの礫を含む |
| 第3 a層 暗褐色砂土層                     | 第4 n層 褐色土層( " )               |
| 第3 b層 黄褐色粘質土層…下部に小礫を含む           | 第4 o層 暗褐色土層…径2~3 cmの小礫多       |
| 第3 c層 灰褐色土層                      | 第4 p層 褐色砂礫土(落込み)              |
| 第3 d層 淡灰色土層(落込み)                 | 第4 q層 黄褐色粘質砂土                 |
| 第3 e層 暗灰色粘質土層( " )               | 第4 r層 落込み                     |
| 第3 f層 暗褐色粘質土層( " )               | 第5層 茶褐色土層群                    |
| 第3 g層 暗褐色土層…径2~5 cmの礫を含む         | 第5 a層 褐色土層(落込み)               |
| 第3 h層 鉄分を含んだ暗褐色土層                | 第5 b層 砂質土層                    |
| 第3 i層 暗褐色粘質土層(落込み)               | 第5 c層 暗褐色土層                   |
| 第3 j層 溝9掘り方埋土                    | 第5 d層 黒褐色土層                   |
| 第3 k層 石垣1内埋土                     | 第5 e層 暗褐色土層(落込み)              |
| 第4層 暗褐色土層群                       | 第5 f層 褐色砂質土層( " )             |
| 第4 a層 砂層                         | 第5 g層 砂層( " )                 |
| 第4 b層 黒褐色土層(落込み)…底部で鎌倉~室町時代の瓦片出土 | 第5 h層 黄褐色砂質土(落込み)             |
| 第4 c層 明褐色土層( " )                 | 第5 i層 暗褐色粘質土( " )             |
| 第4 d層 青灰色~灰褐色粘質土層( " )           | 第6層 暗茶褐色粘質土層群                 |
| 第4 e層 明褐色~黄褐色土層                  | 第6 a層 砂礫質土層                   |
| 第4 f層 黄褐色粘質土層                    | 第6 b層 茶褐色粘質砂質土層               |
| 第4 g層 暗赤褐色土層(落込み)                | 第6 c層 黒褐色混砂礫土層(落込み)           |
| 第4 h層 砂層・灰褐色粘質土・褐色土の互層           | 第7層 灰褐色粘質土層群…上部は黄色味強          |
| 第4 i層 褐色土層(落込み)                  | 第7 a層 灰褐色粘質土層(落込み)            |
| 第4 j層 褐色土層( " )                  | 第7 b層 茶褐色土層                   |



第8図 層序実測図・1



第9圖 屈序实例图·2



第10図 厩序実測図・3

## 22 第2節 遺構の概要

第7 c 層 灰褐色粘質土層…径3～5 cm

の小礫多

第7 d 層 黄褐色砂礫土層

第7 e 層 褐色混礫土層

第8層 地山の礫層

現地表面下より地山上面までの厚さは場所によって異なり、もっとも薄いところでは2.20m、もっとも深いところでは3.10mに達する。また特に東部寄りでは、第1層の表土層からの攪乱が、広範に地山深くにまで達している。各層の大まかな年代は次のとおりである。

第2層は近代の整地層。厚さ20～40cm。

第3層は、幕末の禁門の変によるドンド焼け後の整地層を主とした江戸時代層。厚さ20～30cm。水戸藩邸関連の石垣は本層より第2層へ少し突出し、暗渠は本層下面より第4層へ掘り込まれている。

第4・5層は中世の層で、それぞれ厚さ10～30cm。

第6層は平安後期の層で、次の第7層との境に土御門大路面が検出された。また溝1～8も、この境界面より第7・8層へ掘り込まれている。厚さ10～25cm。

第7層も平安後期層であるが、東北と東南地区とにのみみられる。厚さ10～20cm。

### 第2節 遺構の概要（第4表、第10～14図、図版第7～41参照）

本遺跡より検出された遺構は、第4表に示す多数の土塀と井戸1～3、および溝1～11、石垣、暗渠、石列等である。これらについて、地区別にその概要を記すこととする。各地区とも最終遺構図を掲げるが、西南および東南地区については、江戸時代遺構が相互にまたがるため、はじめにこれらを一括して記すこととする。

#### 1. 西南・東南地区1（第10・11図、図版第7～9）

先に記したように、第3層は調査地区全域に認められ、江戸時代末期の整地面とみなされる。そして西南・東南地区には、この時期以降に築かれたと思われる石垣・溝・土塀等が多数検出された。これらについては後に記す。

西南地区には、水戸藩邸のものと思われる石垣と暗渠が検出された。石垣は、B・C列の境に南北方向に位置し、北側の石垣1と南側の石垣2とに分れる。石垣2は長さ約3mを測り、南側は調査地外にある。石垣1にくらべ石材も不揃いであり、石垣1に先行するものと思われる。暗渠は、石垣1・2の東方約12～16mのところ、長辺約8m、短辺約6mの周溝とそれから南壁に延びる溝からなり、上部は第3層の粘土層で覆れていた。

西南地区ではほぼ全面に認められた第3層は、東南地区にも同様に検出された。そして第3層群最下位に近い第3g層は1列ほぼ中央で幅約2m、南北方向長さ約12mにわたり土塁状に盛りあがっていた。この部分の横断面は台形を呈しており、南北に通る築地塀の存在したことをうかがわせた（第10図 i-j 断面）。ただし、土塁上の部分の北側が後世の攪乱で明確にできなかったことや、これに伴う遺構が検出できなかったために断定はできないが、一応この部分

第4表 遺構一覽表(石垣,溝,暗渠は除く)

遺構名	地区	大きさ(cm)			時期	出土遺物
		長さ	幅	深さ		
土塙 1	3 A	102	81	—	13世紀	土師皿,土器,瓦類
2	3 A・4 A	89	61	—	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類
3	3 A・4 A・3 B・4 B	236	206	69	—	—
4	3 B	162	88	57	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
5	3 B	131	122	54	—	—
6	3 C	94	68	60	平安?	土器,瓦類
7	3 C・4 C	250	196	62	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,石製品
8	3 E・4 E	62	54	15	12世紀	土師皿,土器,瓦類
9	3 F	110	105	27	14~15世紀	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
10	4 F	256	178	50	14~15世紀	土師皿,土器,陶磁器,軒平瓦,瓦類,石製品
11	4 A・5 A・4 B・5 B	330	145	—	江戸時代	土師皿,土器,瓦類,古銭
12	2 H	—	—	—	—	—
13	2 H	218	149	16	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
14	2 I	84	70	—	中世	土師皿,土器,瓦類
15	2 I	91	70	—	中世	土師皿,土器,瓦類
16	2 I・3 I	266	160	—	16世紀	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
17	4 H	—	—	—	中世	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
18	6 A・6 B・7 A・7 B	470	400	—	明治以降	—
19	6 B・7 B	580	130	—	明治以降	—
20	7 A	115	45	—	—	—
21	7 A	160	38	—	—	—
22	7 A・7 B	146	69	26	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,石製品
23	7 B	100	40	—	—	—
24	7 B	45	30	—	—	—
25	7 A・7 B・8 A・8 B	198	122	30	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品,石製品
26	7 B・8 B	80	65	—	—	—
27	8 B	121	74	26	江戸時代	土師皿,陶磁器,瓦類
28	欠番					
29	8 A	201	138	57	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品,石製品
30	8 A・8 B	48	45	32	—	—
31	8 A・8 B	202	112	18	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品
32	8 B	194	162	104	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品,石製品
33	8 A・8 B	50	48	—	—	—

24 第2節 遺構の概要

遺構名	地区	大きさ(cm)			時期	出土遺物
		長さ	幅	深さ		
土城 34	8 A・9 A	236	111	31	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類 土製品,石製品
35	9 B	126	115	58	—	—
36	9 B	109	70	—	—	—
37	9 B	82	80	—	—	—
38	9 B	225	136	52	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類, 土製品
39	9 A・10 A	316	112	51	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品
40	9 A・10 A	55	50	—	—	—
41	10 A	70	67	18	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
42	10 B	81	64	18	江戸時代	土師皿,陶磁器
43	10 B	79	63	16	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
44	10 A	264	202	87	—	—
45	10 B	285	210	—	—	—
46	10 B	75	70	—	—	—
47	10 B	155	55	—	—	—
48	10 A・10 B	150	38	—	—	—
49	10 B	95	90	—	—	—
50	6 C	111	99	14	江戸時代	土器,陶磁器
51	7 C・7 D	302	110	—	—	—
52	7 D	195	187	77	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類, 土製品,石製品
53	7 C・8 C・9 C	691	185	113	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類, 土製品,石製品
54	8 C	109	101	32	—	—
55	8 D	134	109	28	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
56	8 C	70	65	—	—	—
57	8 D	112	99	91	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類, 土製品
58	9 C	53	53	—	—	—
59	9 C・9 D	163	152	56	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類, 古銭
60	9 C	122	101	29	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品
61	9 D	275	255	—	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
62	9 C・10 C	198	120	31	江戸時代	陶磁器,瓦類
63	9 C・10 C・9 D・10 D	100	92	21	江戸時代	土器,陶磁器,瓦類
64	10 C	85	65	—	—	—
65	10 C	153	140	44	—	—
66	10 B・10 C	100	65	—	—	—
67	10 C	65	50	—	—	—
68	10 C・10 D	154	97	—	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類

土城	69	10D	113	111	33	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品
	70	6F	98	57	21	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	71	6F・7F	198	173	33	—	—
	72	8E	78	72	—	—	—
	73	8E・8F	100	80	—	—	—
	74	8F・9F・8G	395	310	—	—	—
	75	9F	83	81	—	近世	瓦類
	76	10A	170	84	27	—	—
	77	10B	270	220	75	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品
	78	10B	136	84	87	江戸時代	焼塩壺,土製品
	79	6C	120	60	—	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	80	6C	119	118	74	中世	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	81	6C	80	75	—	—	—
	82	6C	68	65	—	—	—
	83	7C	195	111	—	—	—
	84	7C	161	77	5	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	85	7C・7D・8C	250	195	—	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	86	8C	253	164	57	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	87	8C・9C・10C・9D	522	245	20	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	88	9C・10C	157	87	4	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	89	9C・10C	165	95	—	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	90	9C・10C	165	133	—	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品,石製品
	91	9D・10D	410	110	—	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	92	6F・6G	112	101	37	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品,石製品
	93	6F・7F	193	181	26	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類,土製品,古銭
	94	8E	203	113	—	江戸時代	土器,陶磁器,瓦類
	95	8F	—	—	—	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類,古銭
	96	9D・9E	290	218	—	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類,石製品
	97	8A・8B	315	110	—	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	98	7D	—	—	—	江戸時代	土師皿,陶磁器,瓦類,古銭
	99	8D・9D	133	109	23	中世	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	100	9C	128	116	43	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	101	6E・7E	226	175	9	14~15世紀	土師皿,土器,陶磁器
	102	7E・8E・7F・8F	788	480	38	平安後期	土師皿,土器,陶磁器,軒丸瓦,瓦類,石製品
	103	7G・8G	136	132	45	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
	104	8E・8F・9E・9F	215	97	62	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類



26 第2節 遺構の概要

遺構名	地 区	大きさ(cm)			時 期	出 土 遺 物
		長さ	幅	深さ		
土壌 105	9 E	64	62	8	江戸時代	土師皿, 土器
106	9 E・9 F	350	114	8	—	—
107	9 E・10 E	148	124	8	江戸時代	焼塩壺, 土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
108	9 F	96	68	16	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
109	9 E	118	116	11	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
110	9 F・9 G・10 F・10 G	814	446	45	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類, 石製品, 古銭
111	9 G	154	106	19	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類, 土製品, 石製品
112	10 F	65	64	11	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
113	10 G	141	88	30	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
114	6 H	310	140	—	江戸時代	土師皿, 陶磁器, 瓦類
115	6 L	110	90	—	近 世	—
116	8 K	55	53	—	近 世	—
117	8 L	120	60	—	近 世	—
118	8 L	110	60	—	近 世	—
119	欠 番					
120	9 H	150	90	—	—	—
121	9 K	138	133	—	近 世	—
122	9 H・10 H	155	55	—	—	—
123	7 K・7 L	95	88	—	近 世	—
124	欠 番					
125	7 K	60	52	—	近 世	—
126	7 K・7 L	60	40	—	近 世	—
127	7 L	42	40	—	近 世	—
128	7 L	40	35	—	近 世	—
129	7 K・7 L	48	33	—	近 世	—
130	欠 番					
131	8 K	45	38	—	近 世	—
132	8 L	22	20	—	近 世	—
133	8 L	48	40	—	近 世	—
134	7 K・8 K・7 L・8 L	750	560	—	江戸時代	焼塩壺, 土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類, 土製品, 古銭
135	8 K	35	32	—	近 世	—
136	8 K・9 K	40	38	—	近 世	—
137	8 K・9 K	38	30	—	近 世	—
138	9 K	75	60	—	近 世	—
139	9 L	50	45	—	近 世	—

土城 140	9 L	125	110	—	江戸時代	焼塩壺,土師皿,土器,陶磁器,瓦類
141	欠 番					
142	6 H	115	60	43	—	—
143	6 K	145	85	—	近 世	—
144	6 L	160	50	—	近 世	—
145	6 K・6 L	329	160	—	近 世	—
146	6 K・6 L	210	110	—	近 世	—
147	6 L	—	—	—	近 世	—
148	6 L・7 L	390	275	—	近 世	—
149	6 I・7 I	130	75	—	近 世	—
150	7 K	70	55	—	江戸時代	陶磁器,瓦類,石製品
151	7 L	50	38	—	近 世	—
152	7 L	28	30	—	近 世	—
153	7 L	70	65	—	近 世	—
154	7 L	60	35	—	近 世	—
155	7 L	52	28	—	近 世	—
156	8 I	—	—	—	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
157	8 L	170	100	—	近 世	—
158	9 H	140	125	20	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
159	9 K・9 L	305	104	—	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
160	9 L	130	60	—	近 世	—
161	9 H・10H・9 I・10 I	255	118	54	13世紀	土師皿,土器,陶磁器,軒丸瓦,瓦類,古銭
162	欠 番					
163	9 L・10 L	160	140	—	江戸時代	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
164	6 H・6 I	200	105	18	13世紀	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
165	6 I	185	110	34	中 世	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
166	6 H	40	28	16	—	—
167	6 H	45	20	—	—	—
168	6 H	40	40	—	平安?	土師皿,土器,陶磁器
169	6 I	42	30	—	平安?	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
170	6 I	30	30	—	—	土器
171	6 I・7 I	83	60	20	平安?	土師皿,土器,陶磁器
172	7 H	18	18	—	中 世	土師皿,土器,陶磁器
173	7 H	58	50	28	14~15世紀	土師皿,土器,陶磁器,瓦類
174	7 H	48	45	—	中 世	土師皿,土器
175	7 H	50	33	15	中 世	土師皿,土器,瓦類

遺構物	地 区	大きさ(cm)			時 期	出 土 遺 物
		長さ	幅	深さ		
土塋 176	7 I	18	18	—	—	—
177	7 I	35	25	20	—	土師皿
178	7 I	40	38	21	平安?	土師皿, 土器
179	7 H	—	—	—	中 世	土師皿, 陶磁器
180	7 H	85	10	—	—	—
181	7 H	38	30	—	中 世	土師皿, 土器, 瓦類
182	7 H	22	20	—	—	土器
183	7 H	25	20	—	—	土師皿, 土器
184	7 H	45	20	—	12世紀	土器, 軒平瓦, 瓦類
185	7 H	98	60	25	中 世	土師皿, 土器
186	7 I	80	68	19	中 世	土師皿, 土器
187	7 I	48	28	—	中 世	土師皿, 土器, 瓦類
188	欠 番					
189	7 H	50	50	20	—	土師皿
190	7 H	75	10	—	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
191	7 H	10	10	—	—	—
192	7 H	45	20	25	—	土器
193	7 H	42	20	—	—	—
194	7 H	30	20	—	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器
195	7 H	55	23	—	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
196	7 I	80	80	24	平安?	土師皿, 土器
197	7 I	75	48	—	12世紀	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
198	7 H・8 H・9 H・10 H	—	—	—	—	—
199	8 H	—	—	—	—	—
200	8 H	35	35	15	中 世	土師皿, 土器, 瓦類
201	8 H・8 I	260	250	5	中 世	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類, 土製品
202	8 I	55	55	20	中 世	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
203	8 I	105	80	35	中 世	土師皿, 土器, 瓦類, 石製品
204	8 I	60	28	30	中 世	土師皿, 土器, 土製品
205	8 I	70	45	10	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
206	8 I	40	35	15	中 世	土師皿, 土器, 瓦類
207	8 I	150	115	30	中 世	土師皿, 土器, 瓦類
208	8 H・9 H	210	120	—	—	—
209	10 H	230	110	5	中 世	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
210	10 I	230	30	25	14~15世紀	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類

土塚	211	9 I	184	32	—	中世	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
	212	9 I	88	48	—	中世	土師皿, 土器, 瓦類
	213	8 L	—	—	—	江戸時代	焼塩壺, 土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類 土製品
	214	9 L	—	—	—	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
	215	7 I	—	—	—	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
	216	9 H	—	—	—	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
	217	8 H	38	20	—	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器
井戸	1	4 C	120	120	—	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
	2	10 C	85	85	—	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類
	3	9 I	110	120	—	江戸時代	土師皿, 土器, 陶磁器, 瓦類

を水戸藩邸の東限としておきたい。

東南地区の東半は、民生会館の基礎と、石組溝(溝9他)が検出された。M列からO列に検出されたレンガ基礎は、東北地区においても同様に認められ、その規模等から民生会館のものと判断された。いずれも、地山を掘り込んで築かれており、これらの撤去は困難であったため、M列より東の調査は断念せざるをえなかった(図版第4上)。溝9は、J列とK列との境に南北方向に認められた石組の溝である(図版第8)。そしてこの延長は東北地区においても検出された。この石組溝は一辺30~50cm前後の石材を用いており、幅60~80cm、深さ約60cmを測る。時期は江戸時代から明治時代にかけてのものであろう。また、溝9より東側(K・L列)には、溝9につながる東西方向の小溝(溝10・11, 図版第9上)や土塚、石敷などが多数検出された。これらのことから、溝9は西側の水戸藩邸と東側の町屋とを画するものであったと考える。

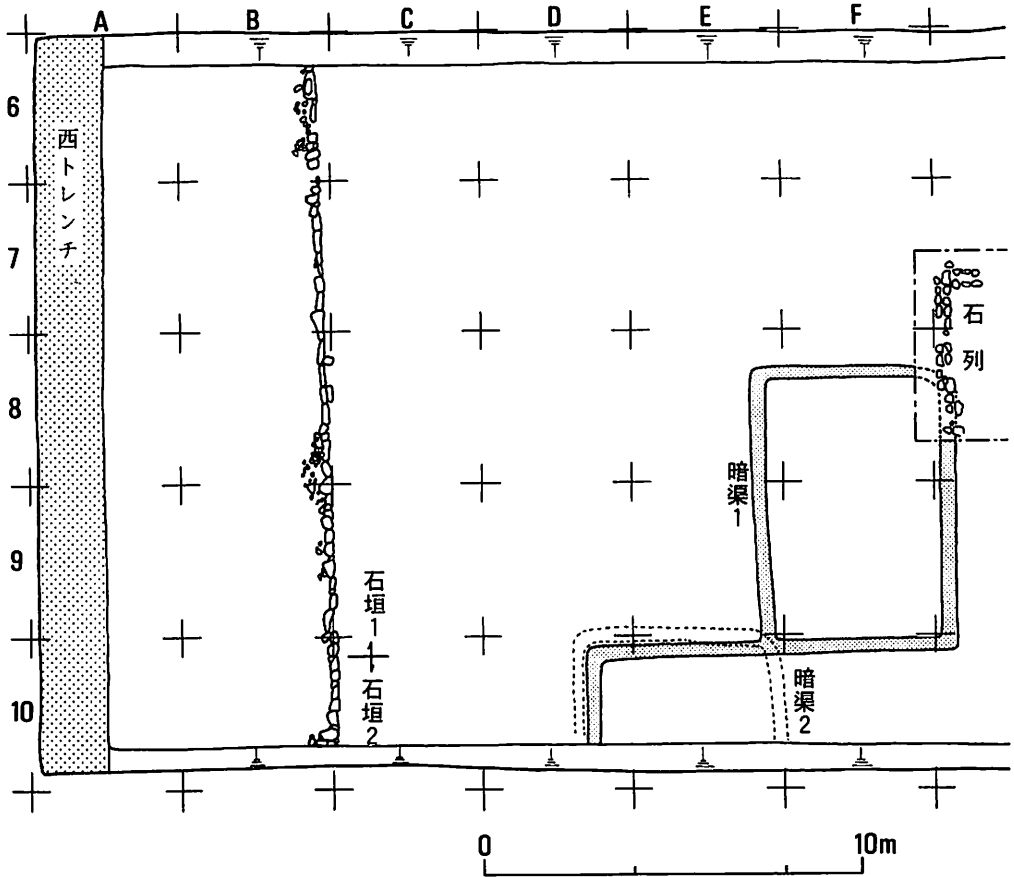
また西南地区の7G~8G区には、南北に長い逆コ字状の石列が、第4層と第5層の境界面に検出され、中世の建築遺構に関連するものと考えられる(図版第9下)。上面の平坦な四角い石を2列に並び、南北の長さ4.6m、幅1.2mである。

## 2. 西南地区2(第12図, 図版第10上)

前項で記したものの他に、本地区で検出された遺構には、平安時代の溝(溝8)と土塚がある。土塚は、近世のものが大半をしめるが、一部平安時代後期のものと思われるものもある(土塚102)。これは、長径778cm、短径480cm、深さ38cmの不定形の大型土塚である。しかし、溝に関連するような建物などの遺構は検出されなかった。

## 3. 東南地区2(第12図, 図版第10下)

ここでは、溝9以東をのぞく6~10・H~J区について記す。なお、I列の一部とJ列は東北地区と同様に、第4層からの落込み部分が認められた。したがって、第7層・地山面の遺構はH列・I列に位置する。検出された遺構には、溝2条(溝1・2)、土塚数基がある。溝2は、6I・7I区で攪乱を受けるが、北部は東北地区に続く。南部は調査範囲外にある。溝1



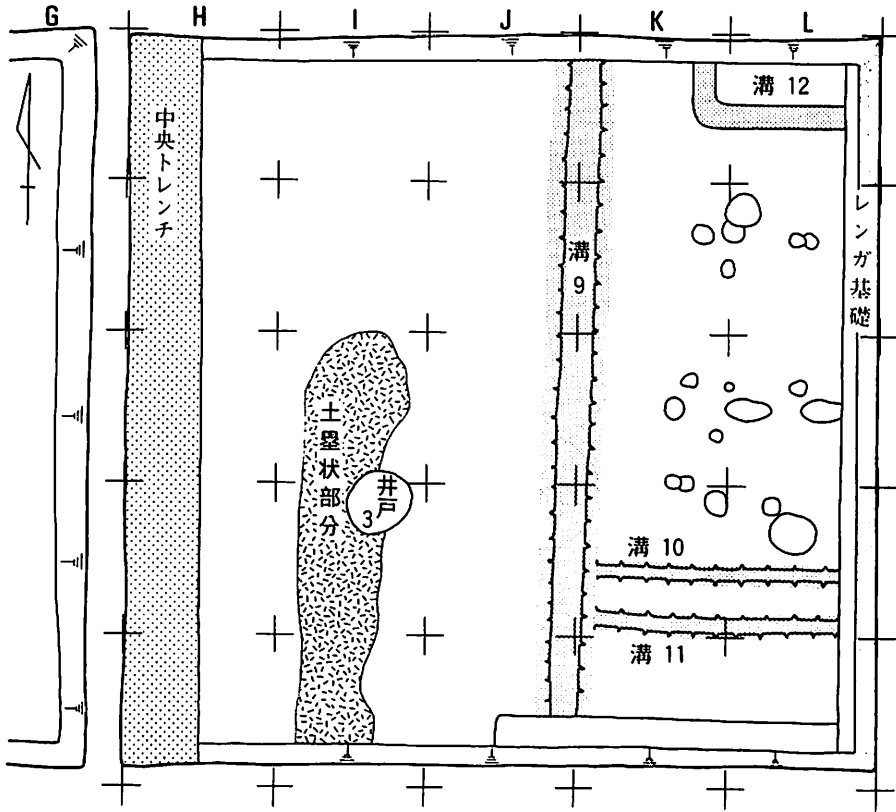
第11図 西南地区，東南地区全体図・1

は7H区で終わるが，南部は調査地外にある。いずれも平安後期の溝である。土壌は，溝1の西側に南北方向で位置する。その西半は東南・西南地区の境にあるため全容は不明であるが，中世の土師皿が多量に出土している。このほかは，溝1・2の間に小土壘が数基散見するのみである。

#### 4. 東北地区(第13図，図版第11上)

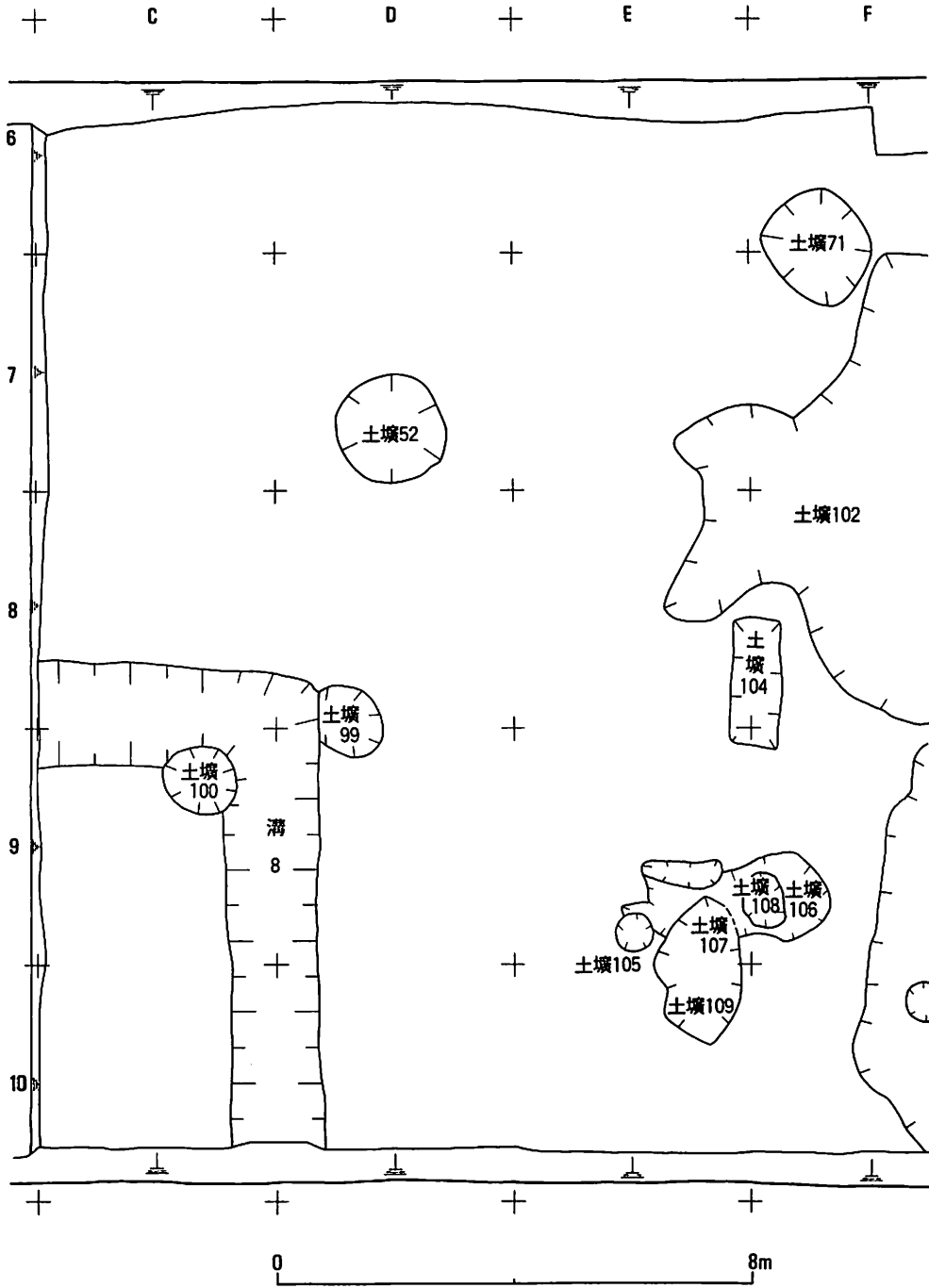
東北地区は，2～5・H～O区であるが，前記のようにM～O列は民生会館の基礎の部分に当たっている。また，K・L列も江戸時代の東南地区と同容である。したがってここでは，2～5・H～J区について記す。

東北地区の第7層・地山面での遺構の検出状況は，I列東部からJ列にかけて第4層の落込みが認められたため，調査区の西側3分の2ほどに限られる。おもな遺構には，溝3条(溝2・3・4)，土壘3基(土壘12・13・16)の他，道路面と思われる石敷面が2H・3H・2I区に確認できた。土壘はいずれも近世のものと思われ，溝に伴うような遺構は検出できなかった。

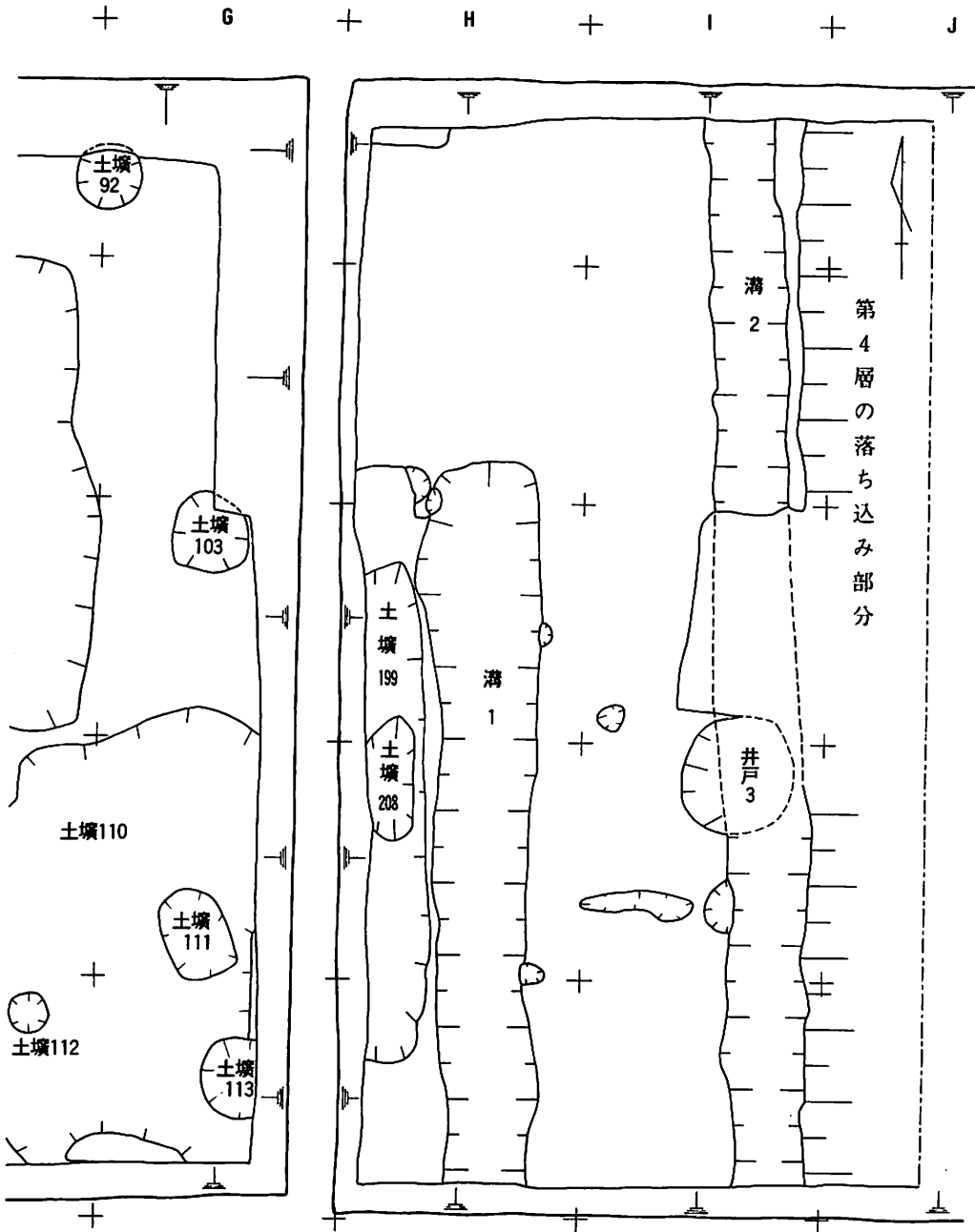


5. 西北地区(第14図, 図版第11下)

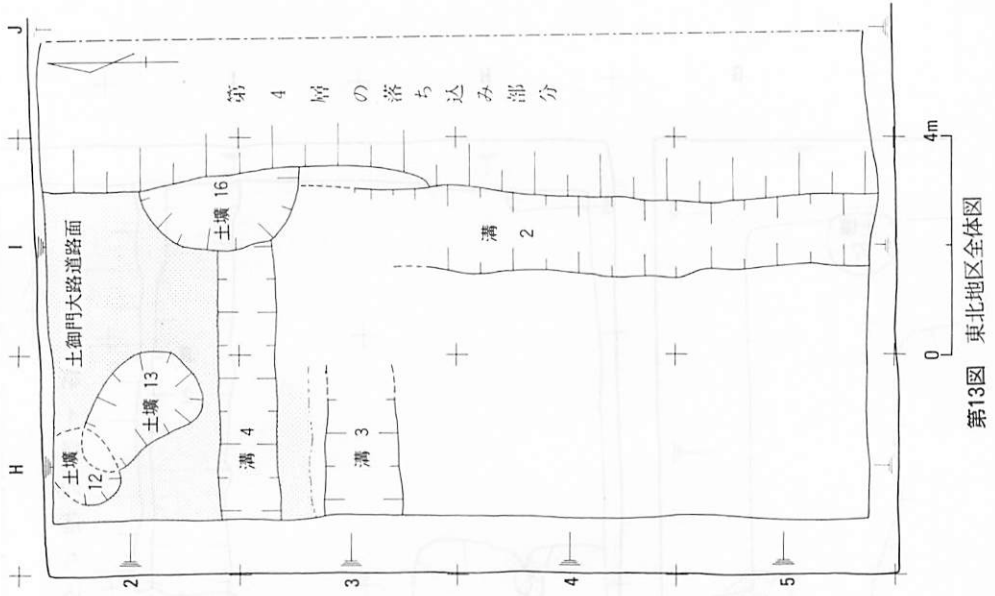
西北地区は、3～5・A～G区である。後述する東北地区で検出された溝4を確認するためにできる限り北側へ掘り拡げた。その結果、溝4の延長を西北地区西壁まで確認したが、北半は調査地外にあるため全容は不明である。また、溝6は西北地区ほぼ中央第4列を東西に通る溝であるが、その東端は、東北地区との境界で終結しているものと思われる、東北地区では検出できなかった。また、その西端は、4B・5B区の浄化槽のためそれより西側の状況を明確にできなかった。また、近世の井戸(井戸1)、近世の土壌数基が検出されたが、溝に伴う遺構は検出できず、平安時代末から鎌倉時代の土壌2基(土壌1・10)が確認できたのみである。



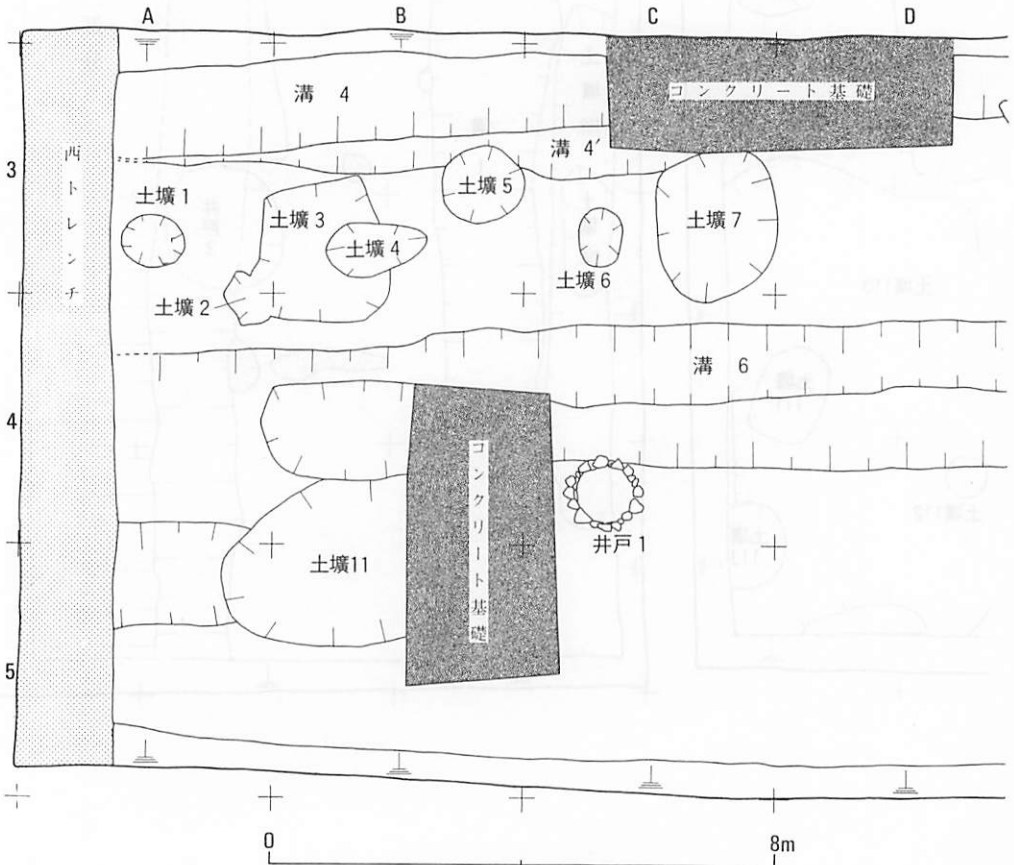
第12図 西南地区，東南地区全体図・2







第13図 東北地区全体図



第14図 西北地区全体図

第3節 平安時代の遺構(第11～16図, 図版第5・10～22参照)

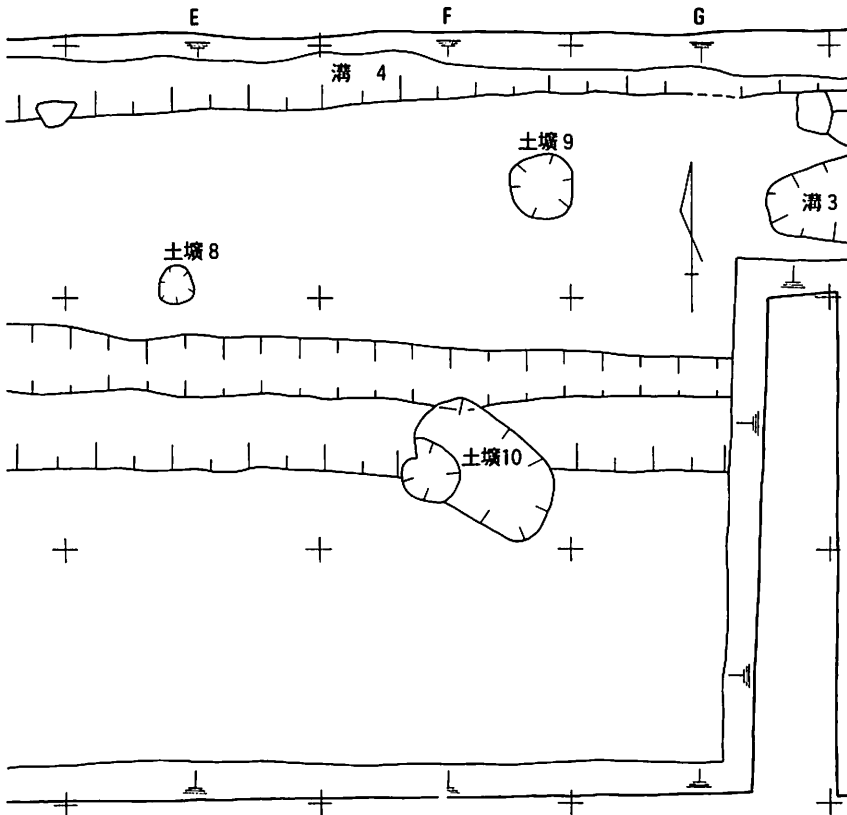
平安時代の遺構は, 溝1～8(ただし5・7は欠番)と, 土御門大路の道路面等が検出された。まずはじめにこれらを個別に通観することとする。

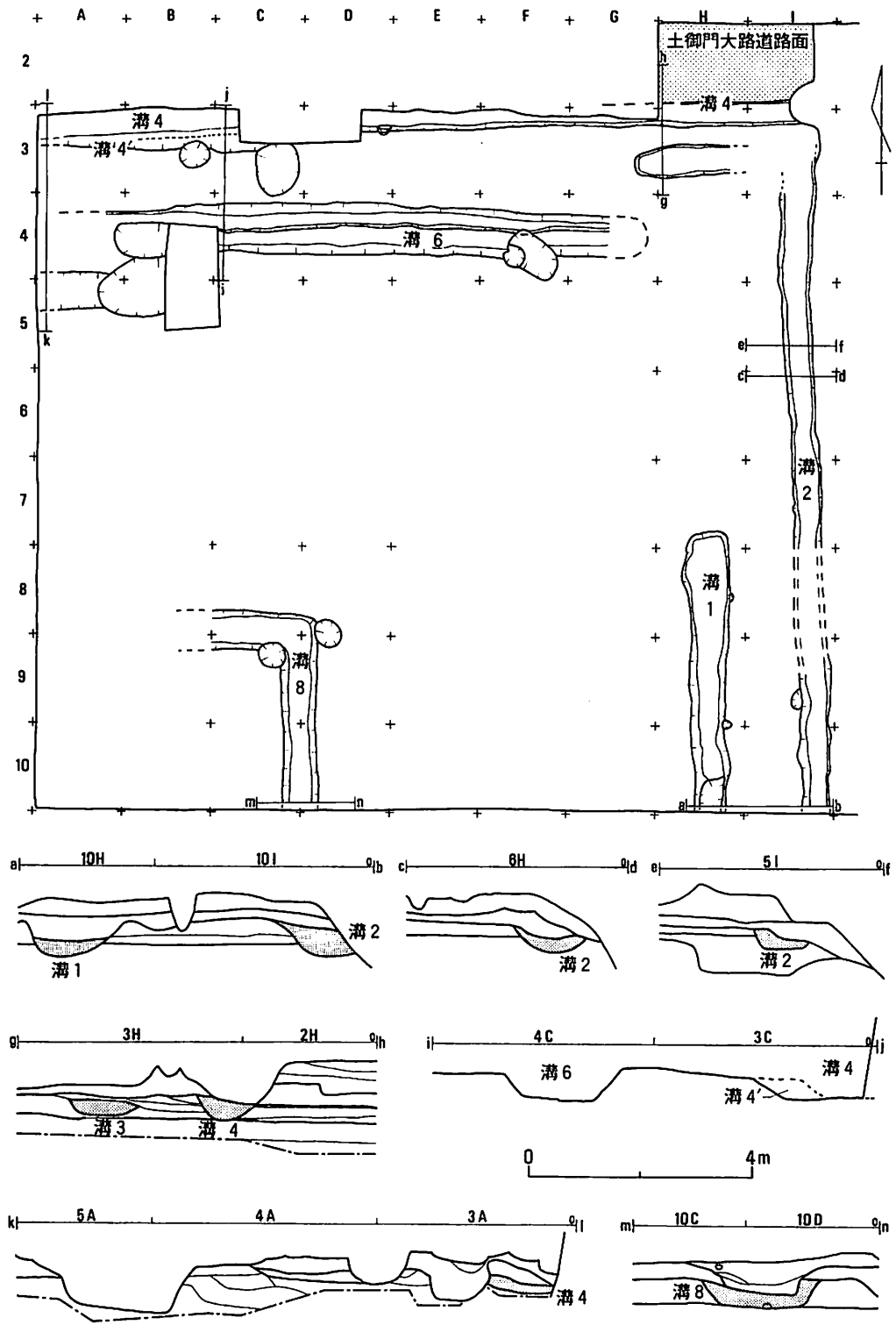
1. 溝1(第11・15図, 図版第12～14)

7H～10H区に, 南北方向に走る。方角はほぼ真南北に近く,  $N 1^{\circ} W$ である。北は7H区の南端でゆるやかに立上り, 南は調査区域外に及んでいる。確認できる長さは南北12.3mで, 幅は1.4～2.2mである。溝の深さは南へ向うほど深さを増し, 10H区南壁下では65cmをかぞえる。溝底の幅は0.9～1.9mで, 北ほど広い。

2. 溝2(第11・12・15図, 図版第6上・12～15)

3I～10I区に, 南北方向に走る。方角は真南北よりやや西に偏き,  $N 3^{\circ} W$ である。北は土御門大路や溝4からみて2I区には及んではないことは明らかであるが, その末端部分の詳細は, 作業上のミス等によって明確にはなし得なかった。南は調査区域に及んでいる。





第15図 溝1～8全体平面図と断面図

溝2と第4層から掘り下げられたすぐ東側に接して走る溝によって、東側の掘り方は旧状をとどめていない。少なくとも1.7m以上あったことは確実であり、溝底の幅は0.6~1.2mである。深さは10I区南壁下では70cmをかぞえる。5I区で深さは37cmであるが、溝底は20cmの落差がありその傾斜は1000分の7である。

### 3. 溝3(第13・15図, 図版第22下・13上・16~19)

G3~H3区に、東西方向に走る。確認できた長さは4.2mにすぎない。西端はG3区で立上っており、その限界は明らかである。これに対し東側は当然溝2との関係が問題になるが、すでに記したように明確にはなし得なかった。しかし溝2の延長には溝4の掘り方が残存しているので、直角に曲がって溝2と溝3が1連である可能性は大きい。

溝の幅は1.2~1.4m、溝底の幅は1.32~1.52mで、深さは28cmである。

### 4. 溝4(第13~15図, 図版第4下・5・12右・13上・16~18・20・21)

2A・3A区の境から2I・3I区の境にかけて、東西方向に走る。西端は調査区域外に延びており、東端は第4層からの掘り込みによって切られている。確認できた長さは29.4mであるが、その大部分を占めるA~G列までは、北側が調査区域外に属し全掘することはできなかった。全掘することのできたH・I列の北側には、土御門大路道路路面が検出されている。この地区でみると、溝の幅は1.2m、溝底の幅は0.2~0.9mで、深さは45cmである。

第15図g-h断面でみると、溝4は溝3をおおう7c~7e層を切っており、溝3より新しいことがわかる。

また3B~3Cにかけて、溝4によって切られている溝4'の南側の掘り方が検出されている。

### 5. 溝6(第14・15図, 図版第20)

4A区から4G区にかけて、東西方向に走る。西端は調査区域外に延びる。東端はセクションベルト下にかかり確認できなかったが、東北地区の4H区ではまったく確認できなかったの、4G区で終わっていると考えられる。確認できた長さは22.4mである。

溝6は幅1.8~2.4mあるが、重複しており、北側がより新らしいらしく、溝の深さは南側が45cm、北側が50cmとやや深い。溝底の幅は南側が0.6~0.9m、北側が0.4~0.55mである。しかしこの分層的調査はやや不十分で、出土遺物は一括して記すこととした。

### 6. 溝8(第12・15図, 図版第6下・10上・22左)

8C区から10C・10D区にかけて、逆L字状に検出された。南北方向はほぼC・D列の境界線上にあり、確認できた長さは8.4mで、南側は調査区域外に延びている。西へ直角にまがった部分は、石垣の下にはいりそれより西は調査できなかったため、確認できた長さは4.0mにすぎない。溝の幅は1.4~1.8m、溝底の幅は0.75~1.2mで、深さは50cmである。

### 7. 土御門大路道路路面(第13・15図, 図版第5・16・17)

2H・2Iの2区において、溝4の北側全域に砂礫を密集して敷きつめた道路敷が検出された。平安京の条坊復元と溝4との関係から、これを土御門大路道路路面とみることができ。こ

の北側と西側は調査区域外に当り、東側は第4層からの深い掘り込みと土壌16とによって欠失している。また敷石面の西側中央も、土壌12・13による大きな欠損部分がみられる。また、砂礫は溝4の南側にも若干みられる。その高さは海拔47.7～48.0mである。

次にこれらの相互関係を検討することとし、その埋没年代をまず明らかにしておく必要がある。この前提として、出土した土器類と瓦類の年代観を要約すると次のとおりである。なおこれらの詳細は、次章の第1・2節を参照されたい。

土器類を担当した森田氏は、灰釉陶器・山茶碗の他に、各溝に普遍的に出土した土師器皿に注目し、11世紀中～後半を中心とするa類と、12世紀末期を中心とするb類の比率を算出している。これによると、溝4・8はb類が87～88%を占め、溝1・6は61～64%、そして溝2では逆転して17.8%を占めるにすぎない。しかし各溝ともb類を出土しているのであるから、この比率は時期差の他に使用継続期間の長短や底ざらえの程度を反映するものとみなされる。

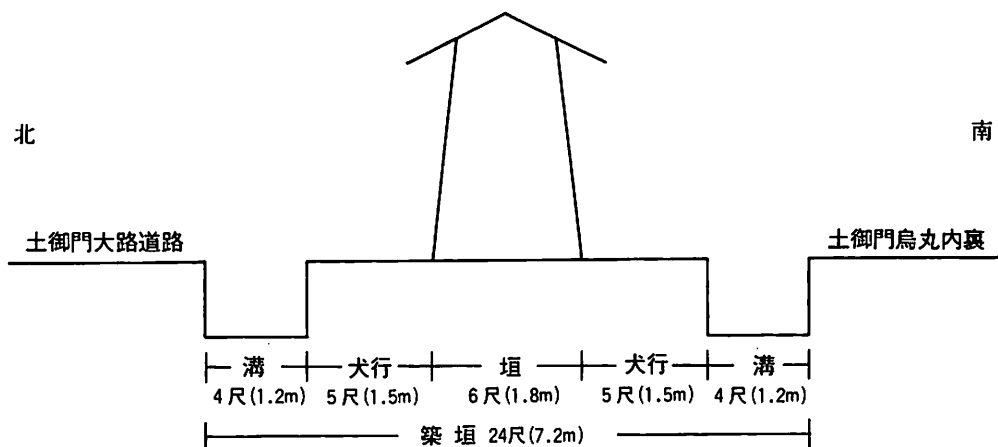
土器類よりは使用継続期間が長い遺物とみられる瓦については、南氏は次のように記している。溝1は11～12世紀の瓦が出土し、もっとも新しいタイプは12世紀後半である。溝2には12世紀末～13世紀初頭のタイプがある。溝4には12世紀の瓦がみられる。溝6には10世紀～12世紀中頃までの瓦、溝8からは12世紀末～13世紀初頭の瓦がみられる。

土器類からみてb類の比率の高い溝4・8は、瓦類も12世紀末～13世紀初頭というもっとも新しい時期を示している。そしてその中でも溝4は溝8より新しいとみられている。次にb類の比率がやや下がる溝1・6は、瓦類もそれぞれ12世紀後半および同中頃とみられ、同一傾向を示している。そして瓦類の年代からは溝4・8に近い溝2のみはやや傾向を異にし、古いaタイプの土師器皿の率が高い。

遺物の出土していない溝3は層序の上では溝4よりも古く、おそらく溝2も同様であろう。溝4は土御門大路南側の築垣の北側側溝とみられるから、溝3はかなり古い溝かもしれない。溝2については、溝4と何らかの関係があったかもしれない。

溝4とともに築垣の側溝と考えられるのは溝6である。溝4と溝6の間隔は3.2～4.1mである。

『延喜式』の左右京職条には、『北極并次四大路広各十丈』となり、土御門大路が四大路の一つであることは、第2章に藤本氏が記しているとおりでである。この10丈広の大路に関して『延喜式』は、『自垣半至溝辺、各八尺<sup>垣</sup><sub>丈行五尺</sub><sup>三尺</sup>、溝広各四尺、両溝間七丈六尺』と規定している。本調査地の北側に想定される土御門大路南築垣跡を、当時の1尺を30mと仮定して図式化すると、第16図ようになる。これと溝4・6等と比較すると、溝4の幅はよく一致しており、溝6もこれを否定する幅ではない。ただし垣と犬行よりなる溝間の幅はやや狭いのであり、なお検討の余地が残る。こうした問題が残るが、溝4・6は土御門大路関係とすると、出土遺物の傾向が類似する溝1は、土御門内裏跡内部における空間分割を示唆し、溝2との間に築垣等が設けられていた可能性もあろう。両者の間隔は3mで、溝4・6の間隔よりさらに狭い。溝4と2、溝6と1と、逆L字状に検出された溝8との相似性も気になることの一つである。



第16図 『延喜式』による土御門大路南築垣の想定図

これらの各溝の下限が12世紀後半，下っても13世紀初頭であることは，文献学的考察ともきわめてよく一致する。土御門烏丸内裏は12世紀前半代にしばしば焼亡再建しているが，久寿3年(保元元年，1154)の棟上後完成をみず終焉を迎えている。しかし遺物による年代観とは若干のズレがあり，終焉の姿についてはなお検討の余地が残されているといえよう。

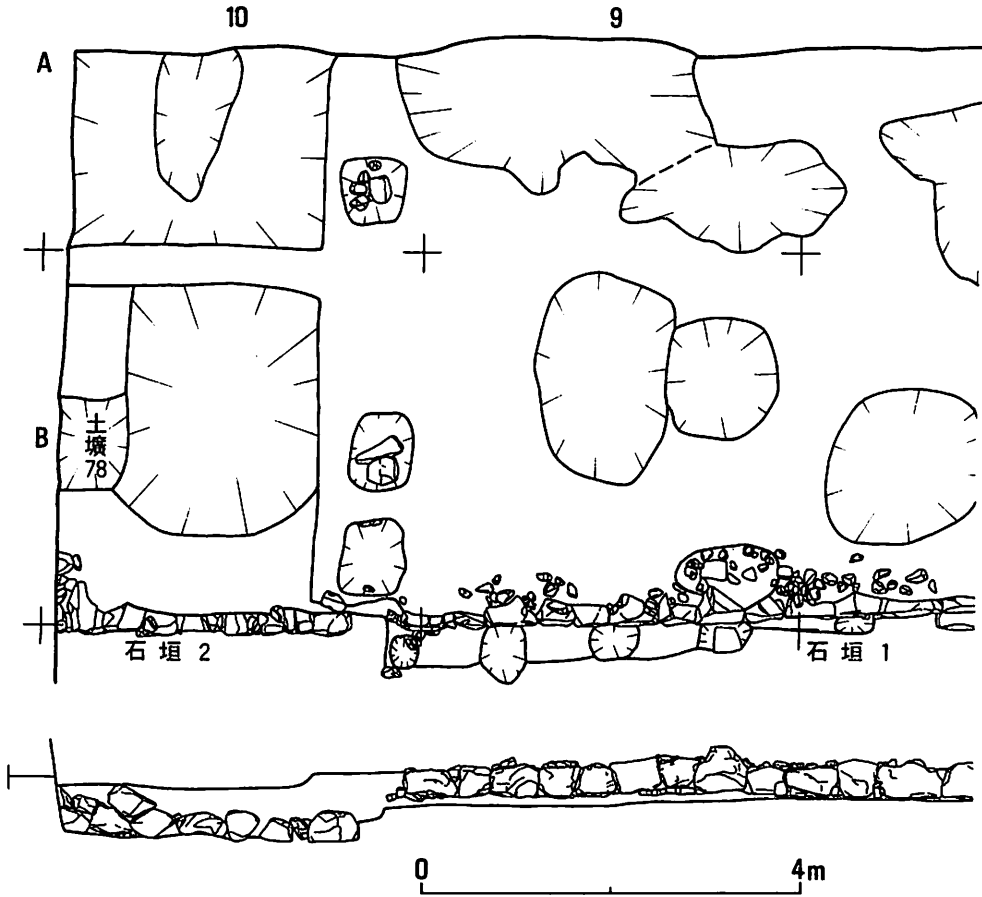
#### 第4節 江戸時代の遺構 (第11・17～19図，図版第2下・7・22右～41参照)

江戸時代の遺構は，石垣1・2，暗渠1・2および多数の土塀等が検出された。本節では，水戸藩邸に関係があると考えられる石垣と暗渠について記すこととする。

##### 1. 石垣(第11・17・18図，図版第7・22右～26)

西南地区のB列とC列の境界上に検出された。これは石垣1と同2にわかれる。石垣1はB・C列境界上の6～9区まで，石垣2はその南の10区にのみみられる。その長さは前者が15.2m，後者が3.0mである。その高さは前者が高く，後者は約45cm低い。両者は並存せず，前者は後者の上を整地して築かれている。後者はほぼ真南北に並ぶが，後者はN2°Wでやや西にふれている。

平坦面を東側にして据えられた石垣を構築する花崗岩は，石垣2より石垣1の方がやや大きく構築も堅固である。東面での巾は25～110cmで，50～70cm前後のものが多い。高さは30～50cmで，その上面は，海拔49.25mである。石垣2では，巾は55cmが最大で，高さは30cmである。しかし石垣1と異なり石垣2は2段積みであったらしく，その高さは55cmになり，その高さは海拔48.90mである。先に記した45cmの高低差は，石の据えつけ下面の比較値である。この2段構築部分の残存から，その北側の抜き取りが考えられるのである。もっとも6・7区では石

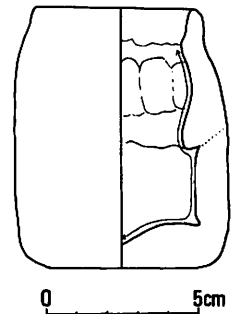


第17図 石垣1・2実測図

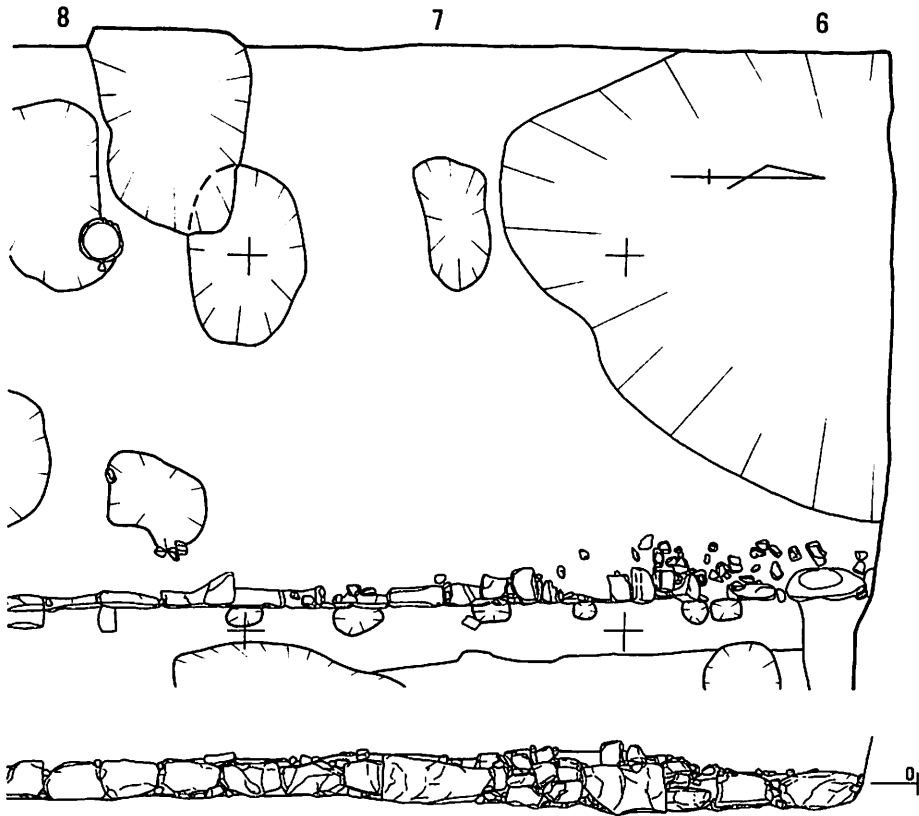
垣1にも2段構築が認められる。しかしその上面の高さは一定で、下面が低くなっている。

石垣1は、その東側に接して14個の小柱穴が認められる。このうち石を据えられたところが2カ所みられる。その間隔は1.2m前後が多い。また9c区西側には、柱穴のかわりに55×30cmの礎石がみられる(図版第26上)。

石垣2の裏ごめの土や石にまじり、焼塩壺が1点出土した。高さ8.6cm、径7.0cmで橙褐色を呈し、胴上半の約2分の1を欠失している。Aタイプの焼塩壺であるから、その製作年代は天文年間(1532~54)から天和2年(1682)二月までである(次章第4節参照)。したがって石垣2は1532~1682年の間に構築されたことになる。そして水戸藩が医師片山意庵よりこの屋敷を取得したのは寛永十二年(1636)であり、この石垣の構築は、片山邸である可能性が大きい。したがってこれを埋めて整地した上に構築された



第18図 石垣2出土焼塩壺実測図



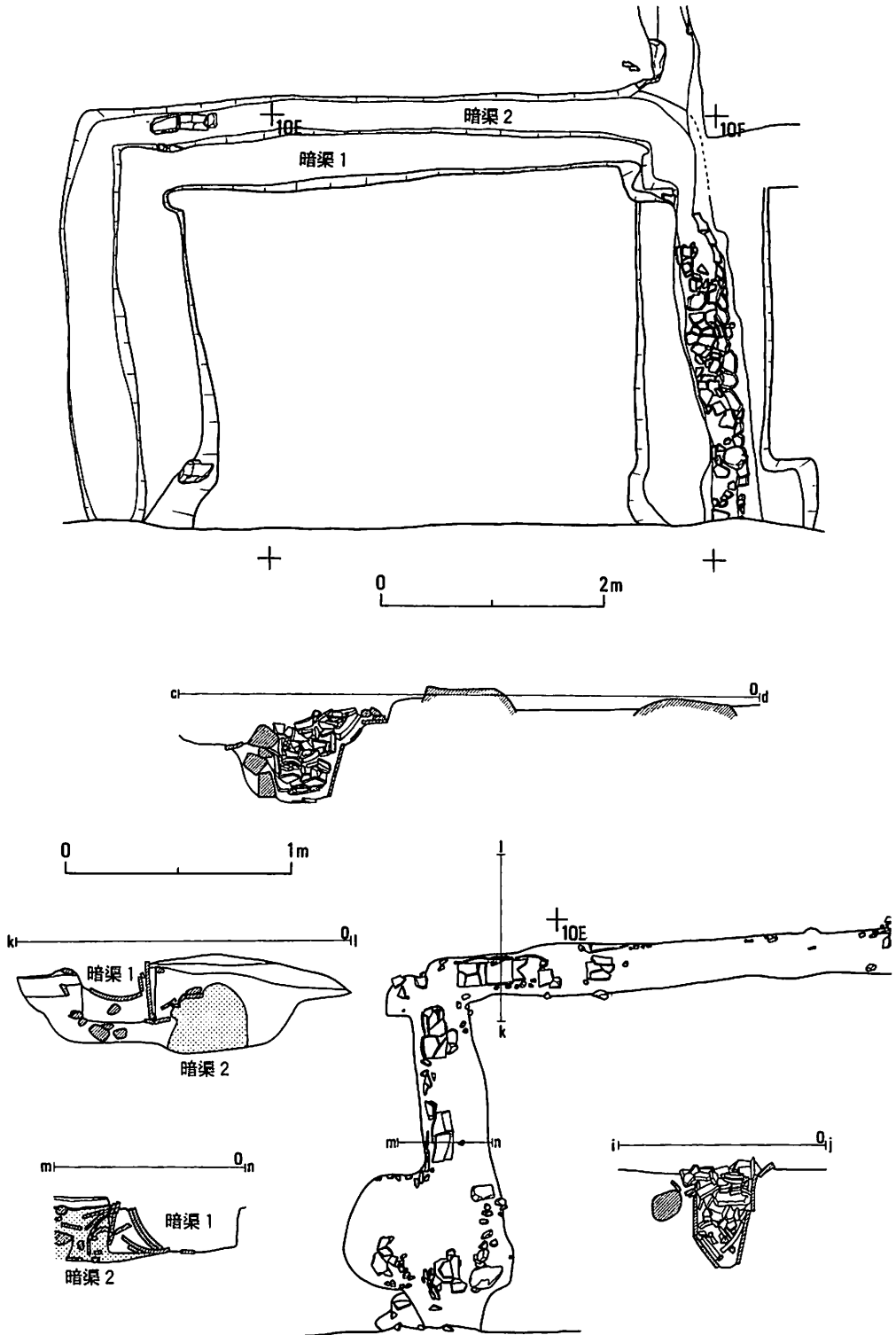
石垣1は、水戸藩がさらに隣接地を取得した宝永五年(1708)頃に、建替えの行なわれたことを推定せしめるのである。18世紀代の土壌78が、石垣2の西側に当る10B区において検出されていることも参考になろう(次章第5節参照)。石垣1は、残存する9区までがそのとおり南限であったとみられ、これに伴う建物も9区で1区切りになり、さらに南に別棟が新築された可能性が高い。10A・10B区の北側にみられる3個の方形ピットは、このことに関係があるであろう。

## 2. 暗渠(第11・19図, 図版第7・27~40参照)

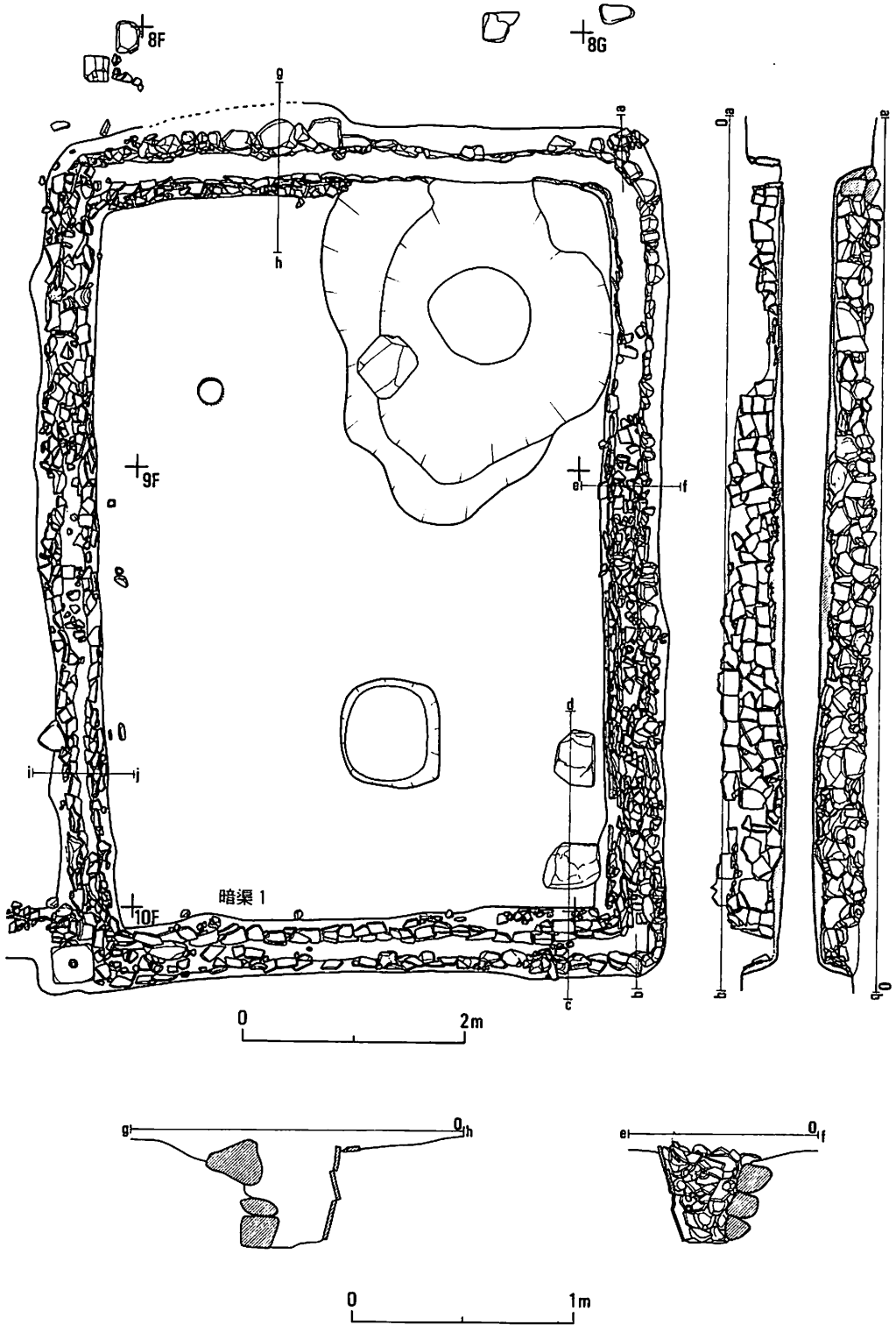
石垣と同様に、暗渠も新古2段階の暗渠1と暗渠2とがみられる。

暗渠1は、8F・9F区を中心に、東西5.8m、南北7.8mの長方形の溝状遺構であり、長辺は真北よりやや西に偏より $N2^{\circ}W$ で、石垣1と同じである。南側は10F区と1部が10Eおよび10G区に、東側は8G・9G区に、西側は8E・8F区にもおよんでいる。溝の巾は40~70cmで、深さは、1mに達する。溝の側面は石と瓦で構築され、内部は礫と瓦片で充填されて





第19図 暗渠1・2実測図



いる。いわゆるめくら暗渠である。石で築かれているのは北溝の北側、東溝の東側、および南溝の南側の東寄り等であり、他は平瓦をたて並べている。京都盆地を構成する扇状地形は東北から西南に向い、伏流水もこの方向をとることと関係があろう。特に西南隅には五輪塔の一部分をなす方形の石が置かれている(図版第26下)。平瓦は3段に積み重ねられ、上縁は高さをそろえて打ち欠かれている(図版第31下・同33下)。

これらの内側は、東西4.5m、南北6.45mの長方形をなし、よくたたかれた平坦面を構成している。長方形のめくら暗渠は土蔵廻りの暗渠と考えられるので、この内側には東西2間半、南北3間半の土蔵が想定される。東南隅には、2個の礎石がみられる(図版第34上)。この平坦面は海拔48.9mで、石垣1の下面は海拔48.75mである。

暗渠1の排水溝は、主体部の西南隅からさらに西へ4.6m延び、南へ折れて3.4mまでたどれるが、その先は調査区域外に伸びている。主体部をめぐる溝と異なり排水溝の側壁はほとんど石や瓦による構築はみられず、わずかに10D区内にみられるにすぎない(図版第36)。

この暗渠1の延長溝を調査している過程で、暗渠2が検出されたのである。主として10D・10E区にかけて、延長溝の外側に検出され、北側は1部9D・9E区に、東側は1部10F区に及んでいる。その東北部は暗渠1の東南部と重なっており、これによって切られており、暗渠2の方が古いことを明示している。東西の巾は6.1m、南北は南半が調査区域外に延びており、3.9mまでしか確認できなかった。溝の巾は35~60cmで、これに囲まれた内側の東西巾は4.85mで、暗渠1とほぼ同じである。南北辺は暗渠1よりやや西に片寄り、N4°Wである。

溝の構造は暗渠1とやや異なる点がある。その第1は側壁に石を積みあげることが多く、瓦も東溝東側壁にのみ並べられている(図版第38上)。第2は底に瓦の大型破片を敷きつめることで、これは暗渠1にはみられない(同下)。そして第3は、充填材としては瓦片よりも石が多く、それも暗渠1のものより概して大型である。

この暗渠2は、石垣2に対比されるものであろう。石垣1が2より北に寄ることと、暗渠が同じく北に寄ることとは関連があるものと推定される。

したがって石垣2・暗渠2は江戸前期かこれよりやや古い時期に属し、石垣1・暗渠1は江戸中・後期に属すといえよう。

水戸藩邸に関係がある石垣と暗渠は、西南地区に集中して検出されたが、東側の町屋との間には、第2節に記したように、I列のほぼ中央に巾約2m、南北方向約12mにわたり土塁が確認され、J列とK列と境界に検出された溝9は、それをさらに明確にしたものと考えられる。

一方石垣はB列とC列の境界に検出されたのであり、土塁との間には巾約26mの庭が想定される。そしてこの庭のやや石垣よりに、暗渠を伴う土蔵が建てられていたとみられる。石垣2と暗渠2の間隔は約6mにすぎないが、石垣1と暗渠1の間隔は約12mみられる。図版第2下にみられるように、水戸藩邸の門は北側の上長者町通に向いており、これら東側の庭は、京都の邸宅にしばしばみられるように、東北方比叡山を借景にとり入れていたことが推定される。

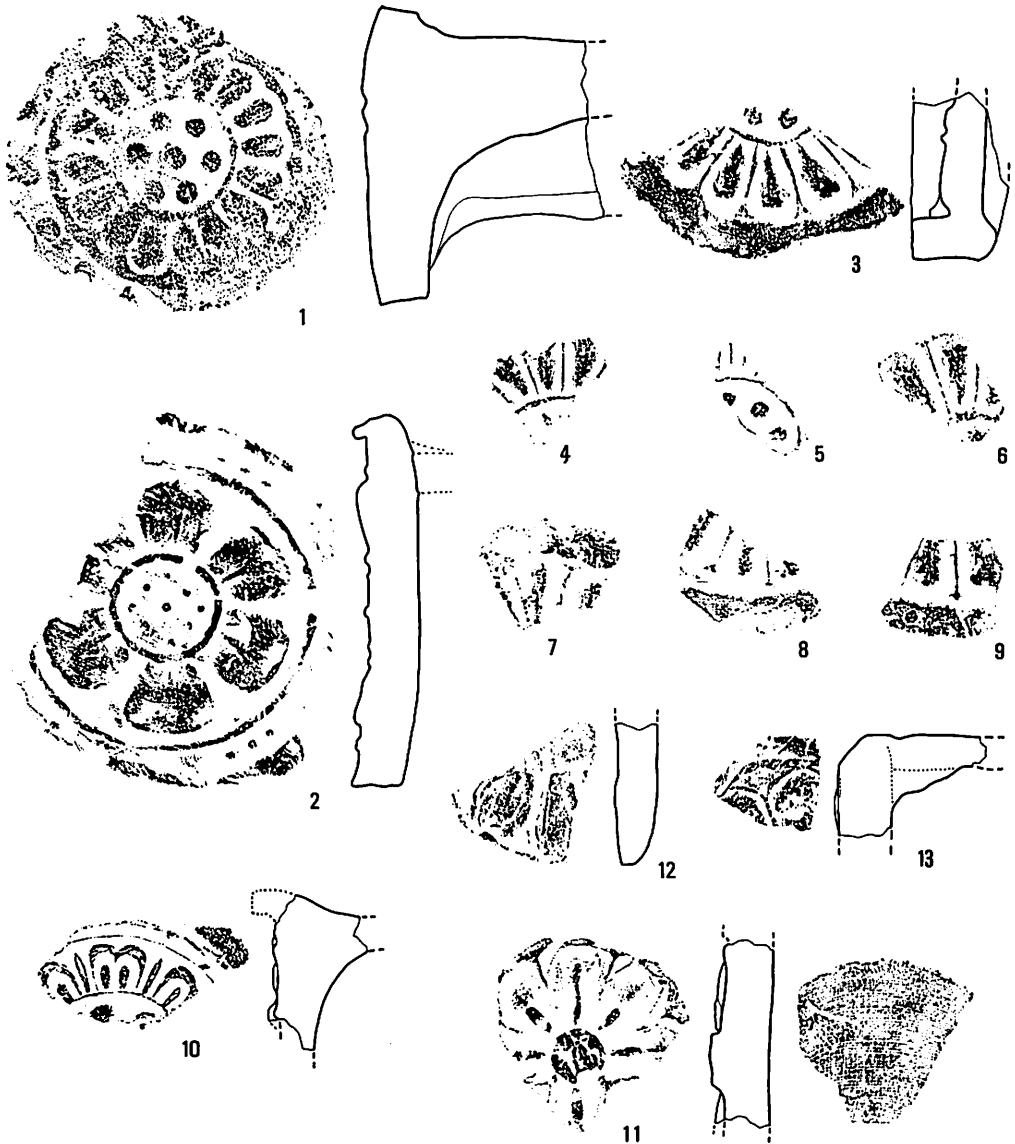
しかも御所越しに仰ぐ比叡山の借景には、水戸藩にとって特別の意味をもっていたことが想像されるのである。

## 第6章 遺物

### 第1節 平安時代の瓦類（第20～28図参照）

#### 1. 平安後期の溝出土の軒丸・軒平瓦

平安時代後期の各溝からは、10世紀中頃から13世紀にかけての軒丸瓦19点、軒平瓦26点およびその他瓦類破片が出土した。ここでは、軒丸、軒平瓦について各溝ごとに記述する。



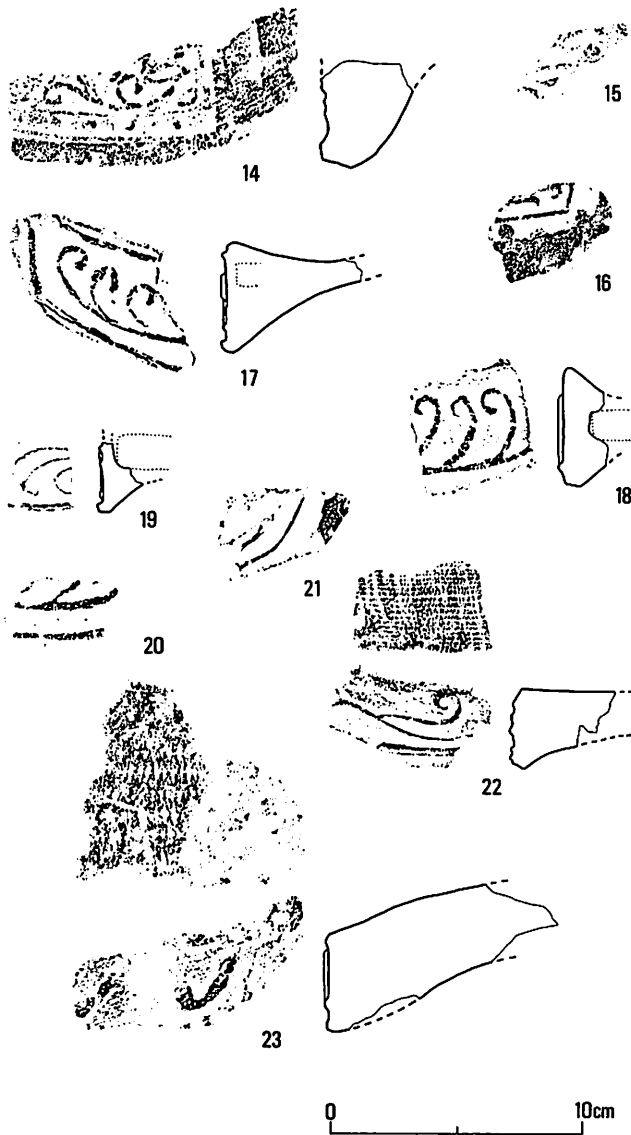
第20図 溝1出土軒瓦拓影・実測図

a. 溝1出土軒丸・軒平瓦(第20図1~23)

溝1からは、軒丸瓦13点、軒平瓦10点が出土した。

第20図1は、単弁十六葉蓮華文軒丸瓦ではぼ完形である。瓦当面は、周囲のヘラケズリによって隋円形を呈している。瓦当面に砂粒が認められる。これは、范型をはずしやすくするためのものである。瓦当裏面、丸瓦凸部はオサエ、丸瓦凹部はナデ調整している。胎土には小石が混じり、縞状の層をなしている。焼成は良好。森が東瓦窯のものと思われる。11世紀のものであろう。

同2は、単弁六葉蓮華文軒丸瓦で、土壙184から出土した下半部と接合できたものである。



中房には1+8の蓮子を配している。また、珠文は3個が1組で、蓮弁間に配されており、計18個あるものと思われる。瓦当裏面はオサエによる調整。色調は薄い褐色がかった灰色である。胎土は比較的良好で、焼成はやや軟質。丹波系瓦窯の製作で、11世紀後半~12世紀初めのものと思われる。

同3~9は単弁十六葉蓮華文軒丸瓦で播磨系瓦窯の製作のものと思われる。このうち3~6は同范である。また溝6からも同范のものが1点出土している(第22図1)。7を除いていずれも胎土は良好で、焼成も良くかなり硬質である。色調はおおむね青灰色である。7は焼成が悪いため軟質で淡黄灰褐色を呈す。窯内で灰をかぶったための自然釉のかかったものもある(第20図4)。いずれも12世紀中頃のものと思われる。

第20図10は複弁八葉蓮華文

軒丸瓦で、上部約3分の1が出土した。胎土は小石を含む。焼成は普通。幡枝瓦窯の製作で12世紀半ばのものである。

同11は単弁八葉蓮華文軒丸瓦ではぼ中央部の破片である。中房が小さく盛りあがっている。瓦当裏面に比較的細かい布目が明瞭に残っている。胎土は普通で、焼成は軟質である。時期は不詳。

これらの他に、蓮華文軒丸瓦の小片が2点出土している(同12, 13)。どちらも詳細は不明であるが、12は褐色がかかった青灰色を呈している。胎土には1mm前後の砂粒が認められる。焼成は良好。13は青灰色で、胎土には5mm前後の小石を含むが比較的良好。焼成は精緻で、かなり硬質である。

第20図14は、均整唐草文軒平瓦で、ほぼ右側2分の1の破片である。平瓦との接合部分から支えの粘土とともに剥落しているため、文様の上部が欠損している。右側縁に段ができていますが、これは范型の端にあたるものと思われる。瓦当裏面はナデ調整。胎土は1mm前後の砂粒を含み、焼成は軟質。色調は灰褐色を呈す。幡枝瓦窯の製作で、12世紀半ば前後のものと思われる。

同17～21は唐草文軒平瓦の破片で、作りなどからみていずれも播磨系瓦窯の製作のものである。今回当遺跡からは、播磨系瓦窯製作の軒平瓦片が計16点出土した。すべて12世紀頃のものである。これらを范の違いから分類してみる。

I類…今回もっとも多く出土したタイプで8点ある。中心部の縦線から唐草が左右に2反転しながらのび、さらに下方に2本、上方に4本の枝葉が配されている。また范型の木目がかなり明瞭に残っている。

II類…全容を知るものはない。モチーフのパターンはI類と同じと思われるが范の違いがみられる。4点出土している。

III類…4点あるが、いずれも小片のため詳細不明のものである。

17, 18はII類, 19～21はIII類である。色調はおおむね青灰色。胎土は良好で焼成もかなり精緻である。

同22は唐草文軒平瓦で左側縁部破片である。小片のため詳細は不明だが、左側縁端から唐草文がのびている。平瓦凹面にやや粗い布目を明瞭に残す。この布は縦糸と横糸の太さが違っている。胎土にはかなり小石を含み、層をなしている。色調は青灰色。焼成は比較的硬質。時期は不詳である。

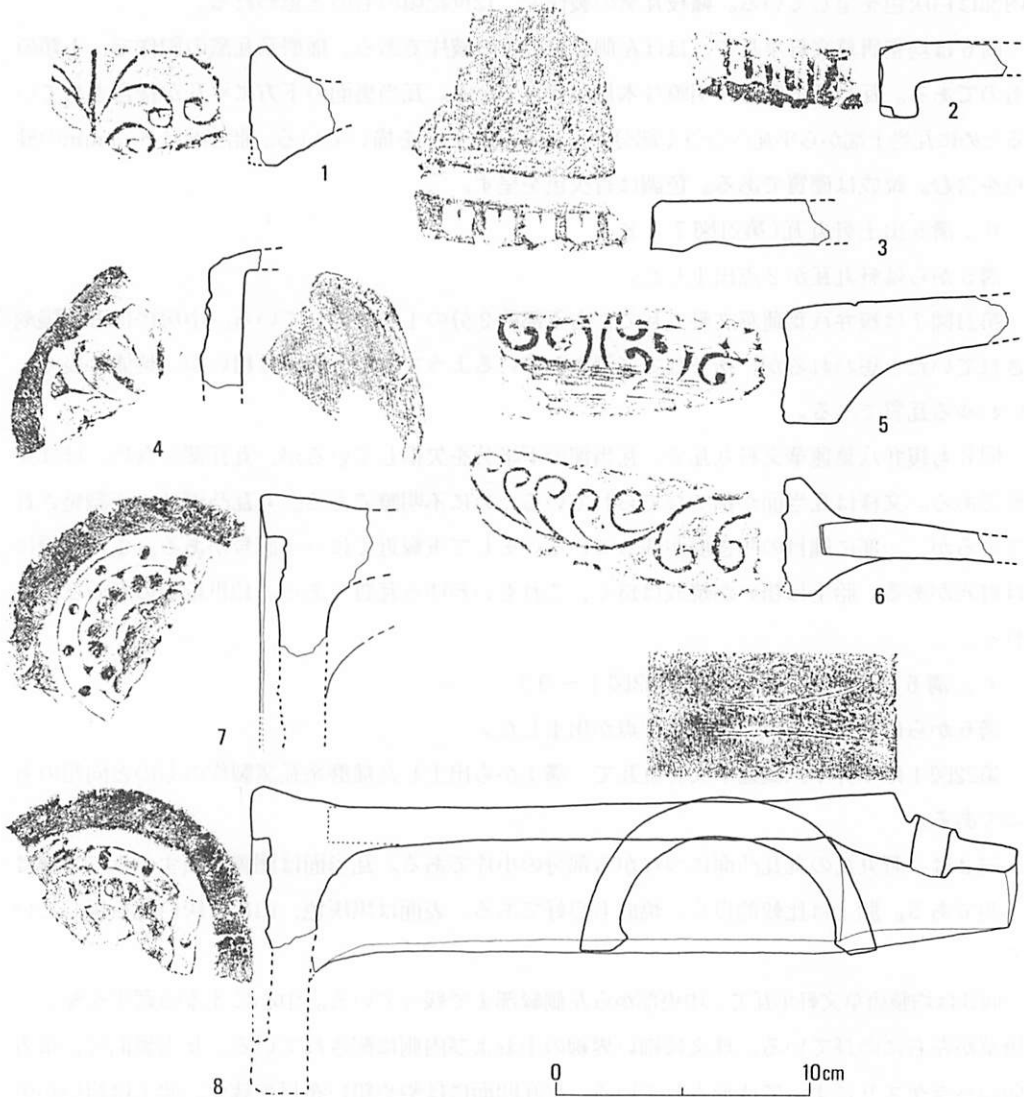
これらの他に文様の不明なものが3点出土している(同15, 16, 23)。15は右端上部の破片, 16は右端下部の破片である。時期は後期でも古い部類に入るものか。23は、波状の文様がわずかに認められるだけである。平瓦凹面には布目を残すが、縦方向の繊維が巾2～3mmと太い。遺存状態が悪いため、詳細は不明であるが、どちらかといえば布というよりも、むしろ状の編物のように思われる。胎土には小石, 砂粒をかなり含んでおり、焼成も軟質である。色調は暗灰色を呈している。時期不明。

b. 溝2出土軒平瓦（第21図1～3）

溝2からは、軒平瓦が3点出土した。

第21図1は均整唐草文軒平瓦で、ほぼ中央部の破片である。播磨系瓦窯製作の瓦で、I類のものであろう。

同2, 3は剣頭文軒平瓦で、どちらも左側縁部破片である。2は折り曲げによって瓦当面を作出しているのに対して、3は箆をそのまま押しあて、押しつぶすようにして瓦当面を作出している。そして瓦当下端と裏面は横ナデで成形している。また2には瓦当面に布目が一部残っている。どちらも平瓦凸部はオサエによって調整している。3は平瓦凹面にやや細かい布目を残す。胎土はどちらも粗いが焼成は硬質である。色調は灰黒色を呈す。共に12世紀末～13世紀



第21図 溝2・4・5出土軒瓦拓影・実測図



初めのころのものと思われる。

c. 溝4出土軒丸・軒平瓦(第21図4～6)

溝4からは軒丸瓦1点、軒平瓦2点が出土した。

第21図4は蓮華文軒丸瓦である。小片のため詳細は不明である。外周部はケズリ、瓦当裏面には丸瓦につづく布目が残っている。この布目は比較的細かく、明瞭である。胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。色調は、表面は黒色だが内部は灰白色を呈している。

同5は均整唐草文軒平瓦である。文様は范型が割れているためか、不明瞭な部分が多い。瓦当の厚さは比較的厚い。瓦当裏面から平瓦凸面にかけては縦ナデによって調整している。平瓦凹面に比較的細かい布目を残す。胎土は小石を含み粗い。焼成は普通。色調は表面が黒灰色、内部は白灰色を呈している。幡枝瓦窯の製作で、12世紀頃のものと思われる。

同6は均整唐草文軒平瓦で、ほぼ左側2分の1の破片である。播磨系瓦窯の製作で、I類のものである。瓦当面にかなり明瞭な木目が残っている。瓦当裏面の下方に平瓦が接合されているために瓦当上端から平瓦へつづく部分が、大きなカーブを描いている。胎土は1～3mmの砂粒を含む。焼成は硬質である。色調は青灰色を呈す。

d. 溝5出土軒丸瓦(第21図7, 8)

溝5からは軒丸瓦が2点出土した。

第21図7は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、右下部約2分の1が欠損している。中房には卍が陽刻されていたと思われるが、指でなでて消されているようである。胎土は粗いが、焼成は良く、いわゆる瓦質である。

同8も複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当部の下半分を欠損しているが、丸瓦部を含め、ほぼ完形である。文様は瓦当面が指でなでられているために不明瞭である。丸瓦凸面はナデ調整されているが、一部に縄目の叩き痕が残っている。そして玉縁近くにヘラ記号がある。また玉縁には釘穴がある。胎土は粗いが焼成は良く、これもいわゆる瓦質である。13世紀頃のものと思われる。

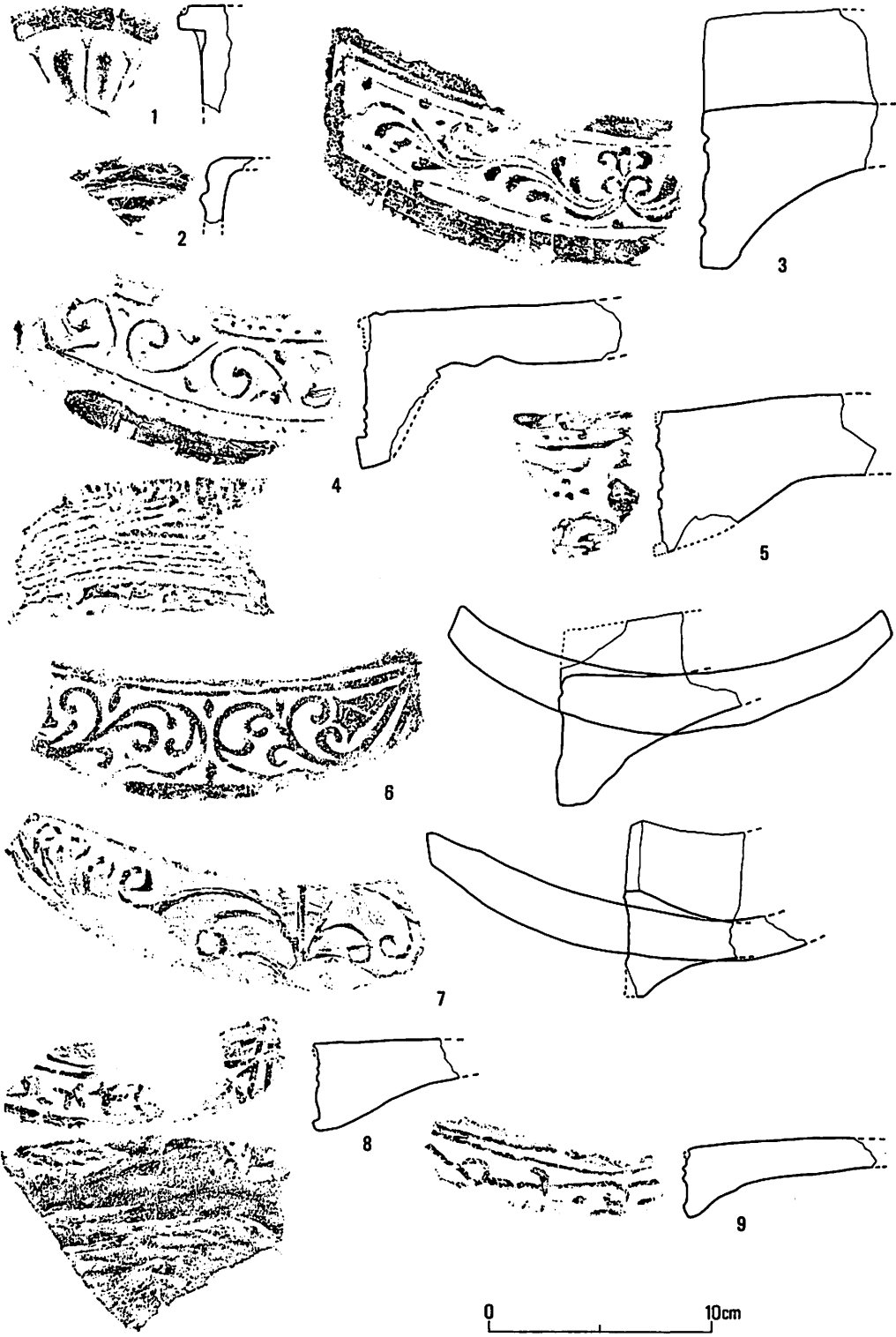
e. 溝6出土軒丸・軒平瓦(第22図1～9)

溝6からは軒丸瓦2点、軒平瓦7点が出土した。

第22図1は単弁十六葉蓮華文軒丸瓦で、溝1から出土した播磨系瓦窯製作のものと同範のものである。

同2は、軒丸瓦の丸瓦凸面につながる部分の小片である。瓦当面は圏線を残すのみで文様は不明である。胎土は比較的良く、焼成も良好である。表面は黒灰色、内部は灰白色を呈している。

同3は均整唐草文軒平瓦で、中央部から左側縁部まで残っている。中心に4本の蕨手を配し、唐草が左右にのびている。珠文は細い界線の上および内側に配されている。瓦当裏面は、縦方向のヘラケズリによって成形されている。平瓦凹面にはやや粗い布目を残す。胎土は粗いが焼成は堅緻である。河上瓦窯の製作で、10世紀中頃のものと思われる。当遺跡からは同範と思わ



第22图 溝6出土軒瓦拓影・实测图

れるものが1点出土している。また、この同範瓦に「河上」の文字を刻んだ資料が内裏跡で発見されているが、今回出土した2点には、文字は認められない。

同4は、軒平瓦の中心部破片である。小片のため詳細は不明だが半截の宝相華文を上下左右に配し、中央に4個の蓮子がある。界線外側に珠文が3個ある。胎土は良好であるが、焼成はやや軟質である。丹波系瓦窯の製作で11世紀中頃以降のものと思われる。

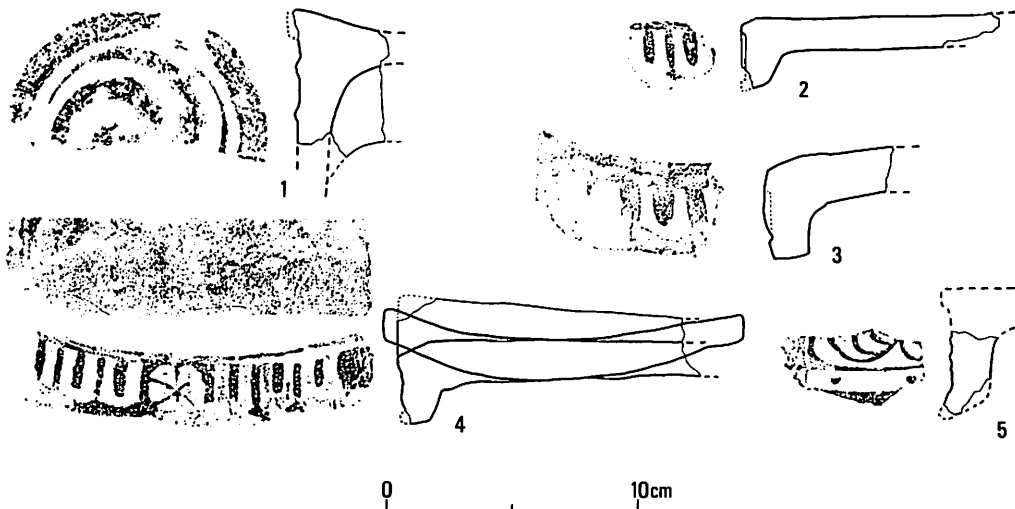
同5は均整唐草文軒平瓦で、左側ほぼ2分の1の破片である。中心飾りの半分が欠損しているが、c字背向に唐草を配していると思われる。界線外の珠文は小さく、密である。瓦当下端には縦方向、瓦当裏面には横方向の縄目叩きを施している。平瓦凹面には粗い布目を残す。胎土は良く、焼成も良好である。色調は灰黒色ないしは灰色である。3と同様に丹波系瓦窯の製作と思われる。12世紀初めのものであろうか。

同6は均整唐草文軒平瓦で、瓦当面の左側縁部を欠損している。瓦当面両端上部からのびた唐草が2反転して中心部で背向する。瓦当下端はケズリ、裏面はナデ調整している。平瓦凹面にはやや粗い布目痕がある。胎土は砂粒も少なく良い。焼成はやや軟質である。色調は一部黒色だが、全体として灰白色を呈している。播磨系瓦窯の製作で、12世紀中頃のものであろう。

同7は均整唐草文軒平瓦で、瓦当右側縁部を欠損している。播磨系瓦窯の製作でI類のものである。木目痕がかなり明瞭に残っている。

これらの他に文様が不明のものが2点ある(同8, 9)。色調はおおむね淡黄灰褐色を呈している。

8は右側約2分の1の破片である。文様は不明瞭であるが、花状の文様が一部認められる。平瓦凹面にはやや細かい布目、平瓦凸面には格子の叩き文が残っている。また9は、中央部分ほぼ2分の1の破片である。左側中央から唐草文状のものがのびている。平瓦凹面にはやや粗



第23図 溝8出土軒瓦拓影・実測図

い布目を残している。8, 9とも側縁部が平瓦凹面と直角方向に成形されている。どちらも胎土に砂粒は少なく、焼成は比較的堅緻である。製作地、時期とも不明であるが、全体からみて京都産のものではないように思われる。

#### f. 溝8出土軒丸・軒平瓦(第23図1～5)

溝8からは軒丸瓦1点、軒平瓦4点が出土した。

第23図1は巴文軒丸瓦で、下半分を欠損している。瓦当裏面はオサエで成形。胎土に砂粒が多く、焼成もやや軟質である。色調は灰黒色である。12世紀最末から13世紀初め頃にかけてのものと思われる。

同2, 3, 4は剣頭文軒平瓦である。2は中央に菊花状の文様を配している。また文様面全体に、平瓦凹面から続く比較的細かい布目が残っている。瓦当面は折り曲げて作出している。平瓦凸面は、オサエによって成形している。胎土には砂粒がかなり認められる。焼成はやや軟質である。4は2, 3に比べ瓦当中も大きく、しっかり作られている感がある。全体にナデ、ケズリによって成形されており、平瓦凹面の布目も一部残っているものの調整されている。胎土は砂粒、小石を多く含むが、焼成は堅緻で瓦質である。3点とも12世紀最末から13世紀初めの頃のものと思われる。

同5は唐草文軒平瓦で、右側縁部に近い破片である。小片のため詳細は不明だが、幡枝瓦窯の製作で、12世紀後半のものと思われる。

#### 2. 土壙、井戸出土の軒丸・軒平瓦(第24図)

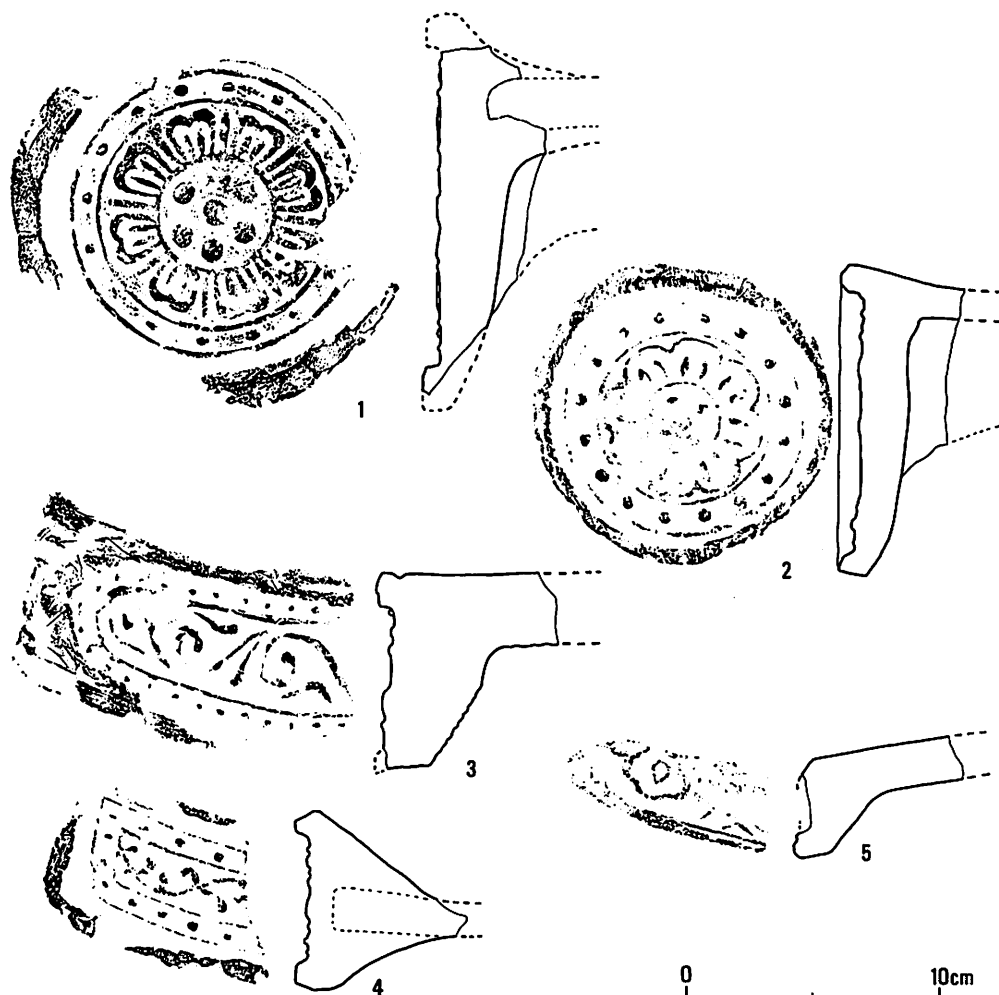
ここでは溝以外の遺構から出土した12世紀から13世紀の軒丸・軒平瓦を中心に記述する。

井戸3からは、唐草文軒平瓦が1点出土した(第24図4)。左側縁部破片である。この文様は栗栖野瓦窯から出土したものと類似し、左右からのびる唐草が中央で背向するものであると思われる。成形はナデを主体にし、瓦当外周はヘラケズリである。平瓦凸面に格子の叩き痕が残っている。胎土は砂粒を含むが良好、焼成はやや軟質である。色調は外側が黒灰色、内部は暗灰色を呈している。なお、今回の調査でこの瓦と同范のものがもう1点出土した。

第24図1は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、土壙102からの出土である。瓦当の一部を欠損している。文様は、京都市内の平安京関係遺跡からよく出土するタイプのものである。胎土、焼成、色調とも井戸3から出土した軒平瓦と酷似している。

土壙161からは、複弁八葉蓮華文軒丸瓦が1点出土した(第24図2)。瓦当周縁はケズリ、裏面はオサエ、さらに下面をケズリによって成形している。瓦当上面から丸瓦凸面にかけては、ナデによる調整である。胎土は砂粒を含むが良好、焼成も比較的硬質である。色調は外側が黒色、内部は灰白色を呈している。他に、同范のものが1点出土している。

土壙184からは、唐草文軒平瓦左側縁部破片が1点出土した(第24図3)。瓦当面側縁に范型の痕と思われる段がある。平瓦凹面に粗い布目が明瞭に残っている。平瓦凸面、瓦当下面および裏面には縄目の叩き痕がある。この裏面の縄目の中に植物の葉の圧痕が認められる。胎土は砂粒も少なく良好、焼成も比較的硬質である。色調は灰白色を呈している。丹波系瓦窯の製



第24図 土城・井戸出土軒瓦拓影・実測図

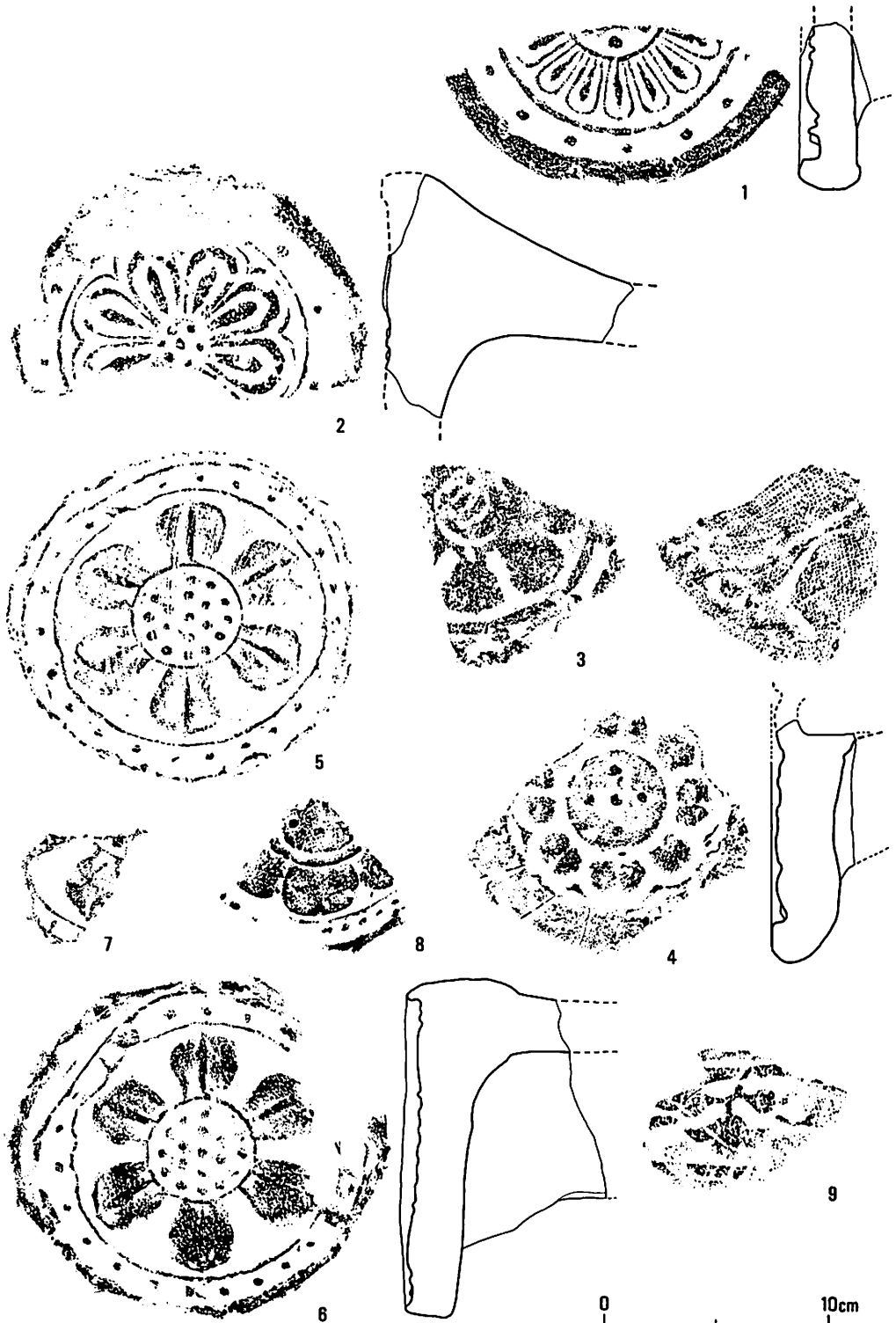
作で、12世紀前半のものであろう。

土城134からは、宝相華文軒平瓦左側縁部破片が1点出土した(第24図5)。花文は半截で上下に交互に配しているものと思われる。平瓦広端を折り曲げて瓦当を作出し、さらに瓦当上端はヘラケズリによって調整している。平瓦凹面の一部に細かい布目が認められる。これと同范のものが3点、他から出土している。

### 3. 遺構外出土の軒丸・軒平瓦(第25～28図)

遺構以外の包含層からも多量の瓦類が出土したが、ここでは13世紀頃までの軒丸・軒平瓦について記述する。

第25図1は単弁十六葉蓮華文軒丸瓦で、下部約3分の1の破片である。大阪府吹田市岸部紫金山瓦窯の製作と思われる。胎土は良好である。二次的に火を受けているように思われ、色調



第25圖 遺構外出土軒丸瓦拓影・実測図・1

は赤褐色を呈している。8世紀末から9世紀頃のものである。

同2は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、下方約3分の1を欠損している。狭い中房に1+6の蓮子を配し、中房の界線はかなり細い。一本造りによるもので、瓦当裏面には丸瓦凹面よりつづく粗い布目が残っている。瓦当頂部から丸瓦凸面にかけてヘラケズリされており、勾配は極めて急である。胎土に3~5mmの砂粒を多く含む。焼成は比較的硬質である。色調は暗灰色から灰白色を呈す。10世紀中頃のものであろう。

同3は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。下方約4分の1が出土した。いわゆる梅瓶形に近い花卉をもっている。中房には界線内に文字を有しているものと思われるが不明である。一本造りで瓦当裏面にやや粗い布目が残っている。火を受けているのか全体に赤っぽい色を呈している。胎土は砂粒の混じった粗い土である。10世紀後半以降のものと思われる。

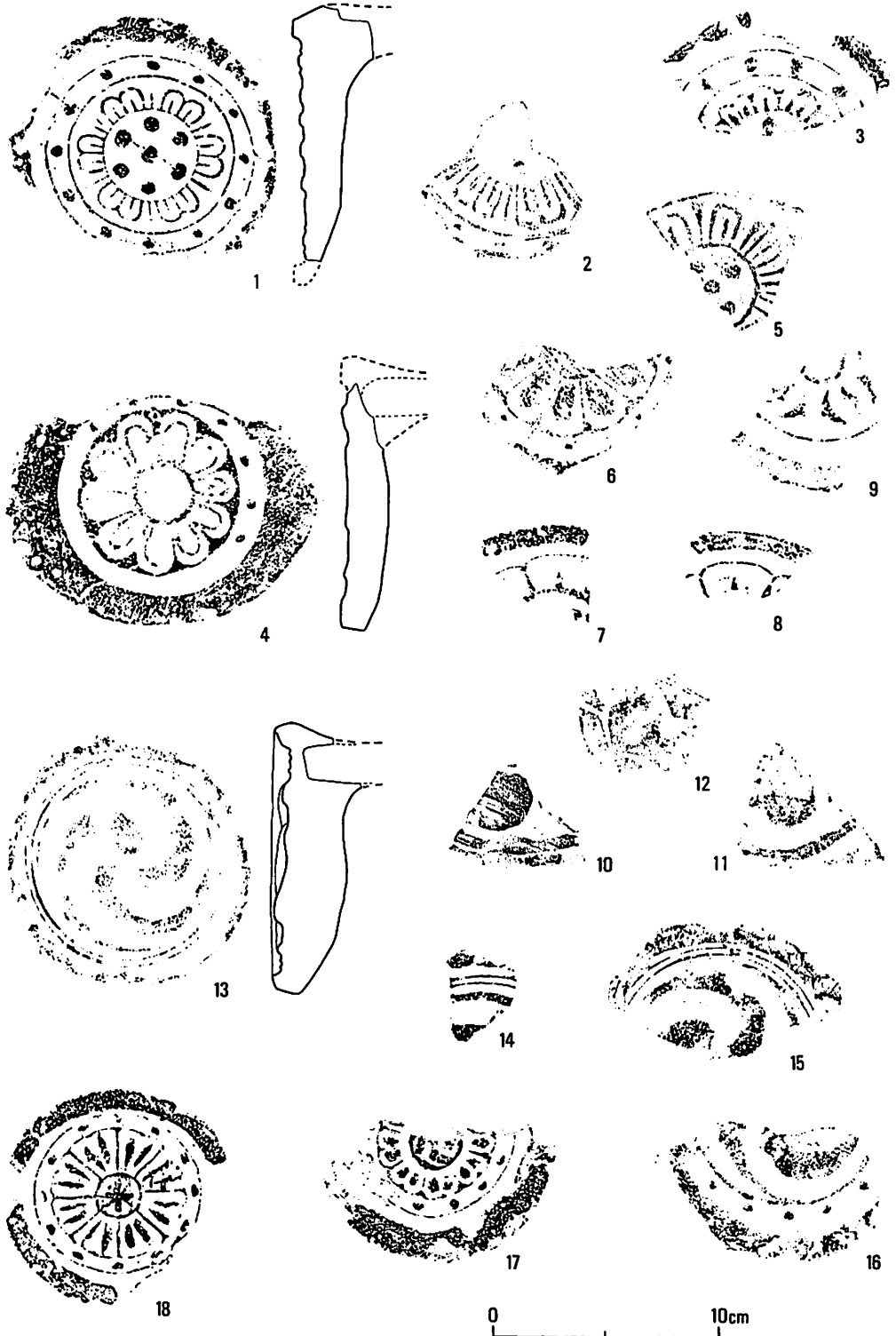
同4は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当上部を欠損している。弁は団子状を呈している。中房は少し盛り上がり気味になっており、1+4の蓮子を配している。瓦当裏面はオサエ、さらに下方はナデによって調整されている。胎土は2~5mmの砂粒を少し含むが良好である。色調は淡灰褐色を呈す。作りからみて京都附近の製作であろうか。11世紀中頃から末にかけてのものと思われる。

同5, 6, 7は、いずれも丹波系瓦窯の製作である。5, 7は単弁六葉蓮華文軒丸瓦で同範である。中房は大きく、蓮子は1+6+12の三重に配されている。外周はヘラケズリで成形されているが雑なため、外形は不整楕円形である。瓦当頂部から丸瓦にかけて、また瓦当裏面はナデ、オサエにより成形されているが、全体に雑である。特に丸瓦との接合部分は、補充の粘土のなでつけが不十分のため、段になっている。丸瓦凹面には粗い糸切り痕が顕著である。11世紀末頃のものである。他に同範と思われる小片が1点出土している。同8は、蓮華文軒丸瓦で約4分の1の破片である。花卉の巾は広く、交互に重なりあっている。界線の外側に珠文を密に配している。中房は二段に突出している。これは雄蕊帯を表わしているものである。12世紀頃のものである。

同9は宝相華唐草文軒平瓦の範を用いた軒丸瓦であるが、小片のため詳細は不明である。瓦当裏面ははがれ落ちている。胎土は砂粒を含む。焼成は比較的堅緻で、色は黒灰色を呈す。産地、時期とも不詳だが文様については、民部省跡から出土しているものに例がある。

第26図1, 2, 3は栗栖野瓦窯の製作のものである。1は複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。中央に範傷によるものと思われる隆線がある。瓦当外周はヘラケズリ、裏面はオサエ、さらに下方はケズリによって調整している。胎土は1mm前後の砂粒が少々みられるだけで良好である。焼成は比較的堅緻。色調は外側が黒灰色、内部は灰白色を呈している。12世紀のものである。

同4, 5, 6は幡枝瓦窯製作のものである。4は単弁十葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当面が楕円形を呈している。文様は不鮮明である。瓦当の厚さは薄い。外周はヘラケズリ、裏面はオサエ、さらに下方をヘラケズリしている。胎土には1~5mmの砂粒を含む。焼成は比較的堅緻。色調は淡黄灰色ないし灰色を呈している。5は単弁八葉蓮華文軒丸瓦破片である。これも楕円形を



第26図 遺構外出土軒丸瓦拓影・実測図・2



呈するようである。中房は大きく、大きい蓮子を配している。6もまた楕円形の瓦当面的ようである。花卉の先端と花卉の間、交互に珠文が配されている。これは二次的に火を受けているようである。時期は3点とも12世紀頃のものであろう。

同7, 8は蓮華文軒丸瓦の小片であるが、京都市内の平安時代後期の遺跡から多数出土している。

同9は小片のため詳細は不明だが、文様は宝相華文のようであるが、非常にくずれている。

同10~12は、いずれも小片のため詳細は不明である。しかし12の文様は、范によるものではなく、手彫りによる可能性がある。

同13~16は右巻きの三巴文軒丸瓦である。13は珠文をもたず、二重の圏線がめぐっている。瓦当面に砂粒が多く認められる。これは范型をはずしやすくするために砂を用いたためであろう。外周から瓦当裏面にかけては、オサエによる調整。胎土は良好で、焼成も堅緻である。色調は外側が灰色から灰黒色、内部は灰白色を呈している。14, 15は同范のものである。

16は一重の圏線がめぐり、外側に珠文を配している。巴は比較的短かく、尾が圏線に接している。瓦当全面体に糸切り痕が認められる。

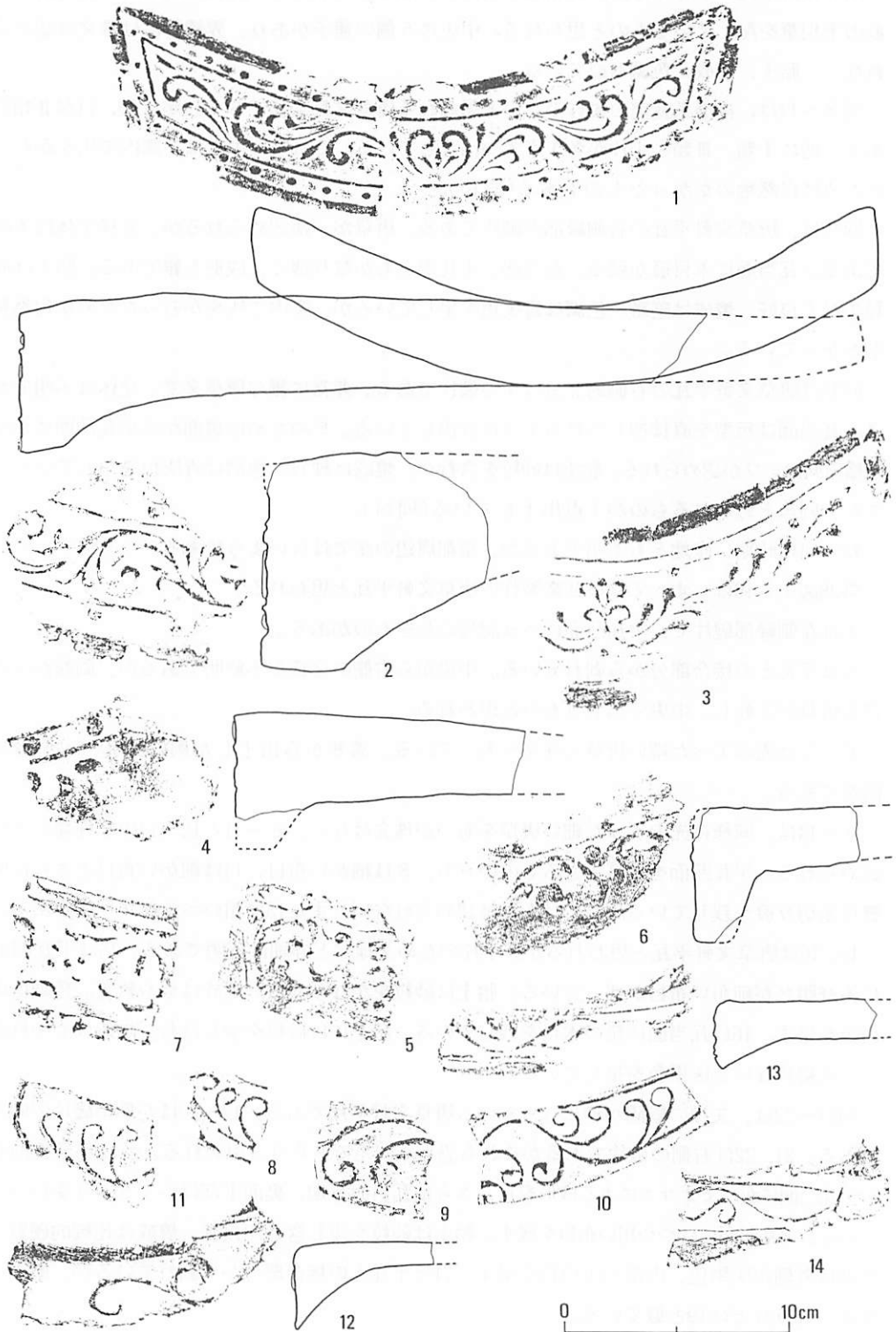
同17, 18は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。どちらも中房が突出し、17は卍, 18は十の陽刻がある。共に13世紀頃のものと思われる。

第27図1は、均整唐草文軒平瓦である。平瓦部分の一部を欠損しているだけである。文様は、平城宮出土土瓦型式6726Aに相当するものと思われる。顎近くには横方向、平瓦凸面には縦方向の縄目の叩き痕が残っている。平瓦凹面の一部に粗い布目が認められる。胎土には5mm前後の砂粒をわずかに含むが良好。焼成は比較的硬質である。色調は、瓦当面およびその附近は黒灰色、他は灰褐色、内部は灰色を呈す。

同2は緑釉均整唐草文軒平瓦である。中央から左側約4分の1の破片である。中心飾りは対向C字形様で、まきこみの強い唐草が左右に2転半するものと思われる。珠文の間隔は広い。瓦当下端から平瓦凸面にかけてヘラケズリによって成形されている。胎土には1~2mmの砂粒を含む。焼成はやや軟質である。釉は濃緑色を呈している。幡枝瓦窯製作のものと思われる。

同3は唐草文軒平瓦の右側縁部破片である。瓦当下面部が剥落しているため、文様は不明確である。大粒の珠文が比較的広い間隔で並んでいる。瓦当下端はヘラケズリ、平瓦凸面にかけてはオサエによる成形である。平瓦凹面にやや粗い布目が残っている。胎土に砂粒を含み、焼成は比較的硬質。色調は灰黒色から灰色を呈す。10世紀後半頃のものであろう。

同4は唐草文軒平瓦の左側縁部破片、同5は右側縁部破片である。ともに瓦当下面部の文様のはっきりしない。4の瓦当面には砂粒が多く認められる。これは范型をはずしやすくするために砂粒を用いたためと思われる。5は瓦当裏面、平瓦凸面にオサエの成形を行なっている。また平瓦凹面にやや粗い布目を残している。どちらも胎土に2~3mmの砂粒を少し含むが良好である。焼成は比較的硬質である。4は灰白色、5は灰色から黒灰色を呈している。ともに森が東瓦窯の製作で、11世紀前半のものと思われる。



第27图 遺構外出土軒平瓦拓影・実測図・1

同7は軒平瓦の小片である。詳細は不明だが、溝6から出土した例(第22図4)と同様に半截の宝相華を配しているものと思われる。中央に5個の蓮子があり、界線外には珠文は認められない。胎土、焼成、色調も似ている。

同8～11は、播磨系瓦窯の製作のものと思われる唐草文軒平瓦で8～10がⅠ類、11がⅡ類である。他にⅠ類、Ⅲ類の小片が各1点ずつ出土している。これらの中には、窯内で灰をかむったために自然釉のかかったものもある(同10)。

同12は、唐草文軒平瓦の右側縁部の破片である。唐草が一部認められるが、文様全体は不明である。瓦当面に木目痕が残る。瓦当部、平瓦部ともかなり薄く、成形も雑である。胎土は砂粒少なく良好。焼成は堅緻。色調は青灰色を呈しているが、窯内で灰をかむったためか自然釉がかかっている。

同13は唐草文軒平瓦の右側約2分の1の破片である。非常に雑な唐草文で、全体は不明である。瓦当面は範型を直接押しつけるように作出している。そのために裏面から平瓦凸面にかけて横方向のシワが認められる。胎土は砂粒を含むが、焼成は硬質。色調は青灰色を呈している。また、同範と思われるものが1点出土している(同14)。

12～14は時期、産地とも不明であるが、京都周辺の産ではないようである。

第28図1～16は、すべて幡枝瓦窯製作の唐草文軒平瓦と思われる。

1は左側縁部破片で、平瓦凸面にヘラ記号らしきものがある。

5は平瓦との接合部分から剥れている。中央から右側の文様が不鮮明であるが、両端からのびる唐草が2転し、中央で出会うものと思われる。

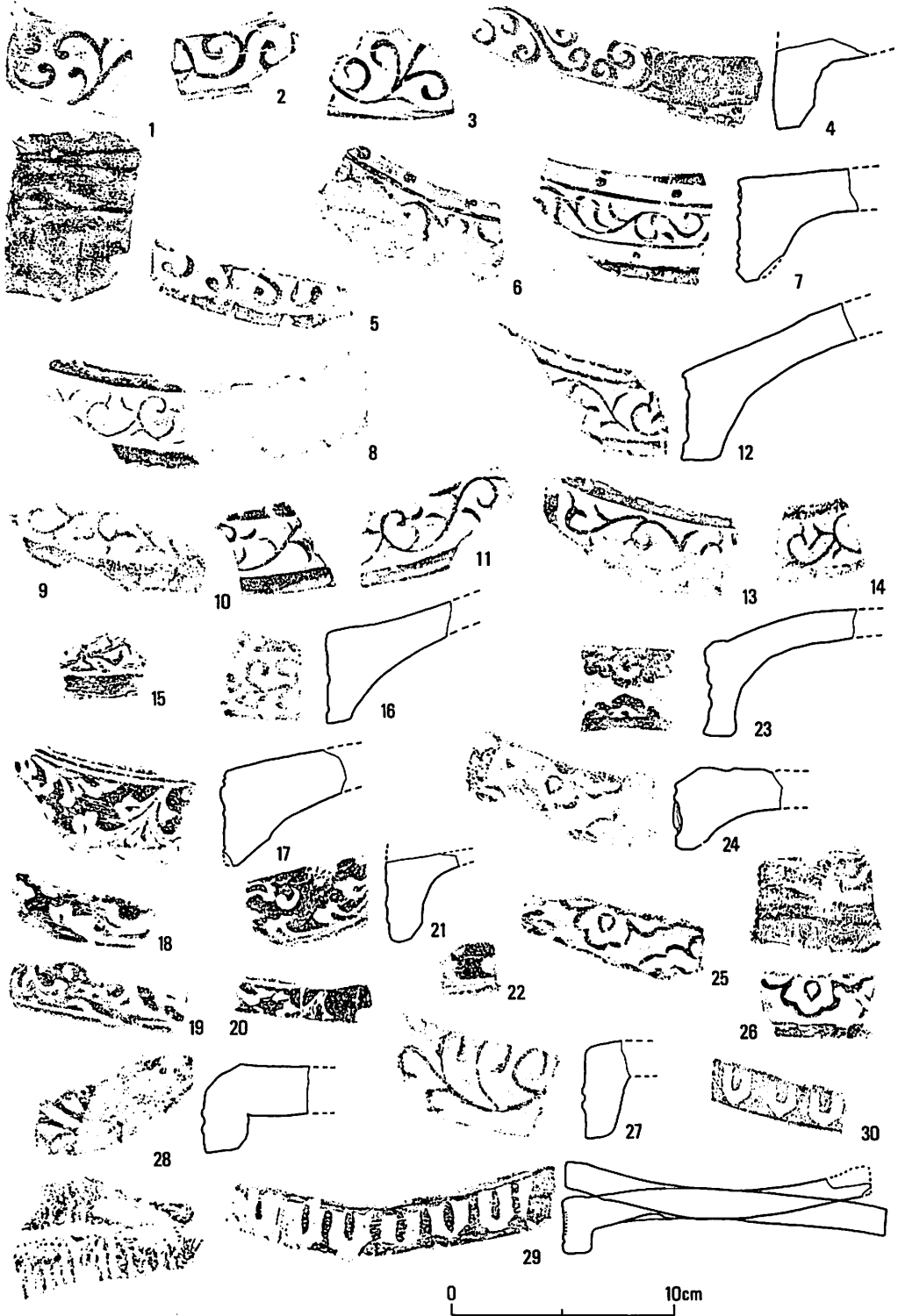
6、7は先の尖った細い唐草と珠文をもっている。溝8から出土した例(第23図5)を含め同範である。

8～14は、同様に先の尖った細い唐草をもつが珠文はない。8～11と12～14の2種類の範が認められる。平瓦凹面を観察できるもののうち、8は細かい布目、14は細かい布目とさらに明瞭な糸切り痕を残している。12には布目は認められない。また13は粗いヘラケズリ痕がある。

15、16は唐草文軒平瓦と思われるが、小片のため文様など詳細は不明である。15は平瓦凹面に不鮮明だが細かい布目が残っている。胎土は砂粒をかなり含む。焼成はやや軟質。色調は灰白色を呈す。16は瓦当面に範の木目を残している。胎土には砂粒を少し含む。焼成はやや軟質で、灰褐色ないし灰黒色を呈している。

同17～22は、文様の陰陽が逆になっている唐草文軒平瓦である。17～20は左側の破片で同範である。21、22は右側の破片であるがこれも恐らく同範であろうと思われる。17は瓦当裏面から平瓦凸面に掛けてオサエによる成形をし、さらに瓦当下面端、裏面下部はヘラケズリを行なっている。平瓦凹面にはやや粗い布目を残す。胎土は砂粒を少し含むが良好。焼成は比較的硬質。色調は外側が灰黒色、内部が灰白色を呈す。21は平瓦との接合部分から剥れているが、胎土、焼成、作りなどは19と似ている。

同23～26は宝相華文軒平瓦である。23はほぼ中央部の破片である。瓦当面は折り曲げによ



第28圖 遺構外出土軒平瓦拓影・実測図・2

て作出している。平瓦凹面には不明瞭な布目が残る。瓦当下端はヘラケズリ，裏面はナデ，平瓦凸面はオサエによる成形である。胎土は砂粒は少なく良好。焼成は比較的硬質。色調は外側，内部ともに灰白色を呈す。24も折り曲げにより瓦当面を作出している。平瓦凹面にはやや細かい布目が残る。瓦当下端はヘラケズリ，裏面から平瓦凸面にかけてはナデ調整である。瓦当面上端にヘラ記号らしきものがある。胎土は1mm前後の砂粒を含む。色調は外側が灰褐色，内部が黒灰色を呈する。25，26も同範である。また土壙134から出土している例(第24図5)も同範である。

第28図27，28はどちらも小片のため詳細は不明である。27は左側縁部破片で，瓦当部の作出は折り曲げによるものであろう。瓦当面にかすかに布目が残っている。胎土には砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で灰褐色を呈している。28は右側縁部破片で，文様部分が大部分欠損している。これも折り曲げによるものか，瓦当面にわずかに布目が残る。また，瓦当下端，裏面，平瓦凸面には縄目の叩き痕が残る。胎土に砂粒を少し含むが，焼成は良好で硬質である。色調は灰色から黒灰色を呈す。

同29,30は剣頭文軒平瓦である。29は，平瓦部を含め，ほぼ完形である。瓦当部は折り曲げによって作出している。平瓦凹面には布目が残る。平瓦凸面はオサエによる成形である。胎土には1～2cmの小石が混じるなど粗い。焼成は比較的硬質。色調は明灰黒色を呈している。

## 第2節 平安後期の土器・陶磁器類(第5表，第29～31図参照)

平安後期の溝中から出土した遺物に限定して，この時期の土器・陶磁器類を検討することにした。はじめに種別に記した後，溝別にその構成比と年代観について検討する。

### 1. 土師器

土師器は，埴・皿・高坏・甕・羽釜等多量に出土している。

a. 皿(第29図-1～13) 皿は，その法量により3種類に分けることが可能である。

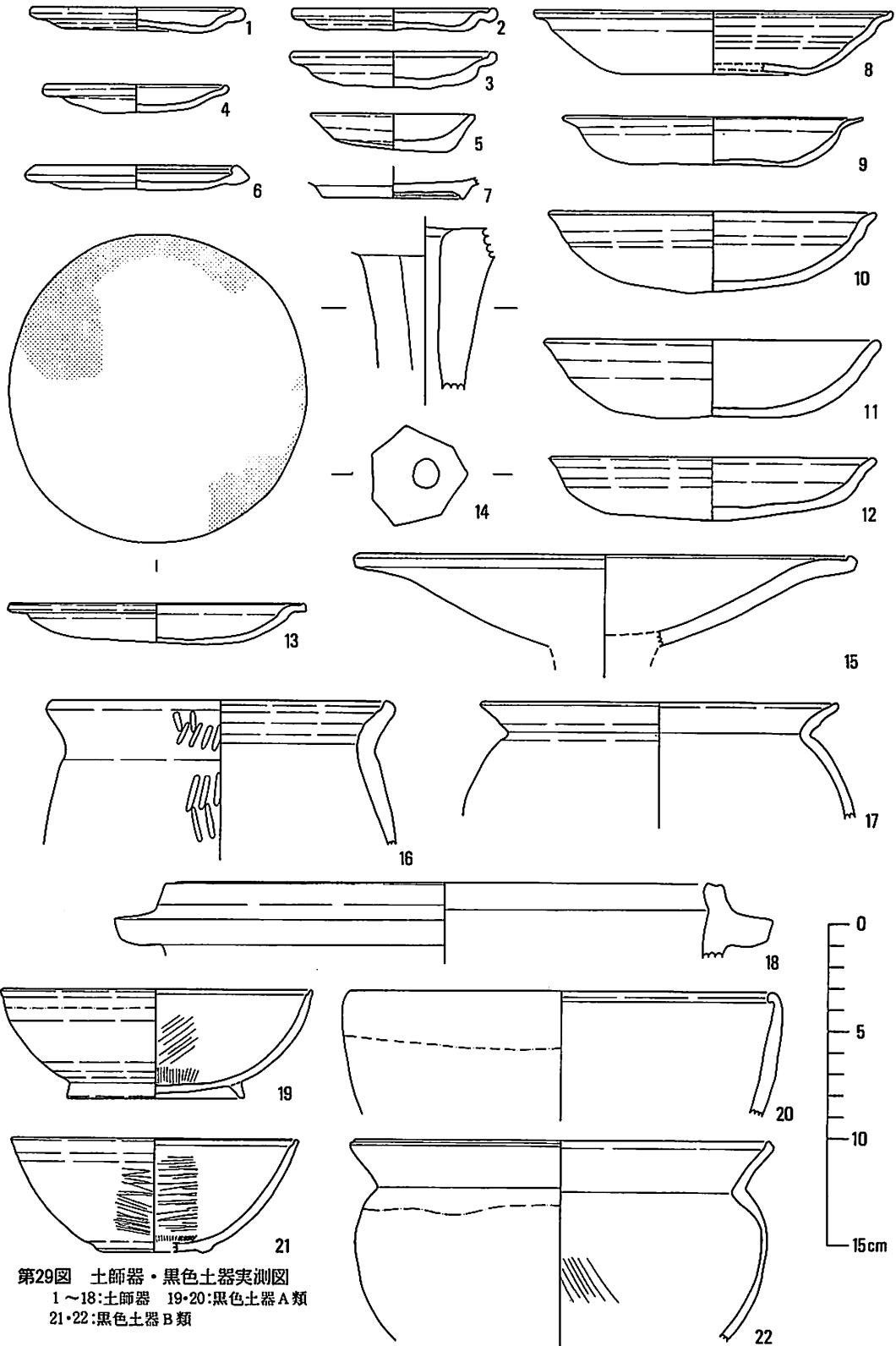
- ・小型……口径10cm内外(第29図1～6)
- ・中型……口径14cm内外(同一9，13)
- ・大型……口径17cm内外(同一8，10～12)

小型のものは，一般的に器高が1cm前後の浅いもので，中型・大型のものは，器高3cm前後と，やや深いものである。

口縁部の形態は，「て」の字状に屈曲させたもの(同2，13)と，やや外反させただけのものに分けられる。

皿類はすべて，口縁部付近にヨコナデ調整を施し，その他の部分は無調整のままである。また，口径・口縁部形態を問わず，一部にススの付着したのもも検出されている。

b. 埴 埴類は出土量が少量で，しかも図化に耐えうるものがなかった。高台は，断面三角形を呈する付け台で，成・整形や胎土選択等は入念になされている。



第29図 土師器・黒色土器実測図  
 1~18:土師器 19・20:黒色土器A類  
 21・22:黒色土器B類

c. 高坏(同14, 15) 高坏の坏部の口縁部は、小さく内面に折り曲げられたものである。脚部は、しっかり面取りを施したものが多い。

d. 甕類(同16, 17) 甕類は、口径32cm前後のものが多い。口頸部は、成形後に回転力を利用して、外反させている。体部には粗い叩き調整を施したり、刷毛目の残存するものもある。

e. 羽釜(同18) 出土量は少量で、凶化したものは口径24.6cmを測る。口縁部は短く、やや内彎している。胎土は砂粒を多く含む粗いものである。

## 2. 須恵器

須恵器は、坏・壺・皿・瓶類(広口瓶・双耳瓶・長頸瓶)・鉢類・甕類が出土している。

### a. 坏・壺・皿類

坏(第30図一1)は、口径12.2cm、底径7.4cm、器高3.6cmを測る。体部は直線的で、口縁部は外反しない。付け高台はしっかりした台形を呈し、その内部はヘラ削り調整を施している。

壺(同3, 5)の出土量は少量である。5は削り出しによる蛇ノ目高台を持ち、3は回転糸切り底が残存する平高台で、神出・魚住古窯址群で代表される東播系の中世須恵器である。

皿(同2)は、口径13.0cm、底径6.0cm、器高1.9cmを測る。全般的に厚手で、腰部はやや丸味をもっている。底部はヘラ削りによる内反り高台である。

### b. 瓶類

瓶類は、広口瓶・双耳瓶・長頸瓶を確認した。

広口瓶(同8)は、底径10.3cm、胴部最大径16.4cmを測る。胴部・口頸部ともに巻き上げ成形をしており、胴部下半はヘラ削り調整が施されている。底部は「上げ底」状にしているが、外面下端を高台として整形している。

双耳瓶(同12)は、胴部下半のみ確認したが、肩部の双耳と直交した位置に1個の耳をもつ双耳瓶である。耳部は、ヘラによりしっかり面取りが施され、中央に真すぐな穴を穿っている。底径は13.6cmを測る。

長頸瓶(同6・7・11)は大小2タイプある。小型の同7は、底径7.4cm、胴部最大径は10.3cm、残存高13.3cmを測る。付け高台の内部はヘラ削りを施している。また、胴部下半にもヘラ削り調整が施されている。

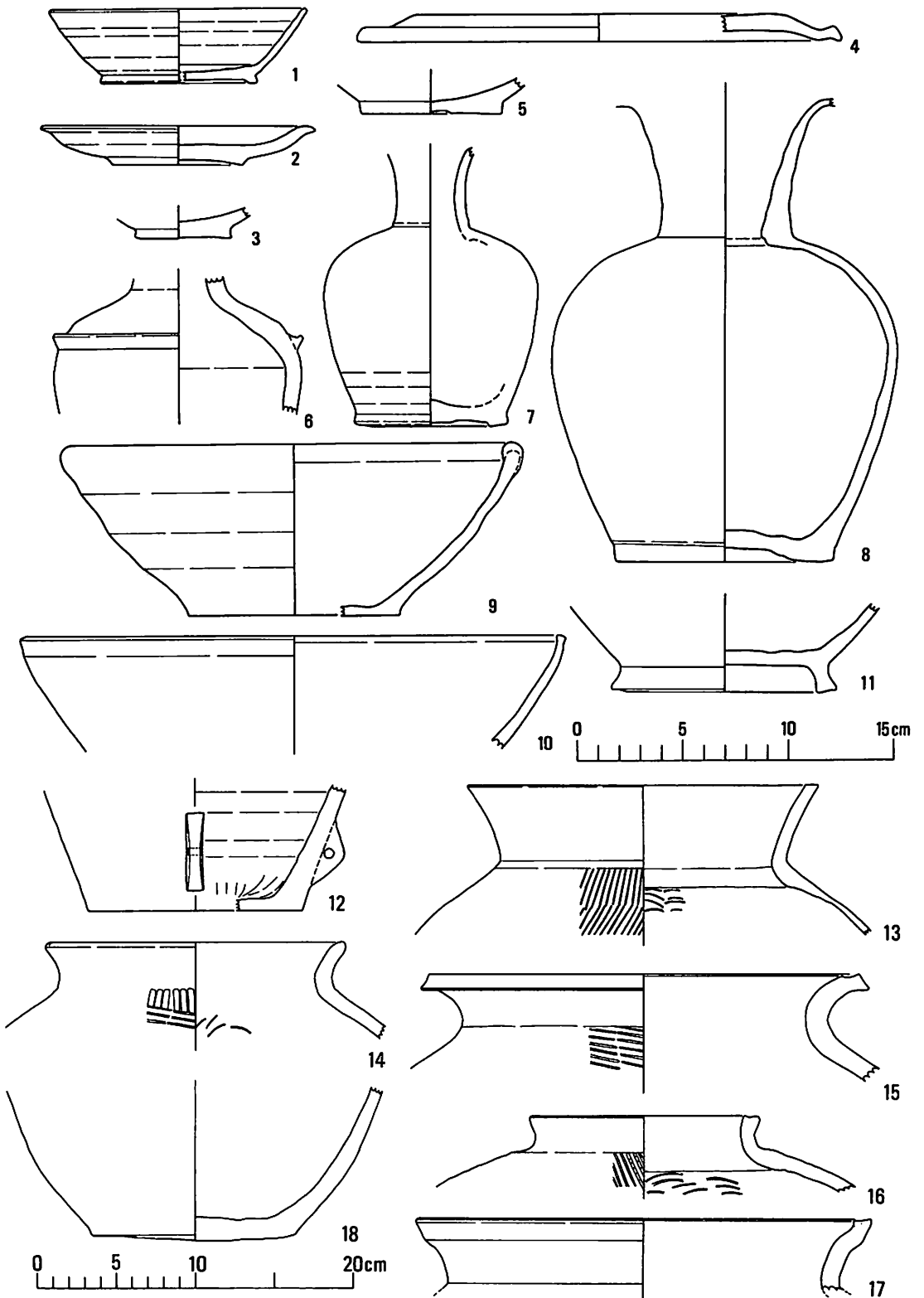
同6は胴部の一部だけであるが、肩部に一条の突帯をもっており、その外径は11.9cmを測る。

大型の同11は底部のみである。底径は10.6cmを測り、付け高台の内部にはヘラ削りが施されている。

### c. 鉢類

小型の同9は、口径12.0cm、底径10.1cm、器高8.2cmを測る。体部は腰部があまり張らないが、口縁部は内傾している。口唇部は、粘土を巻き付けており、断面円形を呈している。

大型の同10は、口径25.0cmを測る。体部は直線的のび、口縁部はやや内傾している。口唇部はやや丸くなっているものの肥厚はなく、平坦になっている。



第30图 須惠器实测图



d. 甕類

甕類は口頸部の形態により、2種類に分類できる。同13・14・16・17は、口頸部が直線的にのびている。同15は体部上端を折り曲げて口頸部としたもので、縁帯を形成している。前者の内面には青海波文が残存しているが、中世須恵器である後者は残存していない。

甕類の底部は、平底の部分の破片が全く出土していない点から、丸底であったと考えられる。

3. 黒色土器類

黒色土器類は量的に少量で、しかも図化に耐えうる破片も少量であった。

a. 黒色土器A類

出土器種には、壺・甕・鉢・壺類がある。

壺(第29図19)は、口径14.5cm、底径8.2cm、器高5.1cmを測る。内面のヘラ磨きは、体部上半は強い左下がり、下半は弱い左下がり、見込み部は平行と、3段にわかれて施されている。付け高台は7mm程で外に張り出している。また口縁部内側に、一条の凹線を有している。

鉢(同20)は、口径19.8cmを測り、口唇部は小さく内彎している。内面と外面上端はロクロナデ調整、外面下半はヘラ削り後、指ナデ調整を施している。

b. 黒色土器B類

出土器種は、壺と甕類を確認したが、出土量は微量である。

壺(同21)は、口径13.4cm、底径5.5cm、器高5.3cmを測る。内・外面にはヘラ磨きが丁寧な施されている。口縁部内側には、一条の凹線が認められる。

4. 灰釉陶器・山茶壺

出土器種には、壺・皿・段皿・大平鉢・広口瓶等がある。

a. 壺・皿類(第31図1～9・12・14)

壺(同1)は、口径15.3cm、底径7.7cm、器高6.4cmを測る。腰部は強い丸味を持ち、口縁部の外反は弱い。高台は高く大きな断面三角形のもので、高台内底部はヘラ削りを施している。灰釉は漬け掛けによって内・外面ともに施され、白緑色を呈している。第31図2・5も同様の特徴をもつ壺・皿類で、広久手c-3号窯と同時期の灰釉山茶壺である。段皿(同7)は、口径14.5cm、底径7.2cm、器高2.2cmを測る。高台は断面台形を呈し、灰釉も内面のみに施釉されている点から、黒笹14号窯式の新段階のものと考えられる。

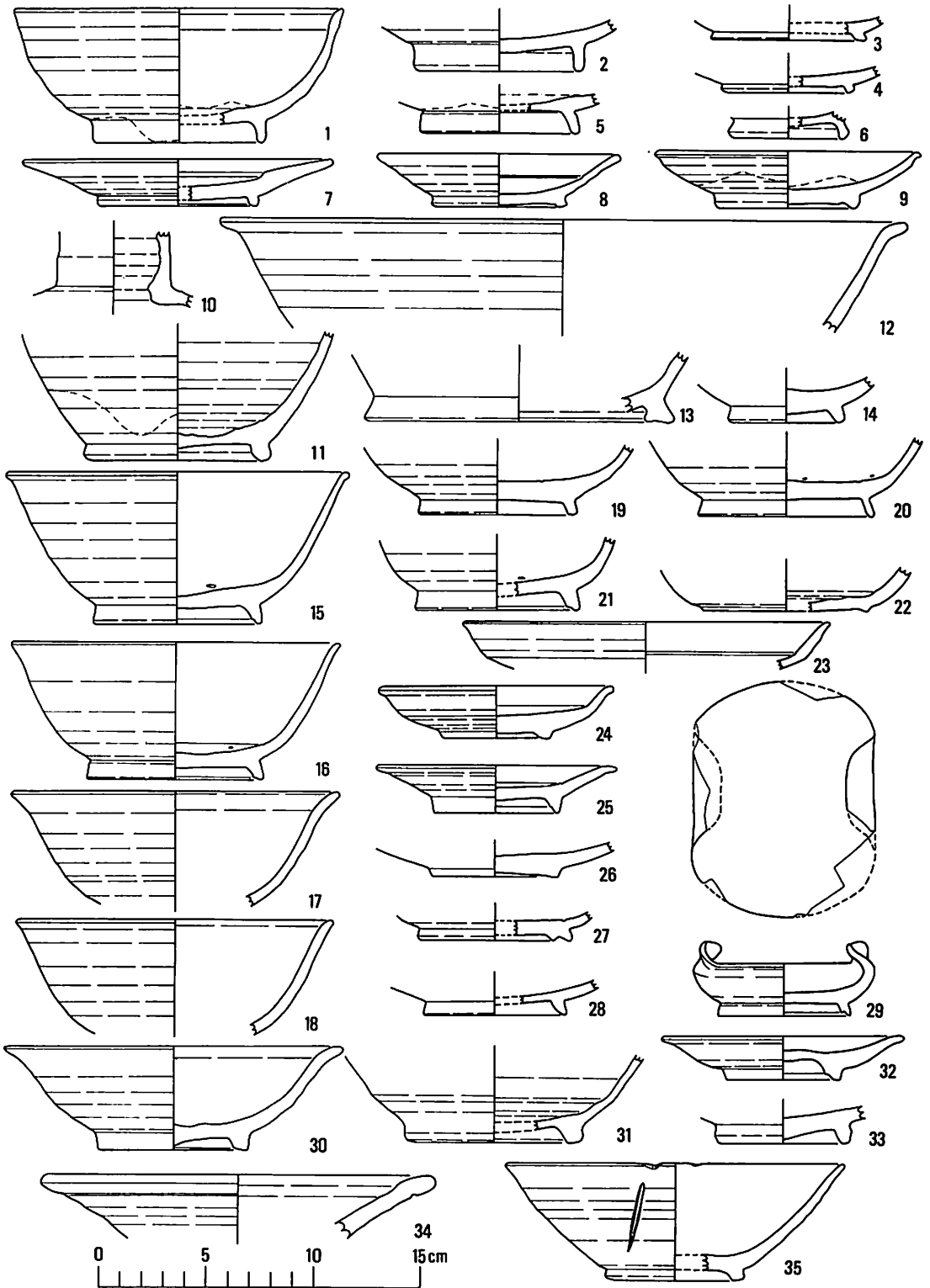
b. 広口瓶(同10, 11, 13)

広口瓶の出土量は少量である。胴部は下半をヘラ削り整形をし、上半はロクロ水挽き成形後にナデ調整を施すのみである。

出土した灰釉陶器は、そのほとんどが東濃諸窯・美濃須衛窯産のもので、猿投窯の製品と考えられるのは、第31図7のみであった。

5. 緑釉陶器

緑釉陶器は、そのほとんどは壺・皿類で、ごく少量甕類と考えられる破片を確認するにとどまった。



第31図 陶磁器類実測図 1~14:灰釉陶器 15~29:緑釉陶器 30~34:白色陶器 35:青磁

## 68 第2節 平安後期の土器・陶磁器類

### a. 埴・皿類(第31図15～29)

埴・皿類の高台の形態は、内反り高台(同26)と輪高台があり、量的には後者が圧倒的である。なかでも、高台内側に段がつき、高台内底部に回転糸切り痕を残す「近江型」が主流である。

埴(同15～21)は、腰部に強い丸味をもち、器高が高いという灰釉山茶埴に近い形態をもっている。

耳皿(同29)は、口径11.1cm、底径6.2cmを測り、耳部にはヒダがない。高台はいわゆる「近江型」である。

### 6. 白色陶器

白色陶器は、埴・皿・鉢がごく少量ではあるが出土している。

### a. 埴・皿類(第31図30～33)

埴(同30)は、口径15.8cm、底径6.8cm、器高4.9cmを測る。腰部の丸味は弱く、口縁部は大きく外反する。高台は削り出し高台である。全般的に厚手で、底部・腰部のヘラ削りは簡略で、ナデ調整や成形時のコテの使用を省略したり、かなり雑な特徴が多い。

胎土は砂分が多いが、焼成温度は高く「陶器」に分類されるべきものである。

### 7. 中国陶磁

中国陶磁は、やや時代の下がったものも含め、青磁・白磁が若干出土している。

青磁輪花碗(第31図35)は、口径15.8cm、底径5.4cm、器高5.5cmを測り、体部は直線的である。輪花は4弁で、口縁部をヘラで少々切り取り、体部外面にヘラで斜めの凹みをつけている。釉調は淡緑黄色で厚い釉層をもっており、越州窯系の製品と考えられる。

### 8. 瓦器

瓦器の出土量は極めて微量で、しかも小破片のみで、図化に耐えうるものはない。

### 9. 種別構成と年代

出土遺物のうち土器・陶磁器類は、各溝とも広い時期幅をもち、多種多様であるが、その出土頻度を知るため、「個体計算」ではなく、「破片数計算」を試みた。「個体計算」は、より精密な復元作業が必要であり、また各器種に多少があることなど、「一個体」としての認定が困難である点を考慮し、あえて「破片数計算」による出土頻度を調べることにした。出土土器類は第5表の如く11種類存在し、破片総数は13,842個にのぼった。

また、土師器皿のうち、厚手で「て」の字状口縁をもつ皿(a類)と、直線的な口縁をもつ皿(b類)の、口縁部の出土頻度の比較もあわせて実施した。

溝1……最大の出土破片数を数える。土師器の占める割合が8割を超え、皿b類も比較的多い。また瓦器も1.7%と他の溝に比べ多いのが特徴である。

溝2……土師器の出土比率が50%を割っている。また、土師器皿a類が8割以上を占め、他の溝に比べ古い様相を示している。緑釉・灰釉陶器が9%台と多いことも、その現れであろう。

第5表 土器・陶磁器類溝別数量表

	溝1		溝2		溝4		溝4 b		溝6		溝8		合計	
	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%
土師器	5639	81.3	391	48.3	1457	78.1	2	7.4	1902	62.1	897	78.6	10288	74.3
黒色土器 A	17	0.2	27	3.3	6	0.3			38	1.2	12	1.1	100	0.7
須恵器	626	9.0	200	24.7	226	12.1	20	74.1	666	21.8	147	12.9	1885	13.6
緑釉陶器	102	1.5	75	9.2	55	2.9			154	5.1	29	2.5	415	3.0
灰釉陶器 山茶塚	255	3.7	77	9.5	51	2.9	3	11.1	151	4.9	19	1.7	556	4.0
白色陶器	17	0.2	20	2.5	10	0.6			16	0.5	15	1.3	78	0.6
青磁	7	0.1	6	0.7	9	0.5	1	3.7	9	0.3	1	0.1	33	0.2
白磁	124	1.8			5	0.3			65	2.1	5	0.4	199	1.4
中近世器 陶器	4	0.1	5	0.6	23	1.2			7	0.2	10	0.9	49	0.4
黒色土器 B	27	0.4	9	1.1	16	0.9	1	3.7	39	1.3	1	0.1	93	0.7
瓦器	118	1.7	1	0.1	8	0.4			14	0.5	5	0.4	146	1.1
合計	6936	100.0	811	100.0	1866	100.2	27	100.0	3061	100.0	1141	100.0	13842	100.0
皿 a 類	624	36.4	74	82.2	60	12.6			377	39.1	50	11.7	1185	32.3
皿 b 類	1090	63.6	16	17.8	418	87.4			587	60.9	378	88.3	2489	67.7
計	1714	100.0	90	100.1	478	100.0			964	100.0	428	100.0	3674	100.0

溝4・8……各種土器類の出土頻度は、全体の平均値に近い。また、土師器皿b類が9割近い高い比率を示している。

溝6……土師器の占める割合、土師器皿b類の占める割合がともに6割強と低い。

土師器皿の年代観は、a類が11世紀中～後半を中心とした時期、b類が12世紀末葉を中心とした時期が考えられる<sup>1)</sup>。

一方、緑釉陶器もいわゆる「近江型」と称せられる二段輪高台をもつものが主流であり、灰釉陶器・山茶塚も、広久手c-3窯<sup>2)</sup>併行から東山101号窯<sup>3)</sup>併行（11世紀中～12世紀末葉）のものである。

各溝出土の土器類は、幅広い時期のものであるが、11世紀中～12世紀末葉のもものがその主流を占めている、と考えられる。

## 註

- 1) 兼康保明氏の御教示による。a類は奈良県興福寺食堂址の永承4年の焼面から出土している。b類は同じく興福寺菩提院大御堂の鎮壇具がしられている。
- 2) 藤澤良祐『瀬戸古窯址群・I』(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』第1集, 瀬戸, 昭和57年), 1~108頁。
- 3) 名古屋市教育委員会『H-101号古窯跡発掘調査報告』(名古屋, 昭和48年)。

## 第3節 江戸時代の瓦類 (第6表, 第32~36図参照)

江戸時代の水戸藩邸の一環を占めるであろう土蔵まわりの暗渠から発掘した瓦について、特にその法量上の問題について検討を加えることとした。ここからは夥しい量の瓦が出土したが、上記の目的に即して計測値を示し得るのは、第6表に示す75例である。これらはいずれも本瓦造りであり、棧瓦ではない。これらを平瓦、丸瓦の順に検討してみると、次のとおりである。

## 1. 軒平瓦と平瓦

軒平瓦の上弦巾の明らかな例は16点ある。これらは21.8~23.8cmの11点と、26.4~27.2cmの5点とに大別され、前者は7寸5分(22.5cm)、後者は9寸(27.0cm)を基準としたバリエーションであることがわかる。

また平瓦の9点においても、22.0~23.0cmの6点は7寸5分を基準としており、27.5と28.0cmの2点は9寸を基準としていて、軒平瓦と同一傾向を示す。24.5cmと25.8cmの2例については、それぞれ7寸5分と9寸のバリエーションとみなすべきであろう。

次にこれらに伴う長さを検討する。

軒平瓦においては長さのわかる例は6点ある。25.0~28.5cmで9寸を基準としている。次に平瓦の31点は、20.8~21.0cmの3点、25.3~28.5cmの13点、30.0~32.8cmの15点、の3群に大別される。それぞれ7寸、9寸、1尺5分を基準値としていることがわかる。

そして上弦巾と長さとは判明している資料に限定してみれば、9寸と1尺5分の2群は、上弦巾のそれぞれ7寸5分と9寸のグループに対応していることは確実である。例外的に各1例のみみられる2点については、対応する上弦巾は不明であるが、長さ7寸の上弦巾は6寸、長さ1尺1寸5分のそれは1尺巾と推定される。1尺巾は奈良・平安時代の基本的なサイズである。

次に下弦巾を検討する。

まず計測値のみみられる軒平瓦は5例みられ、19.5~21.2cmであり、基準値は7寸とみなされる。また平瓦は、19.5~22.0cmの12点と23.0~25.5cmの7点とに大別され、それぞれ基準値は7寸および8寸とみなされる。

そしてこれらは、それぞれ上弦巾・長さが7寸5分・8寸5分と、9寸・1尺5分の主要2群に対応しているのである。

第6表 暗渠出土瓦計測表(( )内は推定値, 単位cm)

分類	遺物番号	上弦巾 (横径)	長さ(筒+玉縁)	下弦巾	実測図
軒平瓦	あ1-B17・2008	21.8	25.3	—	第33図2
	” B17・2007	21.8	—	—	
	” B29・2026	21.8	—	—	同1
	” B17・2006	22.2	25.0	19.5	
	あ2-B5・2103	22.9	—	—	同3
	あ1-B42・2002	23.0	26.3	20.0	
	” B38・2009	23.0	27.0	21.0	同4
	” 不明・2001	23.0	—	—	同7
	あ2-B49・2102	23.2	—	—	
	あ1-B41・2014	23.4	—	—	同6
	” B38・2011	23.8	26.5	21.2	
	” B41・2019	26.4	—	—	同5
	” B29・2023	26.5	—	—	
	” B20・2028	26.5	—	—	同6
	” B17・2005	27.0	—	—	
	” B29・2022	27.2	—	—	同5
	” B38・2003	—	28.5	—	
	平瓦	あ1-B34・3	(22.0)	—	—
” B42・3		22.6	26.3	(20.6)	
” B42・21		22.7	(20.9)	26.8	同2
” B42・22		22.8	20.8	26.6	
” B42・2		23.0	26.8	—	同6
” B34・8		(23.0)	—	—	
” B34・12		24.5	—	—	同5
” B34・4		25.8	28.1	(21.8)	
” B38・3		(27.5)	(32.5)	(25.5)	同6
” B29・11		(28.0)	32.3	—	
” B36・3		—	21.0	—	同5
” B15・1		—	(25.3)	—	
” B42・19		—	(25.7)	(19.5)	同6
” B42・4		—	25.8	—	
” B42・13		—	26.4	—	同5
あ2-B6・2		—	26.5	—	
あ1-B42・1		—	26.6	—	同4
” B42・20		—	26.8	20.8	
” B42・18		—	27.0	—	同4
” B15・2		—	28.2	—	
” B27・1		—	30.0	—	同4
” B36・1		—	30.3	—	
” B38・13		—	30.5	—	同4
” B29・12		—	30.6	23.5	
” B47・30		—	30.5	—	同4
” B38・2		—	30.7	23.9	
” B36・8		—	30.7	—	同4
” B38・1		—	(31.0)	—	
” B29・2		—	31.8	—	同4
” B38・9		—	32.0	—	
” B38・4		—	(32.0)	—	同4
” B38・8		—	(32.0)	—	
あ2 B8・5		—	32.8	—	同4
あ1-B74・1	—	—	19.8		
” B34・1	—	—	20.0		

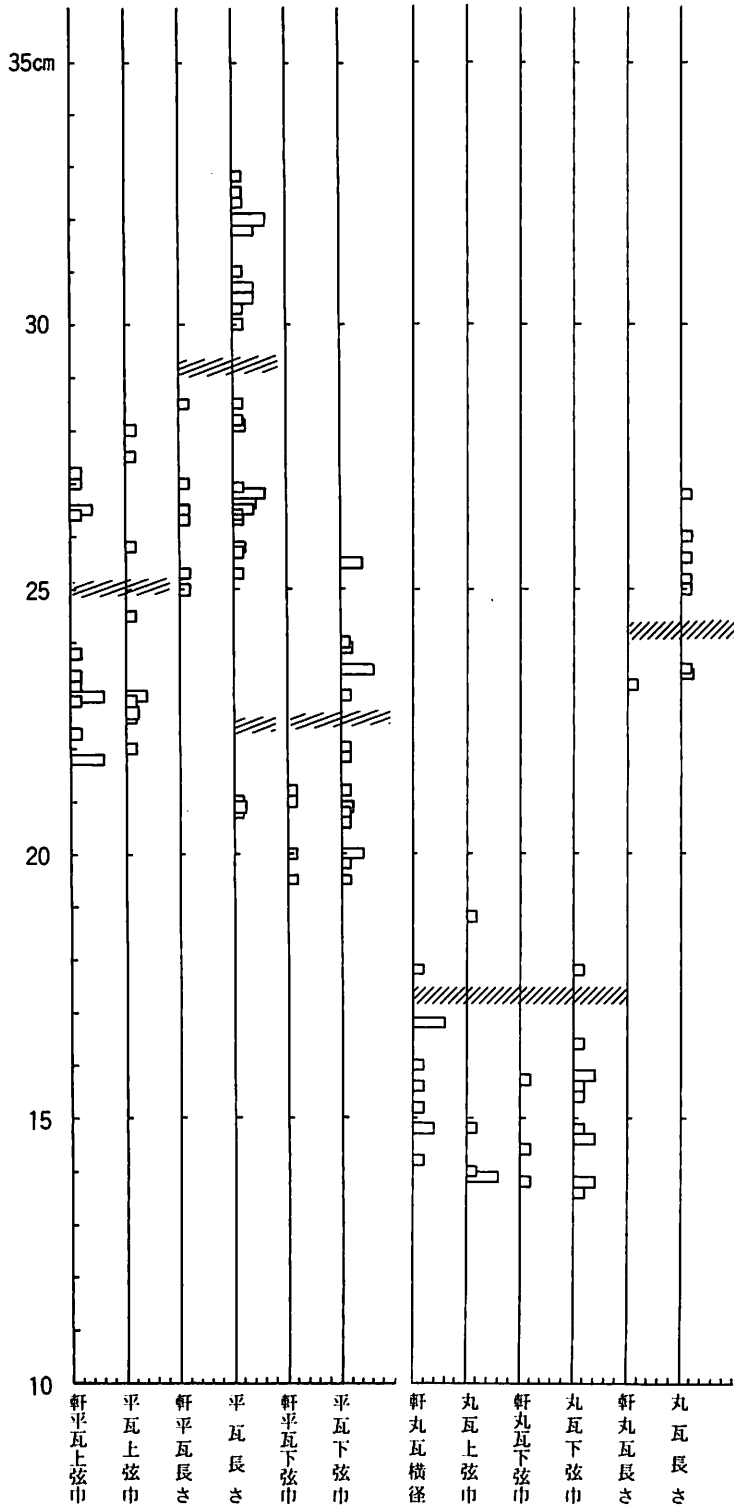
平瓦	あ1-B34・5	—	—	20.0	
	" B24・1	—	—	21.2	
	" B74・4	—	—	21.4	
	" B74・3	—	—	22.0	
	" B30・4	—	—	23.0	
	" B30・2	—	—	23.5	
	" B36・2	—	—	(23.5)	
	" B29・1	—	—	24.0	
あ2-B8・1	—	—	25.5		
軒丸瓦	あ2-B5・2105	14.2	(23.2)(23.2+—)	—	第35図7
	" B4・2109	14.8	—	13.8	
	あ1-B71・2018	14.8	—	—	同5
	" B15・2025	15.0	—	14.4	同6
	あ2-B4・2107	15.2	—	—	
	あ1-B16・2013	15.6	—	—	同8
	あ2-B4・2106	16.0	—	—	
	あ1-B17・2010	16.8	—	(15.7)	同2
	" B20・2029	16.8	—	—	同4
	" B28・2024	(16.8)	—	—	同3
あ2-B2・2101	17.8	—	—	同1	
丸瓦	あ1-B71・101	13.8	26.8(23.4+3.4)	14.6	第36図4
	" B29・103	13.8	29.3(25.2+4.1)	15.4	同5
	" B36・101	13.8	—	—	
	あ2-B5・102	14.0	—	—	
	あ1-B52・101	14.8	—	—	
	あ2-B9・102	18.8	—	—	
	あ1-B15・101	—	26.5(23.3+3.2)	(13.6)	
	" B29・101	—	27.4(23.5+3.9)	—	同1
	あ2-B8・102	—	29.0(25.0+4.0)	15.8	
	あ1-B29・102	—	29.3(25.6+3.7)	15.6	同2
	" B32・101	—	30.6(26.8+3.8)	16.4	同3
	" B17・101	—	30.8(26.0+4.8)	—	
	" B28・101	—	—	13.8	
	あ2-B5・103	—	—	13.8	
	" B5・101	—	—	14.6	
	" B9・101	—	—	14.8	
	あ1-B28・102	—	—	15.8	
" B30・101	—	—	17.8	同6	

すなわち、軒平瓦・平瓦は、1間(6尺)四方の1坪当りに1列9枚の8列が並ぶ七二(シチニ)の瓦と、1列8枚の7列が並ぶ五六(ゴンロク)の瓦とに対応している。後者は積雪地帯、前者は非積雪地帯を主に分布するサイズであり、京都府や滋賀県はその境界地帯に当り、後者にはまたしばしば雪止めの瓦もみられて特徴的である。このような瓦の2大別が、江戸時代にはすでに確立されていたことを知ることができるのである。

## 2. 軒丸瓦・丸瓦

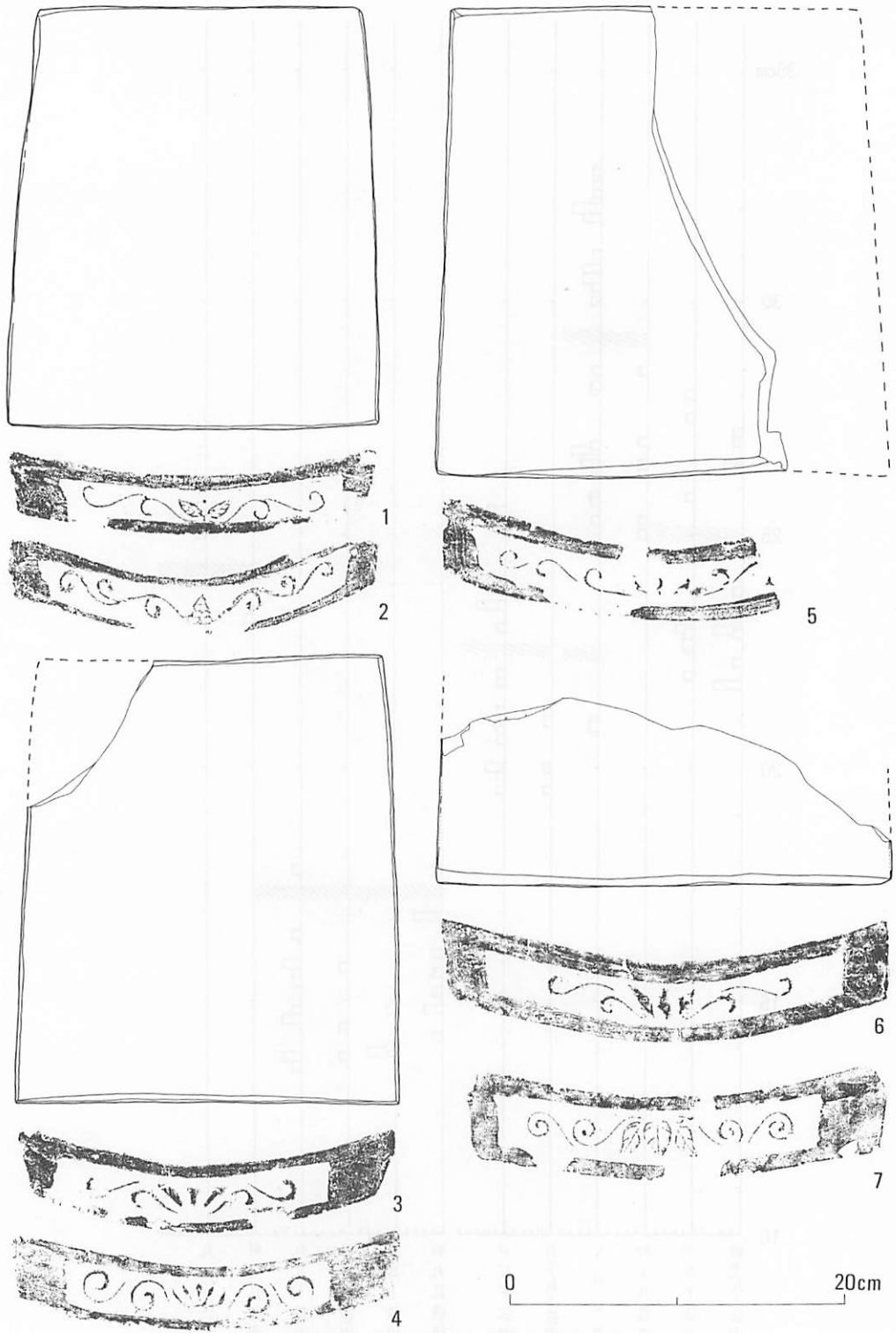
軒丸瓦の瓦当面の横径は14.2~16.8cmが主で10点あり、17.8cmの1点のみやや離れている。前者は5寸、後者は6寸を基準値としている。丸瓦で上弦巾のわかる6例は13.8~14.8cmの5点と、18.8cmの1点とに明確にわかれ、同様に5寸・6寸を基準値としている。

下弦巾については、6寸巾の2点に直接対応する数値は不明であるが、6寸巾に相当する



第32図 江戸時代瓦類部位別計測値頻度図





第33図 江戸時代軒平瓦拓影・実測図

17.8cmの丸瓦が1点みられる。しかし他はすべて13.6～16.4cmであり、5寸を基準値とするものが主体となっている。

丸瓦の長さは、22.3～23.5cmの3点と、25.0～26.8cmの5点とに大別される。それぞれ基準値は7寸5分と8寸5分である。軒丸瓦については前者に属す1点しか長さはわからない。そして横径・上弦巾と長さの関係のわかる3点についてみれば、横径・上弦巾はすべて5寸巾であるのに対し、長さは7寸5分群が2例、8寸5分群が1例みられ、使用部位の違いを想定させる。

軒丸瓦・丸瓦の横径・上弦巾の5寸と6寸は、それぞれ軒平瓦・平瓦の7寸5分と9寸に対応することが数量的に推定できるが、その比率もともに2：3となる。

### 3. 法量の変遷について

今日の五六(ゴンロク)と七二(シチニ)というサイズの2大別が江戸時代にすでにみられることは、以上で明らかである。暗渠の年代は、暗渠1は江戸中期、同2は江戸前期の可能性が強いが、瓦の数量は2の方がきわめて少ない。しかし2大別が江戸前期に遡ることは認めてもよいであろう。これがさらにどれほど遡るかが今後の課題である。

一方平安前期の平瓦は上弦巾1尺巾を標準とし、9寸巾等のグループもみられる。これに対応する丸瓦も概して6寸と5寸5分であるらしい。しかし平安後期になると5～6寸巾の平瓦がかなり多くみられるようになり、平安前期の1尺・9寸とサイズの瓦の比率が低下するらしい。しかしこれは前後の時代と比較すれば異常なことと言わざるを得ない。

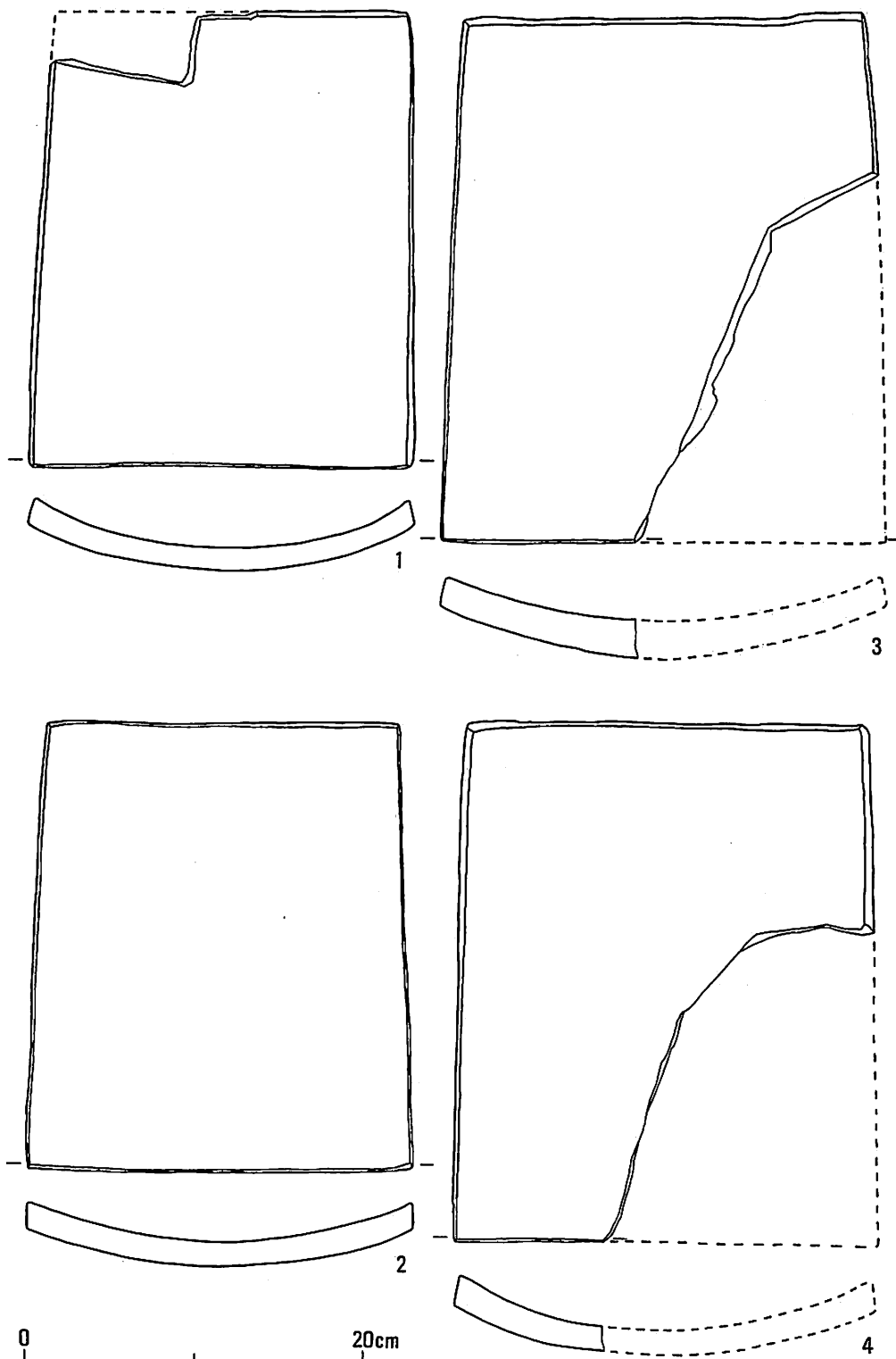
これは標準サイズの変化ではなく、小型瓦が新たに加わってきたとみるべきである。そして近世と異なり瓦を葺ける階層の限定されていることを考慮すれば、たとえば玄関まわりの小細工部分に小型瓦を使用した可能性が考えられてくる。標準サイズが近世以降では7寸5分巾の七二の瓦を最小限度としていることを、平安後期の場合についても十分に考慮すべきであろう。さらに言えば、建物の上ののせるものという本来の機能をおろそかにして、瓦当面の文様による編年・貢納問題に研究がかたよりすぎているようにみられるのである。たとえば、計測表に内区・外区の数値が詳しく記載されても、長さの数値が欠落したりするのは、その顕著な著われといえよう。

## 第4節 焼塩壺(第7表, 第37～41図参照)

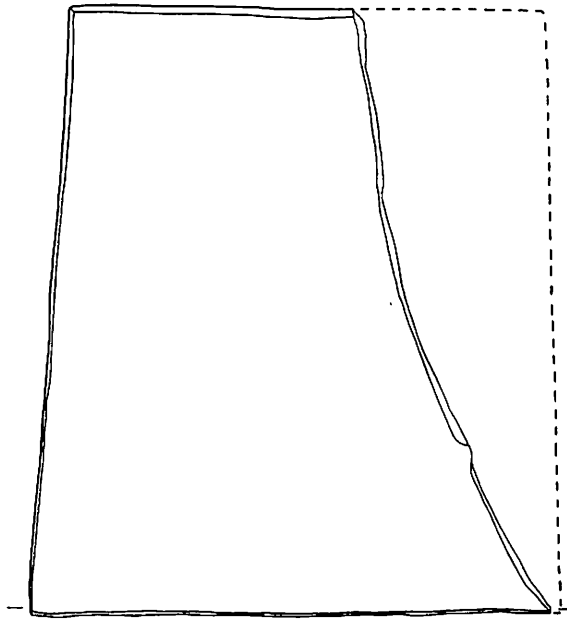
### 1. 出土資料の分類

焼塩壺は、身179点・蓋55点の合計234点が出土した(第7表)。出土状態をみても、土壙・溝・石垣等の遺構と包含層から出土している。いずれも廃棄された状態であることは同じである。

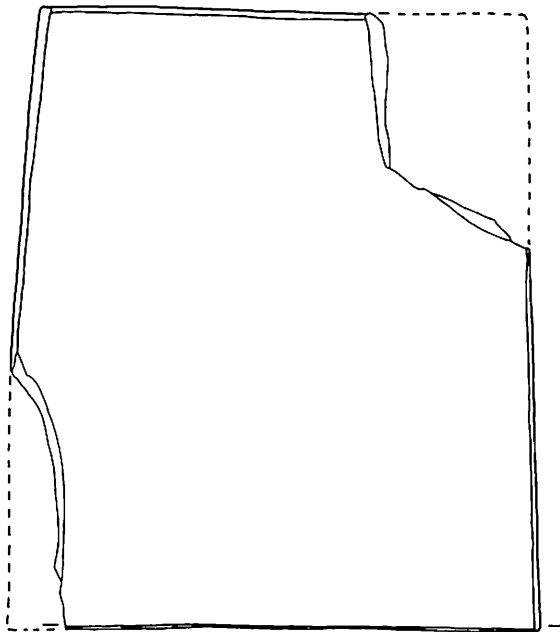
身179点の形態には、9類型がみられる。他に小破片のため判別し難く、中間形態として取



第34図 江戸時代平瓦実測図



5



6

扱わざるを得ないものが2類みられる。筆者分類のD・E・Lの3類は出土していない。次に各類ごとにその特徴をみていくことにする。

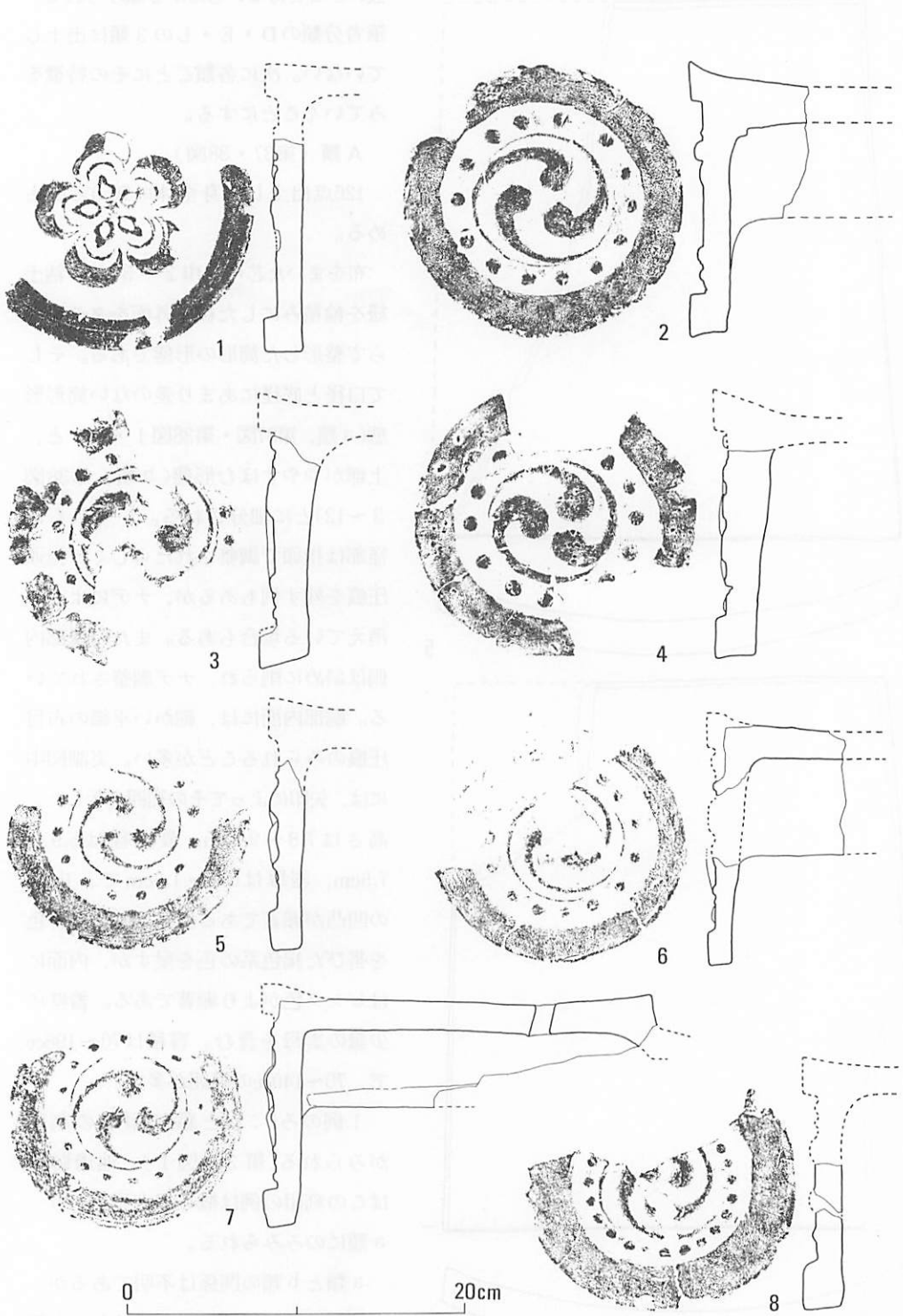
A類(第37・38図)

126点出土し、身全体の70.0%を占める。

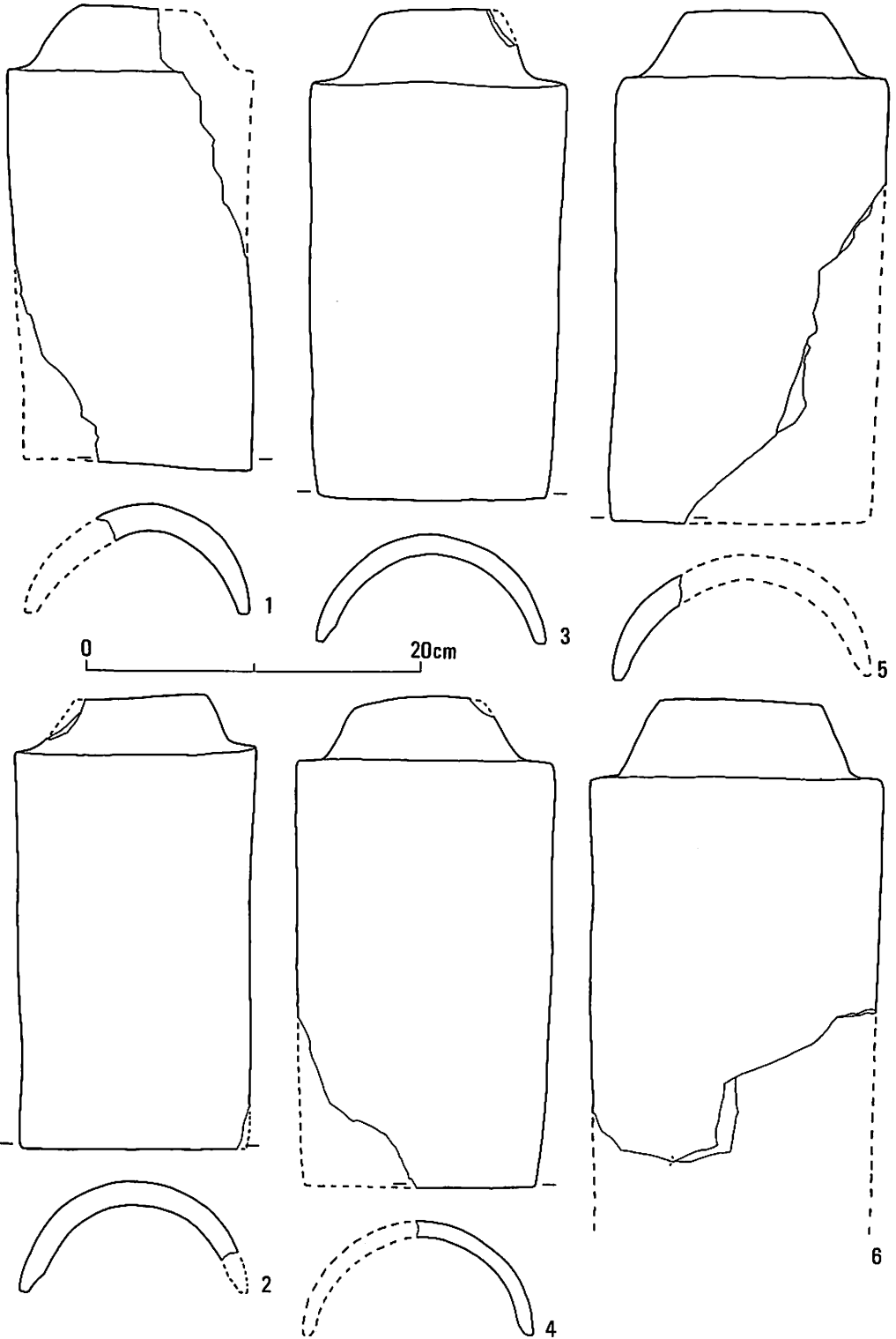
布をまいた芯に、巾2~3cmの粘土紐を輪積みにした後、外面をタテにへらで整形した筒形の形態である。そして口径と底径にあまり差のない筒形態(a類, 第37図・第38図1・2)と、上部がややすぼむ形態(b類, 第38図3~12)とに細分される。いずれも口径部は指頭で調整されたらしく、指頭圧痕を残す例もあるが、ナデによって消えている場合もある。また口縁部内側は斜めに削られ、ナデ調整されている。胴部内面には、細かい平織の布目圧痕のみられることが多い。実測図中には、矢印によってその範囲を示した。高さは7.8~9.9cm, 最大径は5.9~7.5cm, 器厚は0.7~1.5cmで、内面の凹凸が顕著である。色調はピンク色を帯びた褐色系の色を呈すが、内面にはピンク色がより顕著である。器壁に少量の雲母を含む。容積は70~198ccで、70~140ccの範囲が多い。

1例のみ『ミなと藤左衛門』の刻印がみられる(第37図1)。他遺跡ではこの刻印の例は概して大型であり、a類にのみみられる。

a類とb類の関係は不明であるが、土城70出土の3例(同2~4)、土城97出土の2例(同5・6)はa類のみ、



第35図 江戸時代軒丸瓦拓影・実測図



第36図 江戸時代丸瓦実測図

第7表 焼塩壺出土数量一覧表

分類 出土 状態	身													蓋				計
	A	B	BorC	C	F	G	H	Hor I	I	I or J	J	K	小計	A	B	C	小計	
土壙 2	3												3	1			1	4
土壙 29	1			4									5		1		1	6
土壙 34			1										1					1
土壙 38	2					3							5					5
土壙 52														1			1	1
土壙 53		1						1				2	4					4
土壙 57															2		2	2
土壙 59	1	1											2					2
土壙 70	3												3					3
土壙 78		2											2					2
土壙 88	4												4	2			2	6
土壙 90	3	3		1									7		6		6	13
土壙 93	3												3					3
土壙 97	2												2					2
土壙 107	1												1					1
土壙 134		1		1									2		1		1	3
土壙 140						1							1					1
土壙 163	4												4					4
土壙 213				1									1		2		2	3
溝 9	1				1								2		2		2	4
溝 10					1								1					1
石垣 2	2												2					2
包含層	96	11	1	5	3	3	1		1	1	1	1	124	15	21	1	37	161
計	126	19	1	13	5	7	1	1	1	1	3	1	179	19	35	1	55	234

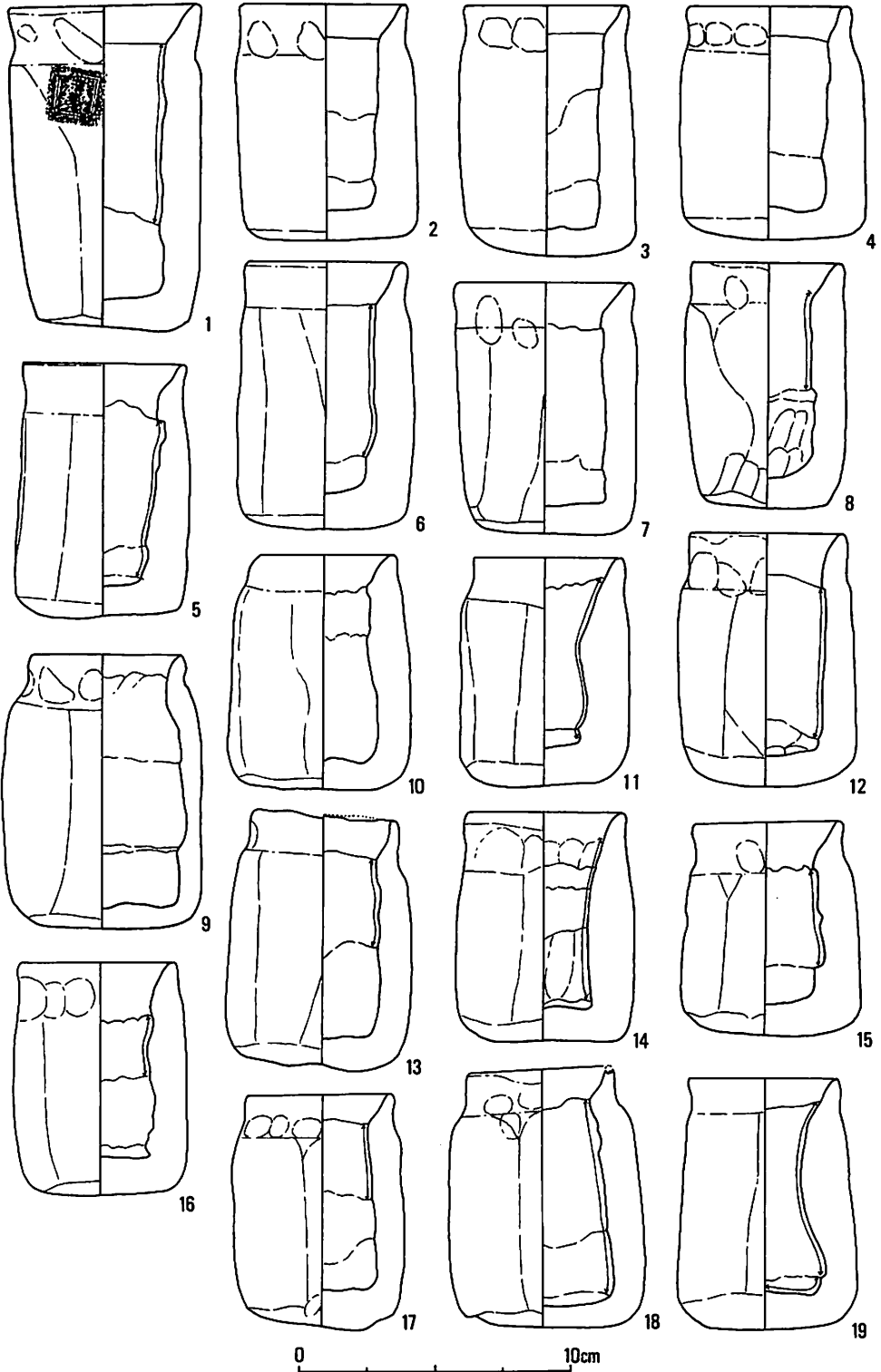
土壙88の4例(第38図4・5)はb類のみであり混在していないから、時期差の可能性もある。なお第37図7は溝9、第38図3は土壙2、同6は土壙93より出土している。

#### B類 (第38図13~19)

本類は19点出土している。10.6%。

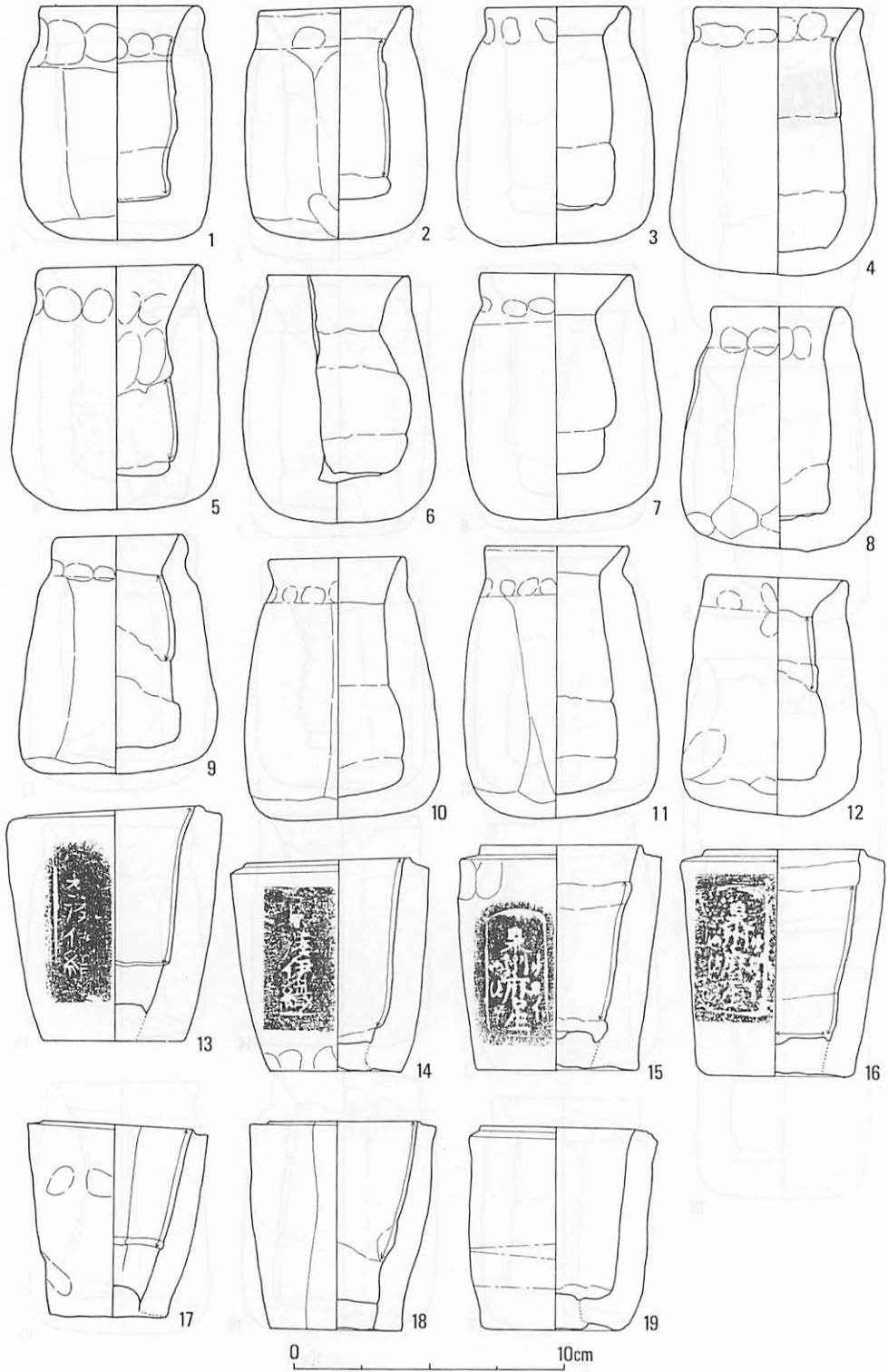
A類と同様に布をまいた芯の粘土板をまきつけて作っているが、粘土板は輪積みによらず、1枚の粘土板による板づくりである点に大きな製作技法上の差がある。そして芯が截頭円錐形のため、口縁部がくびれないこと、内面に凹凸がなく平滑である。口縁部には印籠型の蓋受けが作り出されており、この肩の部分の最大径を示すが、これに対して底径はやや小さく、全体として背低いコップ型を呈している。この整形は倒立させて行なうらしく、底部には粘土紐を渦巻状につめこんだ後へらで削って平坦にしている。高さは7.1~8.5cm、最大径6.5~7.8cm、器厚0.8~1.3cm、容積74~118ccであり、A類の主たるサイズに近い。色調は橙褐色を呈すが、内面はややピンク色が強い例もある。胎土には少量雲母が含まれている。

土壙53出土の2例(第38図13・14)と、土壙78出土の2例(同15・16)には刻印がみられる。ともに他種の刻印を混じえない点に注目される。前者の刻印は『泉湊伊織』であり、後者ののは



第37图 煨盐壺实测图·1





第38図 焼塩壺実測図・2

左右にそれぞれ小さく『サカイ御塩所』の3字ずつを伴う『泉州磨生』である。

#### C類（第39図1）

本類は13点出土している。7.3%。

B類の退化形態であり、蓋受け部の凸出が痕跡的になったものである。完形品は1例のみで、高さ7.1cm、最大径6.3cm、器厚0.8cm、容積80ccで、サイズもやや小型化している。

なお『因湊伊織』の刻印のみられる破片が1点みられるが、口縁部形態が不明のためB or Cとして扱った(第39図2)。しかし器壁が1.2cmと厚く、またこの種類の刻印が本遺跡ではB類にのみみられることから、本遺跡に関する限りB類の可能性が大きい。

#### F類（第39図3～5・7）

本類は5点出土した。2.8%。

製法・形態上はAb類によく似ているが、内面に凹凸がみられず平滑なこと、小型であること等に大きな差がある。しかし、口縁部形態とその内外面のナデ調整、および器厚が0.9～1.7cmときわめて厚いことはよく似ている。高さ5.8～6.8cm、最大径5.5～6.3cm、容積30～38ccである。このサイズはAb類を補完するものかもしれない。また第39図3は溝9、同4は溝10の出土であり、溝9よりは別にAa類(第37図7)が出土している。色調は淡橙色・淡赤褐色・淡黄褐色・淡灰色を呈し、胎土に少量雲母が含まれることもある。

#### G類（第39図6）

本類は7点出土している。F類と製作技法・サイズ等はよく似ているが、胴部が膨らみ壺状を呈す点において区別される。図示した例は高さ6.4cm、最大径6.6cm、器厚1.0cmで、容積74ccである。淡橙褐色を呈すが、胎土に雲母は含まれていない。口縁部は内外面ともナデ調整がみられ、胴部外面には指頭押圧成形痕がはっきり残っている。

#### H類（第39図8）

本類は1点しか出土していない。

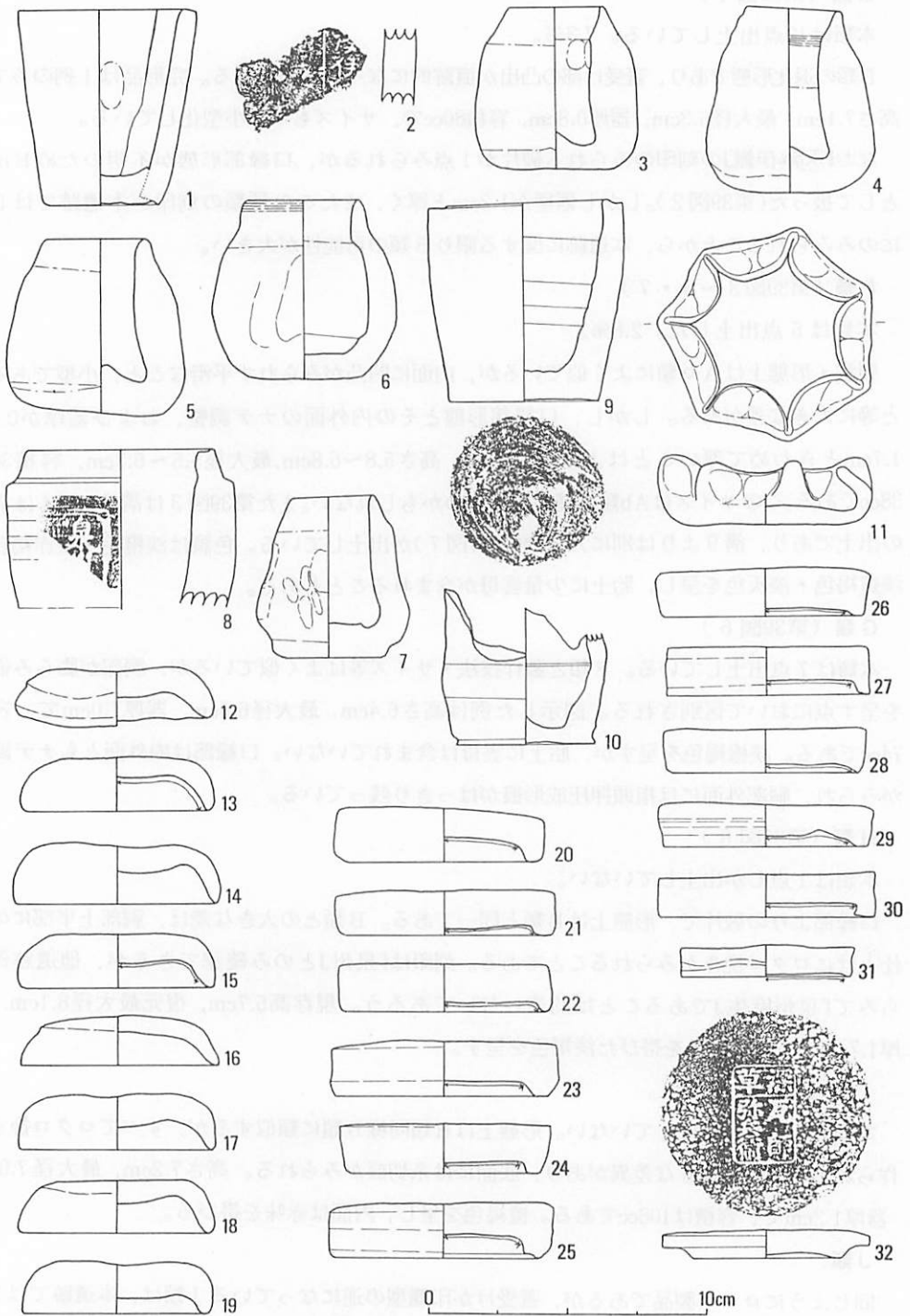
口縁部よりの破片で、形態上はB類と同一である。B類との大きな差は、胴部上半部にのみ仕上げにロクロ挽きがみられることである。刻印は『泉州』とのみ確認できるが、他遺跡例からみて『泉州麻生』であることは間違いないであろう。現存高5.7cm、復元最大径8.1cm、器厚1.7cmで、ピンク色を帯びた淡褐色を呈す。

#### I類（第39図9）

本類も1点しか出土していない。形態上はH類同様B類に類似するが、すべてロクロ挽きで作られている点に大きな差異があり、底面には糸切痕がみられる。高さ7.2cm、最大径7.0cm、器厚1.2cmで、容積は108ccである。橙褐色を呈し、内面は赤味を帯びる。

#### J類

同じようにロクロ製品であるが、蓋受けが印籠型の逆になっているJ類は、本遺跡では3点出土している。なお第39図10は器厚の薄さにおいてJ類に類似しているため、口縁部形態が不明であることもありI or J類として取扱うこととした。



第39図 焼塩壺実測図・3

### K類（第39図11）

本類も1点しか出土していない。

本類は今までの諸形態とは顕著に異なっている。これは皿形の素焼土器を花弁状に折りまげて作られたもので、最大径7.7cm、高さ2.6cm、器厚0.7cm、容積38ccで、淡褐色を呈す。

以上の身に伴う蓋は55点出土しており、3類に分類される。

### A類（第39図12～19）

本類は19点出土している。34.5%。

丸味のある厚手の皿を逆にした形態で、内面には細かい平織の布目圧痕がみられることがある。直径6.7～7.3cm、高さ1.8～2.2cm、器厚0.6～1.2cmである。色調は淡橙色・橙褐色等を呈すが、内面は赤味が強い場合もある。

これは身A類に対応するもので、一見不釣合な組合せであるが、この蓋はおそらく手塩皿ともなったためであろう。第39図12は土壌2より出土しているが、ここからは身A b類(第38図3)が出土している。第39図13は土壌88の出土で、ここでも身A b類が出土している(第38図4・5)。

### B類（第39図20～31）

本類は35点出土している。63.6%

逆凹字形の断面を呈し、上面は平坦で側面とは稜を形成している。印籠形の蓋であり、身B・C類に対応するものである。直径6.1cm、高さ1.1cmの1例(第39図31)を除けば、他は7.2～8.2cm、高さ1.6～2.0cmであり、皿状部分の深さは前者が0.1cm、他は0.2～0.9cmである。したがって後者は身B類、前者は身B類の退化形態である身C類に対応する可能性が大きい。これらの内面には細かい平織の布目圧痕が全面にみられることから、身の場合と同様に芯になる型の存在が想定される。第39図20は土壌29、同21・22は土壌90の出土であるが、身は出土していない。同23は溝9出土であるが、ここからは身A a類(第37図7)と身F類(第39図3)が出土している。これらは混在とみなされる。

### C類（第39図32）

本類は1点しか出土していない。

直径7.4cm、厚さ1.0cmで、胎土に雲母を少量含んでいる。色調は淡灰色を呈し、今まで記してきた身・蓋類のいずれとも異なり、二次焼成の色調を呈していない点が特徴的である。これに対応する身L類は、本遺跡では出土していない。

上面には『深草 瓦師 弥兵衛』の刻印がみられる。

## 2. 焼塩壺とは何か

本資料は焼塩壺であって、塩壺ではない。焼の1字は簡単に省略できるものではない。近年のほとんどの報告書が塩壺と記し、極端な場合は製塩土器と誤解されているほどである。昭和初期に先駆的業績を残した前田長三郎氏等は、いずれも自明のこととして深く記していないが、世情が変わった今日、はっきり文章化しておく必要もあろうかと思われる。

まず江戸時代の『本朝食鑑』をみると、『一種有<sub>レ</sub>焼塩者<sub>一</sub>用白<sub>レ</sub>、塩再入<sub>レ</sub>瓦<sub>レ</sub>、器掩<sub>レ</sub>口炭火焼過則色白如<sub>レ</sub>雪形軽味淡性亦柔惟不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>助<sub>レ</sub>醬鼓之味<sub>一</sub>也』と記されており、壺ごと焼くことが明記されている。

後述する焼塩屋の子孫弓削弥七氏もこのことを証明し、さらに詳しく話を聞かせて頂いた。それによれば、まず粗塩を臼の中で細かく粉砕し、これを別注で焼かせたコップ形の小型土器にいれ、天井のない窯のなかにつみかさねて焼いた。はじめは真黒な炎が出、やがて真赤になり、しだいにピンク色を帯びてくる。この時の火の引き加減が難かしかったが、これでニガリ等がとれ真白な焼塩ができたという。このピンク色はおそらく塩焼けの色で、焼塩壺内面の変色とも共通するものであろうし、さらに陶器にみられる火だすきの文様は、ワラ縄を塩水に浸した後で巻きつけるという。

くりかえして記せば、土器はまずそれ自体として焼かれ、第2回目は焼塩製造用として焼かれたのであり、全体に橙褐色等の二次焼成の色調を呈すのは当然のことである。したがってメーカー側の立場からは、この壺入りのまま販売することが、不純物の混入をしていないという意味で、品質本証の看板になったのであるという。

京都市北郊の木野部落でも、少量の焼塩は作られていた。焼塩壺の形態は異なるが、二度焼きをすることに関しては全く同一であった。

器壁が薄く小型であることは、いわゆる製塩土器とは全く異なる点である。そしてこれが食卓塩として食膳にのぼっていたことは、幕末の瓦版の絵にもみることができる。これには『かけしほだい』として1匹のマダイとセットになった絵が描かれている。身の厚いタイを食べ進むと、塩味が減少する。その時に焼塩をかけて食べたものだという伝承も、関西では聞くことができた(小谷方明先生談)。次節に報告するように土城78からは、アワビ・サザエ・アカニシ・ハマグリ等の貝類と、ハマチ・スズキ等の魚骨とともに、マダイの上下顎歯骨等各部位の骨が出土しており、きわめて注目される。

製塩土器と異なる他の特徴は、焼塩壺のメーカーが第一次生産業者ではないということである。粗塩は他から購入したものを使用するにすぎない。次に項を改め、どこで二次加工が行なわれたかを記し、本遺跡出土品の生産地についても考察を加えることとする。

### 3. 焼塩壺の生産地

焼塩壺の生産地には、1・堺湊、2・堺御塩所、3・泉州麻生、4・播磨、5・京都木野、6・同深草等がある。このうちもっとも古くから行なわれ、かつ大きな販路をもっていたのは1の堺湊の場合である。これは堺町奉行所付の湊村の意味で堺港ではない。現在の堺市西湊町に当り、堺をとりかこむ堀を紀州街道に沿って南へ渡って直ぐ西側の地域である。後に紀州街道の起点に当る大阪難波に出していた支店が本店となり、昭和20年の大空襲で焼失するまで営業していた。もっとも壺焼塩は明治時代までであるという。この傍流ともいべきメーカーも、江戸中期には堺市内に出現した。

また焼塩というものには別に花形塩というものがあり、現在砂糖に花形のをみるが、こ

れのもとには花形塩の模倣であるらしい。この花形塩を江戸前期より製造していた3の泉州麻生でも、一時まねて壺焼塩を製造した時期がある。4の播磨では、江戸後期になってようやく焼塩を始めたらしい。5・6は、これらに比べて小規模であつたらしく、出土例も京都市内に限定されている。4の播磨以外は、いずれも塩田をもたない地域であり、商圈を背景とした二次生産地である。

好都合なことに、焼塩壺の製作技法は各地で異なっている。1の堺湊では輪積みおよび板作り、2の堺御塩所では板作り、3の泉州麻生も板作りであるが、仕上げの調整にのみロクロを使う。4の播磨はロクロ挽きである。また播磨産のもの胎土には雲母の混入がみられないことも特徴的である。5の京都木野の場合は、1～4の筒ないしコップ形と異なり、皿を花奔状に折りまげた特異な形態である。6の京都深草は焼塩製造と容器製造とが切り離されている点に特徴がある。

本遺跡出土資料の産出地は、身A類・身B類の大部分・身C類と蓋A・B類は堺湊、身B類の一部は堺御塩所、身H類は泉州麻生、身I・J類は播磨、身K類は京都木野、蓋C類は京都深草の製品である。身G・H類については目下のところ不明である。堺湊産の可能性が高いが、出土地がほとんど京都市内に限られていることに問題があり、今後の調査に期待したい。

したがって234点の焼塩壺の生産地別比率は次のとおりであり、堺湊産が圧倒的多数を占めていることがわかる。

堺湊産	211	90.2%	京都木野産	1	0.4%
堺御塩所産	2	0.9%	京都深草産	1	0.4%
泉州麻生産	1	0.4%	不明	12	5.1%
播磨産	6	2.6%			

#### 4. 焼塩壺の年代

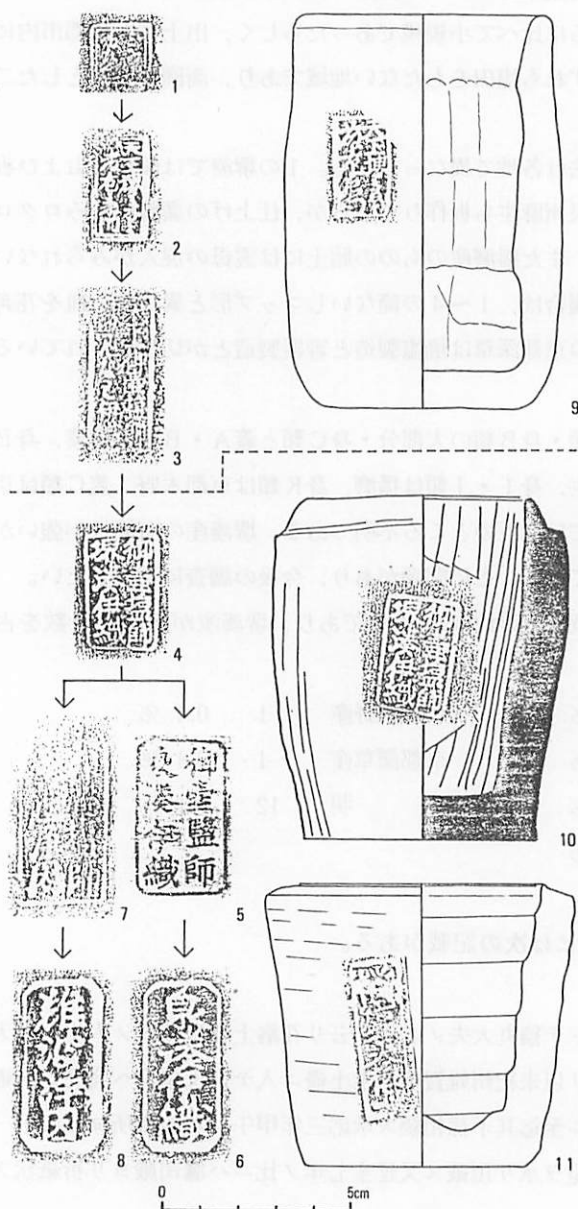
貞享元年(1684)の『堺鑑』土産の部には次の記載がある。

##### 湊壺塩

今ノ壺塩屋先祖ハ昔年ハ藤太郎トテ猿丸大夫ノ末孫ト云リ花洛上鴨畠枝村ノ人也シテ天文年中ニ當津湊村ニ来住居シテヨリ以来紀州雑賀塩ヲ求土壺ニ入テ焼反諸国ヘ商売シテ壺塩屋藤太郎ト云シ世ニ広用故ニ今ニ至迄其子孫相統ス承応三年甲午ニ女院御所ヨリ天下一ノ美号不苦トアリ時ノ奉行石河氏はヲ承リ頂戴ス又延宝七年ノ比ニハ鷹司殿ヨリ折紙状アリ呼名伊織ト号ス

このうち藤太郎が藤太夫の誤りであることは、すでに前田長三郎氏によって指摘されていることである。後に天下一の名は幕府によって禁止される(天和二年・1682)。したがって焼塩壺に押された刻印はめまぐるしく変転している(第40図参照)。

これらを整理すると、最初は『ミなと藤左衛門』(第40図1)で、承応三年(1654)以降は『天下一堺ミなと藤左衛門』(同2)となり、延宝七年(1679)には『天下一御塩壺師堺見なと伊織』(同3)となり、天和二年(1682)九月からは『御塩壺師堺湊伊織』(同4)に変わる。そして未



第40図 刻印の変遷と参考資料

したがって、前章第3節に記した裏ごめの土層中にA類を出土した石垣2は、下っても1672年までに建てられたものであり、1635年に水戸藩が取得した片山意庵邸に関わるものと判断される。

B類にみられる2種の刻印のうち、『泉湊伊織』は同じく難波屋の刻印であり、上記のように1738年には遡らず、下限は19世紀初頭とみられるので、大略18世紀後半とみなされ、C類は

だ焼塩壺に実例をみないが、元文三年(1738)に九代伊織が船待神社に奉納した菅原道真公の掛軸の裏には、『泉湊伊織』(同5)の押印がみられ、これを経て『泉湊伊織』(同6)に変わったと思われる。一方その下限は『拾遺泉州志』の記載から下っても19世紀初頭までであろう。これを裏付けるように、すでに八代休心の代に難波に支店を出していることが前田長三郎氏の調査によって明らかにされている。第40図7・8に示す『御塩壺師難波浄因』、『難波浄因』の刻印は、このことを端的に反映しているといえよう。屋号もまた難波屋といっていた。

幸い刻印の変化と形態とは対応しており、刻印の1から3まではA類、4以降はB・C類に対応しており、まったく例外は認められない。したがってA類は1672年を下ることはない。またその上限は最大天文年中(1632~54年)におよぶ可能性がある。本遺跡におけるA類中の刻印は、1の『ミなと藤左衛門』のみであるが、これのみはさらに1654年以前ということになる。

これにやや遅れるであろう。

B類にみられるもう一種の刻印『泉州磨生<sup>サカイ</sup>御座所<sup>御座所</sup>』は、第40図に示す一連の堺湊の難波屋のそれとは異なり、正徳3年(1713年)より難波屋を模倣した堺九間町の奥田利兵衛の刻印である。これで上限は明らかであるが、下限は不明であり、大まかに18世紀とせざるを得ない。

F・G類については不明であるが、A類に伴う可能性があることは、すでに記したとおりである。

H類については、延宝年間(1673~80)から享保年間(1716~35)にかけて模倣されたと言われ、17世紀後半から18世紀後半にかけて約60年の巾がある。

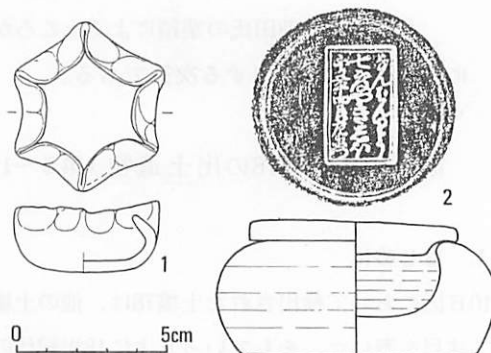
次にI・J類のロクロ製品の年代であるが、これには幸い第40図11の『播磨大極上』の刻印(外務省構内出土)から、播磨産であることが判明するのであるが、その実年代は、安政三年(1856)の大阪木村兼葎堂の『諸国板行帖』中に、『御焼塩赤穂伯清堂・潮清堂』とあり、この頃すでに焼塩壺があったであろうと推定されるにとどまる。ただ製作がロクロ挽きであること、その形態の母型は板作りであること、泉州麻生では板作りの仕上げ調整にのみロクロを用いていること、麻生の塩は赤穂からの買付けが多いことなどから、泉州麻生で焼塩壺が模倣されたという延宝年間から享保年間を上限とみなすことができる。将来他に好資料を得て、この年代はさらに明確にしていきたいと思う。

K類については、攪乱層出土のためその年代は不明であるが、鈴木重治氏による同志社中学敷地内の発掘調査では、宝永五年(1708年)と天明八年(1788年)とみられる焼土層間の層中より1例出土しており、18世紀まで遡り得ることが判明している。第41図1は、今でも京都市左京区木野の地元に唯一保存されている資料である。

L類は蓋のみ出土したが、江谷寛氏による伏見奉行前遺跡では身も出土している(第41図2)。ロクロ製品で、直径9.2cm、高さ3.8cmの扁平広口状を呈し、器厚は2.0cmに達しきわめて厚い。深さ2.5cm、内径5.5cmで、容積は52ccである。胎土には雲母を多く含む。色調は淡褐色

であり、二次焼成の痕跡はまったくないのであり、焼塩の焼成をかねた焼塩壺と異なり、純粋に焼塩の容器として作られたものである。このことは、胎土・色調を共有する蓋の刻印からも推定することができる。

蓋2例のうち1例は「奈ん者ん七度 本やき志本」、他の1例は「奈ん者ん里う七度やき志本 ふか草四郎左衛門」と記されており、南蛮流や本焼、七度焼のところに、新製法の誇示をうかがえるのではあるまいか。場所は本遺跡例と同じく京都市伏見区深草であり、同一家系に属す可能性が



第41図 焼塩壺関連資料実測図

1:木野現存品 2:伏見奉行前出土



## 90 第5節 土壙78の出土遺物

大きい。本類の実年代については手がかりがないが、間接的な史料から19世紀に遡る可能性は考えられる。木村捷三郎・宇佐晋一等の先生方が、「焼塩なぞわざわざ買うものではない。お歳暮に深草の瓦屋が届けてくれるものだ」、と言われた焼塩は、おそらく本類のものを指すのであろう。お歳暮に配ることは、木野でも聞くことができた。

本遺跡の焼塩壺は、ほぼ江戸時代の全期間に亘り存在し、若干安土桃山時代と明治時代に亘ることが明らかである。したがって初期においては医師片山意庵邸において、大部分の時期は水戸藩邸において使用されたものとみることができる。

因みに焼塩壺出土遺跡は、1980年9月現在で約160遺跡であり、このうち51%が京都市内に集中し、次いで東京都区内が28%である。これに次ぐのは大阪府・兵庫県・福岡県下であり、圧倒的に関西に多い。これに出土点数を加味すれば、その差は一段と顕著になる。本遺跡では234点出土しているが、東京都区内の全数を合わせてもこの数には達しない。

これらの出土遺跡の性格は、貴族・武士の邸宅址、有力社寺及び城跡に集中する傾向がある。中部地方における出土地も、名古屋城・岡崎城・丸岡城・富山城・長岡城及び松本城等の城跡と、駿府金座跡のみである。庶民にとってはニガリの抜けた焼塩は必要に応じてハウラクで煎ればよかったのである。焼塩では漬物はつけられないし、ニガリは豆腐や土間を固めるのにも大切であったのである。

### 追記

焼塩壺に関する先駆的業績を残した前田長三郎氏の『堺焼塩壺考(未定稿)』は、50部限定本であり、現在小谷方明先生と孫に当たる前田洋子氏所蔵の2部しか残存していない。確かに人目に触れる機会は少ないが、しかしその後昭和9年3月発行の『武蔵野』第21巻第3号に、『堺焼塩壺考』を発表している。現在に至るまでこれがまったく無視されていたことには驚きを禁じ得ない。しかも難波屋の子孫の出現により、その内容はきわめて豊かになっており、その後の研究指針をも明示しているのであり、先学者の業績をあたかも自説のごとく論文化している方々には、反省を促したい。

本稿もまた前田氏の業績によるところが大きく、諸文献を御教示頂いた小谷方明先生には心から謝意を表する次第である。

## 第5節 土壙78の出土遺物(第8～11表, 第38・42～44図, 図版第41～43参照)

### 1. はじめに

10B区において検出された土壙78は、他の土壙と異なり多量の自然遺物が出土したことにおいて注目を惹いた。そしていっしょに18世紀代の焼塩壺が2点(第38図16・17)出土したことから水戸藩邸時代のもつと判断され、あわせて多量に出土した素焼土器等から、水戸藩邸における江戸中期のある年の正月の料理について、若干具体的な復原が可能になってきた。前節に

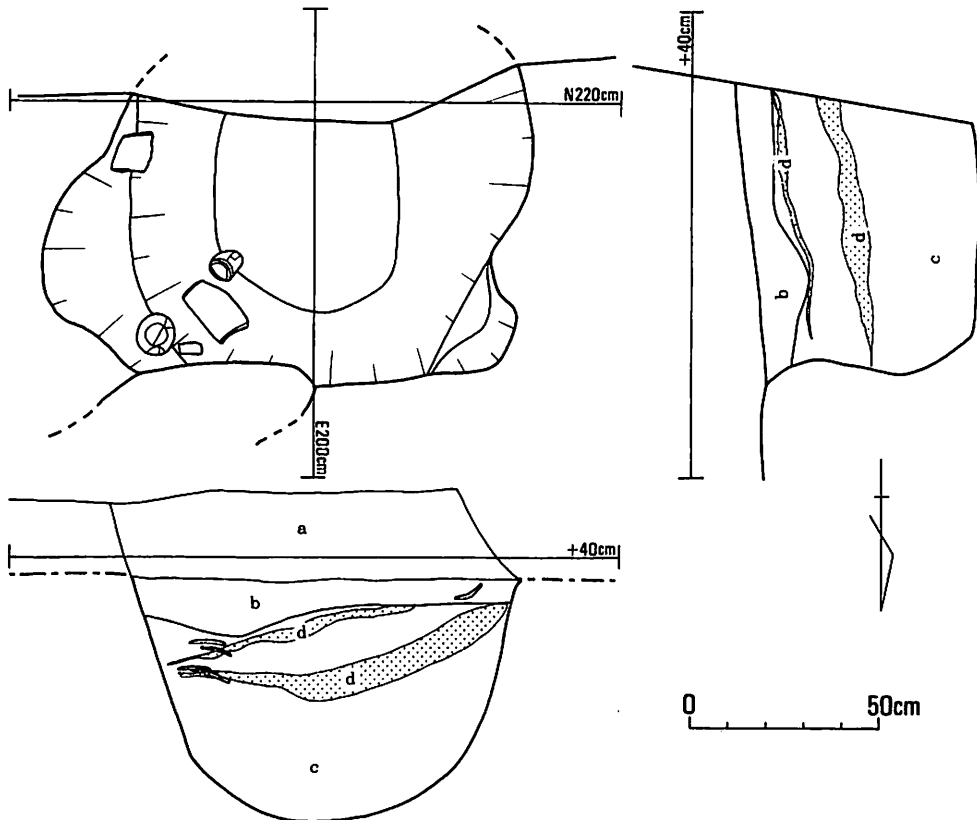
記したように、焼塩壺は形態や刻印の変遷から近世の有力な編年資料として重要であるばかりではない。その焼塩としての本来の用途に即した食生活史の実証的な研究上にも、非常に益するところが多いのであり、本稿もこうした研究へのささやかな試論である。

2. 土壌の形態と層序

土壌78は石垣2の西側に当たる10B区で、西南地区の南壁直下において検出されたため、完掘することはできなかった(第42図、図版第41)。平面形態は隅丸長方形で、東西巾1.05m、南北0.8m以上である。底面は東西0.5m、南北0.5m以上で、南北方向にやや長い。本土壌は第3層上面から掘り込まれており、深さは0.85mである。

土壌内の層序は次のとおり。

- a層 焼けた瓦片、礫、炭、しっくい、焼土等を含む暗灰色土層。約20cm。
- b層 やや粘質の褐色土層。6～15cm。
- c層 暗褐色土層
- d層 貝 層



第42図 土壌78実測図

土城内はa層、b層、貝層(d層)を2層包むc層とに3大別される。そしてb～c層は短時間の堆積であり、a層は少し間隙をおいて、最終的に本土城を埋積した層とみなされる。c層とd層とは必ずしも厳密に区別できるものではなく、貝層(d層)前後のc層にはかなり自然遺物が含まれていて、特に顕著な部分を貝層として記録したにすぎない。

### 3. 人工遺物

本土城出土の人工遺物は、次のとおりである。

#### a. 焼塩壺 (第38図16・17)

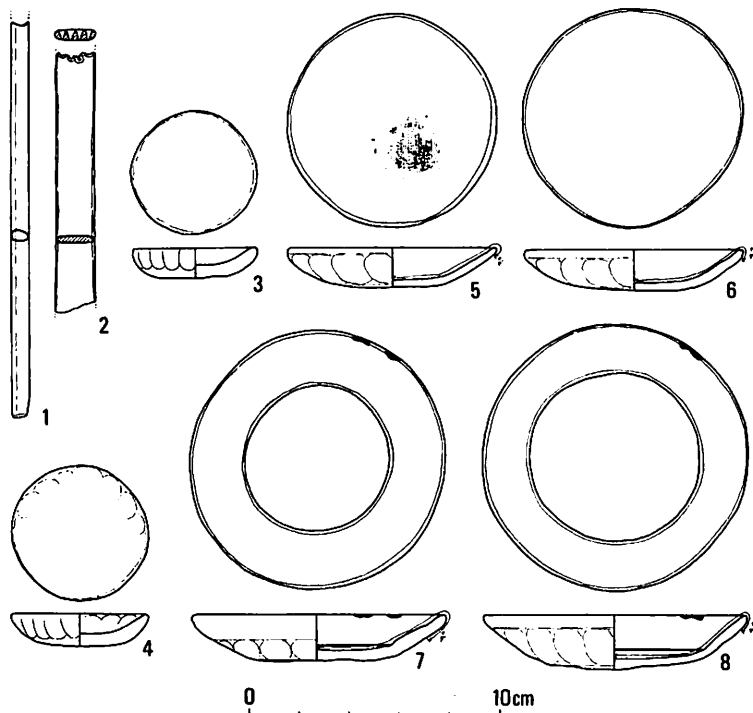
前節に記したように、18世紀代とみなれる堺御塩所産の焼塩壺2点が出土した。

#### b. かんざし (第43図1・2)

ビードロ製1点、骨製1点の2点が出土した。

ビードロ製かんざし(第43図1)は吹きガラス製で、断面は楕円形である。先端はやや細まるがふさがってはいない。後端は欠失するが、別素材に挿入されるのかもしれない。長さ15.7cm、径7×5mm、厚さ1mmである。鉛ガラス特有の白い風化面がみられる。

骨製かんざし(同2)は扁平で、巾1.6cm厚さ3～4mmで、先端・後端ともに欠失している。後端寄りに漏斗状の孔が、4個穿孔されており、上部径は3～4mm、下部径は1mmである。垂飾をとりつけるための孔であろう。



第43図 土城78出土遺物実測図

1・2:かんざし 3・4:コオロケ 5・6:コオジュウ 7・8:オオジュウ

## c. 素焼土器（第43図3～8，第44図）

京都市左京区木野地区において中世以来焼かれてきた素焼土器のうち、3種類が出土した。なお時期不詳ではあるが、木野の焼塩壺が本土壺以外で出土していることは、前節に記したとおりである。3種はいずれも皿で、小さい方から順にコオロケ・コオジュウ

（小重）・オオジュウ（大重）とよばれている。皿主体で禁裏御用をつとめたことが木野地区の重要な特色である。作業員として木野地区の樫木まつさん達がみえており、種々御教示頂くことができたのは幸いであった。

総数303点のうち、オオジュウが87.1%を占め圧倒的に多く、ついでコオロケが12.2%であり、コオジュウは0.7%にすぎない（第8表）。またそれら計測値は第9表に示すとおりである。

37点出土したコオロケの大きさ（平均）は、径5.4cm、高さ1.2cmで、器厚は3～4mmである。肘でついた後逆にして、まわしながら親指で曲げながら口縁部を立上がらせるようにして皿に作っている。ナデ調整は行なわれていない（第43図3・4）

コオジュウ（小重）は2点のみ出土した（同5・6）。大きさ（平均）は口径8.5cm、高さ1.7cmで、器厚は4.5mmである。2例とも肘でついた時の肘当の麻布が残っており、特に3に



第44図 洛北木野の土器作り  
（宇野三吾・小畑正紀『日本のやきもの』9・  
京都，昭和50年より）

は顕著である。肘つきを特徴とする木野地区の特徴をよく伝えている（第44図）。コオロケと同様肘つきの後まわしながら周辺をまげていき、最後に内面全体と口唇のやや外側までを、麻布でナデ調整を行なっている。このナデの方向を逆にたどると“6”の字状にみえる。

オオジュウ（大重）もコオジュウと同一方法で作るが、内面の底部と立上り部との境に沈線を一周させることに差異がある（同7・8）。大きさ（平均）は口径10.4cm、高さ2.0cmで、器厚3～5mmである。内面の沈線の径は6.2～7.5cmで、6.5～7.0cmの範囲がもっとも多い。これらは前2者とは異なり火を受けた痕跡が多く、燈明皿としての性格をよく反映している。総数264点中209点について調べた結果、燈芯の当る口縁部に1～2カ所黒く焼けているのは

第8表 土壙78出土素焼土器一覧表

種類	数量	完形	一部欠	口縁部破片	計	%
コオロケ		23	1	13	37	12.2
コオジュウ		2	0	0	2	0.7
オオジュウ		42	14	208	264	87.1
計		67	15	221	303	100.0

第9表 素焼土器計測値一覧表(単位cm)

種 類	径			高さ	種 類	径			高さ
	最大	最小	平均			最大	最小	平均	
コオロケ	5.5	5.1	5.3	1.3	オオジュウ	10.5	10.4	10.5	2.0
	5.5	5.1	5.3	1.3		10.5	10.4	10.5	2.1
	5.1	4.9	5.0	1.2		10.6	10.3	10.5	1.9
	5.5	5.2	5.4	1.2		10.5	10.3	10.4	1.9
	5.3	5.2	5.3	1.1		10.4	10.2	10.3	2.0
	5.7	5.4	5.6	1.1		10.3	10.2	10.3	2.2
	5.7	5.4	5.6	1.2		10.4	10.1	10.3	1.9
	5.5	5.3	5.4	1.3		10.3	10.1	10.2	1.9
	5.5	5.2	5.4	1.5		10.2	10.0	10.1	2.0
	5.2	4.7	5.0	1.1		10.4	10.1	10.3	2.1
	5.5	5.2	5.4	1.4		10.7	10.3	10.5	2.0
	5.6	5.4	5.5	1.4		10.8	10.6	10.7	2.0
	5.6	5.2	5.4	1.4		10.5	10.2	10.4	2.1
	5.8	5.1	5.5	0.7		10.0	9.8	9.9	1.7
	5.8	5.4	5.6	1.3		10.6	10.2	10.4	1.9
	5.5	5.2	5.4	1.3		10.7	10.5	10.6	2.2
	5.3	5.1	5.2	1.2		10.8	10.6	10.7	2.0
	5.3	5.0	5.2	1.1		10.4			2.0
	5.4	5.1	5.3	1.3		10.3			1.7
	5.3	4.8	5.1	1.2		10.6			2.0
5.2	5.0	5.1	1.2	10.7			1.9		
5.8	5.4	5.6	1.1	10.7			1.9		
5.6	5.3	5.5	1.3	10.4			2.0		
平均	5.5	5.2	5.4	1.2	10.7			2.3	
コオジュウ	8.8	8.4	8.6	1.6	10.7			2.0	
	8.4	8.3	8.4	1.7	10.7			1.8	
平均	8.6	8.4	8.5	1.7	10.4			2.0	
					10.4			1.9	
					9.9			1.9	
					10.5			2.2	
					平均	10.5	10.3	10.4	2.0

12例(5.7%)、全面に黒くなった例は89点(42.6%)、そしてまったく焼けた痕跡のみられないのは108点(51.7%)である。これらは2枚重ねて用いるのであり、焼けてないものがあったとしても別に問題はない。

木野地区の榎木さん達の御教示によれば、コオロケは正月の雑煮のお供え用、コオジュウはお墓参りの時の供え用、そしてオオジュウは燈明皿であり、その形態と用途を混同することは忌み嫌われていたという。したがって例外的に混入しているコオジュウを除けば、ほとんどがコオロケとオオジュウとであるから、これらは取りかたづけられた正月用の品々とみることができる。したがって伴出した自然遺物もまた正月料理の残滓ということができるのである。

なお木野地区(幡枝とするのは正確でない)の素焼土器作りについては、別途報告するつもりである。ここでは名称の背景にある大きさについてのみ整理しておく。すなわちコオロケは

径2寸弱, コオジュウは3寸弱, そしてオオジュウは3寸5分であり, かつこれのみ内側に沈線をもっている。

これらの流通範囲は, 洛北から南は伏見大社・石清水八幡宮までである。他地域では, 大阪城付近出土例は口径は同じでも内側の沈線の径が小さく, その分高さが高くなる等の地域差がある。また三河の岡崎城の同時期の燈明皿は糸切皿であり, これらの生産と流通の単位は一国単位であつたらしい。また断面形態の差違は油の性質との深い関係が想定され, 今後研究を深める必要がある。

4. 自然遺物

本土域より検出された自然遺物は, 第10表に示すように, 貝類・魚骨および鳥骨の17種以上である。

貝類5種の数量は第11表に示すとおりである。セタシジミが圧倒的に多く約8割を占めている。食生活の復元の上でも, セタシジミと他の4種とは区別される。すなわちセタシジミは味噌汁の具に用いられ, 他は刺身や焼物として食膳にのぼつたとみなされる。また生態的にも両者には明瞭な差異がみられる。セタシジミは琵琶湖水系個有の淡水産貝類であるが, 他はいずれも鹹水産貝類である。丹後や若狭のものが直接ないし錦小路等の小売の經由で購入されたものであろう。これを示すかのように, 鹹水産貝類は大型品が多く, 市場価値の高いものが多い。しかし化石化が不十分のため, 周辺部の欠損が著しく, 完形品が少ない。アカガイでもっとも大きいものは長さ10.1cm, 巾0.8cmに達し, ハマグリでは長さ7.8cm, 巾6.3cmに達する(図版第42上)。サザエは殻・蓋とも同数出土しており, 殻には火を受けた痕跡が著しい。壺焼として食膳にのぼつたとみなされる。アワビ・アカガイは刺身等に, ハマグリは塩焼の他吸物にもされたであろうが, いずれも正月料理にふさわしいものばかりである。

魚骨は10種以上が検出されたが, 種名の査定ができたのは10種のみである。不明とされたものは椎高数mmの小型脊椎骨若干であり, さらに精査の上再報告を期したい。

第10表 土域78出土自然遺物種名一覧表

I 無脊椎動物門	A. 腹足綱	II 脊椎動物門	4. スズキ
	1. メカイアワビ		5. ブリ
	2. サザエ		6. マダイ
	B. 斧足綱		7. ボラ
	1. アカガイ		8. カマス
	2. セタシジミ		9. サバ
3. ハマグリ	10. ヒラメ		
II 脊椎動物門	A. 魚綱	11. 不明若干	B. 鳥綱
	1. マイワシ	1. マガン	
	2. フナ	2. マガモ	
	3. コイ		

10種のうち各部位がよく残っているのはマダイである。脊椎骨の他に頭骨を構成する部分骨がよく残っており, しかもこれらには出刃包丁による切截痕がきわめて顕著である。図版第42下—1は, 上後頭骨と前額骨の癒着部位で, 上方と前方から切られている。同2は前額骨の中央部分で, 両側面を切られている。同3も同じく前額骨であるが, 左側面を残し切られている。同4は右主前額骨で, 水平方向に切られている。図版43—1は右口蓋骨で, 同様にほぼ

第11表 土壙78出土貝類数量表

種名	左殻	右殻	最小 個体数	%
メカイアワビ			3	1.3
サザエ			8	3.3
アカガイ	14	12	14	5.8
セタシジミ	169	190	190	79.2
ハマグリ	19	25	25	10.4
計	202	227	240	100.0

水平方向に切られている。同2は左下顎歯骨で、先端を垂直方向に切られている。これらのうち特に前顎骨は厚さが切断面で9mm、後頭骨は高さが切断面で24mm、厚さが6mmであり、鋭い切れ味からみて出刃包丁によるものであることは間違いないであろう。マダイは縁起物として欠かせない魚であり、おそらく刺身または塩焼き等として供せられた後、出刃で3枚におろして荒炊きにされたことを、上記の切截痕を示唆している

とみなすことができる。特に塩焼きには焼塩を必要とし、ペリー来航時の瓦版にはこれを表わした絵がみられる。身の厚いタイを食べ進むと塩味が減少する。その時に焼塩をかけて食べたのだということである(小谷方明先生談)。

マダイは、他に上後頭骨1、主前顎骨左4(同3)・右2(同4・5)、主上顎骨左2・右1、下顎歯骨左4・右1、角骨左1・右1、舌顎骨右1(同6)、主鰓蓋骨左4(同7)、擬鎖骨右1(同8)および鱗等がみられ、少なくとも4匹は食膳に供せられたことがわかる。これに対し脊椎骨(同9)は10点のみで少なく、やや奇異である。

他の魚骨については次のとおりである。

- マイワシ 脊椎骨1
- フナ 主鰓蓋骨右1(同10)
- コイ 脊椎骨1
- スズキ 主前顎骨左1(同11)、主上顎骨左1・右1
- ブリ 脊椎骨7(同12)
- ボラ 主鰓蓋骨左1(同13)
- カマス 脊椎骨9(同14)
- サバ 脊椎骨6(同15)
- ヒラメ 前上顎骨左2・右1、下顎歯骨左3・右2

マダイはじめ海の魚が8種みられ、このなかにまじって淡水魚のコイ・フナの2種がみられ興味深い。海産魚は丹後や若狭から、淡水魚は琵琶湖や巨椋池から間接的に供給されたものであろう。

鳥骨は、マガンとマガモの2種がみられる。マガンは上腕骨右1(同16)・尺骨右(同17)で、桡骨右1(同18)・右中手骨1(同19)で、後2者は同一個体に属す。マガモは上腕骨左1(同20)、中手骨左1・右1(同21)である。これらは冬期の渡り鳥であり、コイ・フナと同様に、琵琶湖あるいは巨椋池等で捕獲されたものであろう。特にマガモについては、琵琶湖の伝統的漁法であるモチナワを想像させる。モチナワでとられたカモ類は、特に歳暮の贈答品として高値で取引きされていたという。

## 5. おわりに

以上若干の推測を加えつつ、土壙78の出土遺物を通して近世の食生活の一断面を復原しようとしてきた。十分に成功したとは言えないが、焼塩壺等の編年基準資料を一層整備した上で、近世京都の庶民生活史を考古学的にもアプローチしていきたいと思う。

なお魚骨等については国立科学博物館の上野輝弥先生、素焼土器等については木野地区の榎木まつさん、および陶芸家の宇野三吾先生の御教示を仰いだ。銘記して謝意を表す次第である。

## 第6節 その他の主要遺物（第12表、第45～47図、図版第44～46参照）

前節までに紹介し得なかった遺物のうちから、主要なものに限定して報告することにする。

### 1. 古銭(第12表、第45図)

今回の調査で68点の古銭が出土した(第12表)。唐の開元通宝が1点、北宋銭が16種39点、明代の永楽通宝が4点、李朝朝鮮の朝鮮通宝が1点、江戸時代の寛永通宝が9点、不明のものが11点である。これらの他に、和同開珎に始まる皇朝十二銭の最後のものである乾元大宝が、溝2よりの1点(第45図1)を含み3点出土している(同2)。これは、天徳2年(958)から応和3年(963)ごろにかけて鑄造されたものであるが、かなり粗悪な銭貨であった。

### 2. 石帯(第46図1～3)

3点の石帯が出土した。第46図3は5I区第7層から出土したもので、鉞尾であろう。右側上部約3分の1を欠損するが、長さ5.8cm、幅4.5cm、厚さ0.8cmを測る。石材は粘板岩を用いており、青灰色を呈する。とくに表・側面はていねいに研磨されている。また、裏面には1対の小孔が穿たれている。欠損部分には、同様の小孔が2対穿たれていたものと思われる。

同1は、巡方の完形品である。長さ4.3cm、幅3.9cm、厚さ0.7cmを測る。裏面には4対の小孔が穿たれている。火を受けているためにかなり状態が悪い。石材はメノウであろうか。西北地区攪乱層より出土。

同2は、丸柄で溝4(3A区)より出土した。左側約5分の1を欠損する。長さ3.1cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmである。裏面には2対の小孔が認められるほか、欠損部分に小孔の一部が残存しており、完形時には3対の小孔が穿ってあったものと思われる。石材はメノウで、灰白色を呈している。2と同様に火を受けている。

### 3. 瀬戸内型土錘(第46図4)

溝2より出土。瀬戸内海沿岸に濃密に分布する漁網錘である。一端を欠き現存長4.5cm。全長はおそらく6cm前後であろう。中央部は1.0×1.2cmでやや楕円形を呈し、端部は1.0×1.3cmでやや平らになり、別方向に膨らみ、断面はやや長形状を呈す。この平坦面に直交して径4mmの孔が穿たれている。胎土には細かい雲母を含み、褐色を呈す。

瀬戸内型土錘は主として瀬戸内海沿岸の海岸部に限られ、内水面域から出土することはごく稀れである。その上平安京の里内裏内の出土であるから、ここで使用されたとは考えられない。



第12表 出土古銭一覧表

遺物番号	種類	遺存状態	層位	挿図番号
溝2-E2	乾元大宝	完形	埋土	第45図1
3I-E2	同上	一部欠	第6層最下部	2
3I-E3	同上	完形	同上	—
暗渠1-E14	開元通宝	一部欠	埋土	3
4J-E6	淳化元宝	同上	第4層	4
10B-E1	景德元宝	完形	第1層最下部	5
暗渠1-E7	祥符元宝	同上	埋土	6
8J-E1	同上	同上	第5層	—
土城95-E1	祥符通宝	同上	埋土	7
6E-E1	天禧通宝	同上	第4層	8
土城11-E1	天聖元宝	同上	埋土	9
8E-E3	同上	同上	第3層	10
4J-E3	同上	同上	第4層	—
10B-E3	景祐元宝	同上	石垣1内側埋土	11
土城110-E1	皇宋通宝	同上	埋土	12
6F-E5	同上	同上	第5層	13
4J-E4	同上	同上	第4層	—
10C-E5	同上	同上	第3層	14
8D-E3	同上	1/2片	同上	—
8E-E1	同上	同上	同上	—
9E-E1	同上	2/3片	第4層	15
暗渠1-E10	熙寧元宝	完形	埋土	—
暗渠1-E12	同上	同上	同上	—
9B-E1	同上	同上	石垣1内側埋土	16
8E-E2	同上	同上	第6層	—
6F-E2	同上	同上	第5層	17
7F-E5	同上	同上	第4層	18
9I-E2	同上	2/3片	第4層	19
暗渠1-E2	同上	完形	埋土	—
暗渠1-E11	元豊通宝	同上	同上	—
7F-E1	同上	同上	第3層	20
10B-E5	同上	1/2片	石垣1,2内側埋土	—
10C-E3	元祐通宝	完形	第3層	21
7D-E1	同上	2/3片	同上	—
7F-E3	同上	完形	第4層	22
東南-E4	同上	同上	第1層最下部	—
暗渠1-E1	紹聖元宝	同上	埋土	23
暗渠2-E1	同上	同上	同上	—
7F-E4	同上	同上	第4層	24
8K-E2	同上	2/3片	第1層最下部	—
土城93-E1	聖宋元宝	完形	埋土	25
8E-E4	大觀通宝	同上	第6層	26
4J-E1	政和通宝	同上	第4層	27
暗渠1-E13	永樂通宝	同上	埋土	28
9F-E2	同上	同上	第6層	29
4I-E1	同上	同上	第4層最下部	30
8D-E1	同上	一部欠	第3層	—

遺物番号	種類	遺存状態	層位	挿図番号
暗渠1-E6	朝鮮通宝	完形	埋土	31
土城98-E1	寛永通宝	同上	同上	32
土城134-E2	同上	同上	同上	33
8B-E2	同上	一部欠	第3層	—
9C-E1	同上	完形	第1層最下部	—
9I-E1	同上	同上	第4層上部	—
10L-E2	同上	同上	第1層最下部	—
西北-E2	同上	同上	第1層	34
西南-E1	同上	同上	同上	—
東南-E1	同上	同上	第1層最下部	—
暗渠1-E4	不明	同上	埋土	—
土城59-E1	同上	2/3片	同上	—
土城93-E2	同上	一部欠	同上	—
土城161-E1	同上	完形	同上	—
8D-E2	同上	同上	第5層	—
10D-E2	同上	数枚のかたまり	同上	—
7F-E6	同上	1/3片	第4層	—
3H-E1	同上	同上	第6層最下部	—
7H-E1	同上	完形	第4層上部	—
10J-E1	同上	同上	第5層	—
東南-E3	同上	同上	第1層最下部	—

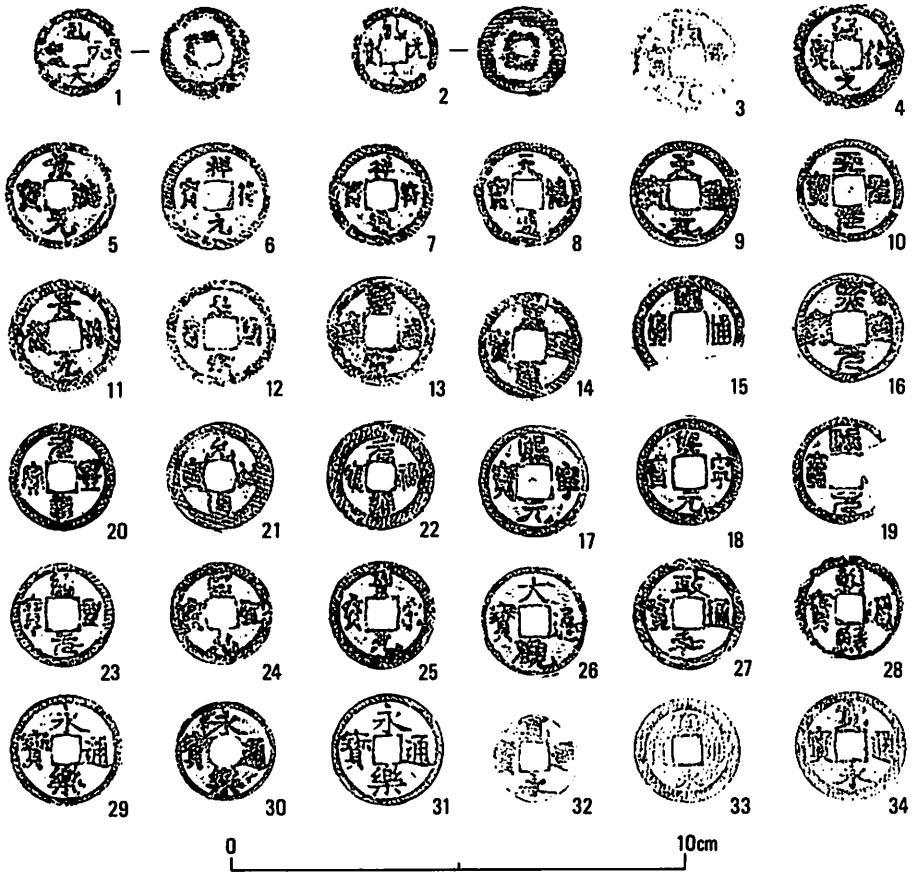
何らかの事情で瀬戸内海沿岸からもたらされたものであろう。溝2からは播磨系の軒平瓦が1点出土しており注目される。

溝2の年代は、瓦から12世紀末～13世紀初頭とされている。瀬戸内型土錘の出現は弥生時代後期であるが、その下限については必ずしも明瞭でないため、本資料は分布上ばかりでなく編年上も注目されるのである。

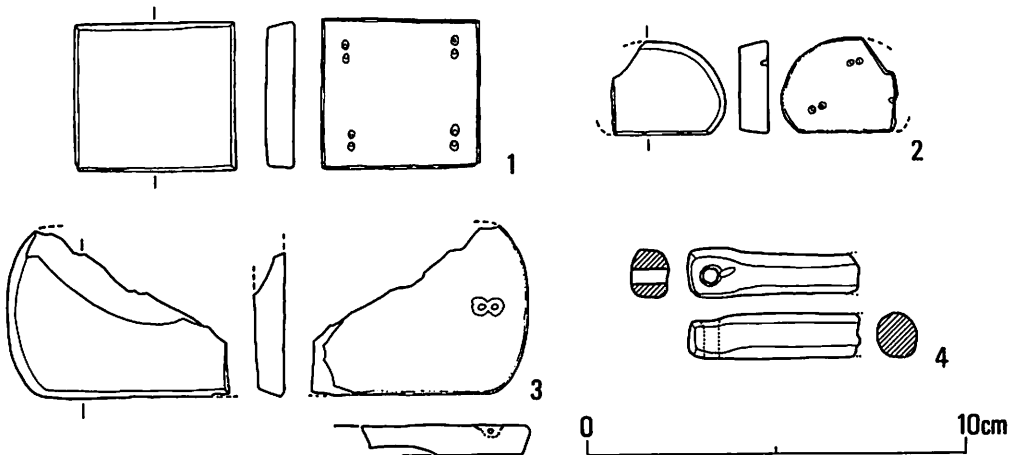
#### 4. 輪宝（図版第44上）

溝2（6I区）の最上層から輪宝が出土した。これは銅製で、長径18.5cm、厚さ3.5mmを測る。轆とよばれる中心部は欠損しているが、他の資料からおそらく蓮華文を配していたものと思われる。また、轆よばれる外輪部には珠文が一周している。轆と轆を結ぶ8本の肘木（輻）の延長上に鋒とよばれる突起がある。これは、周縁部が八角形を呈し、独立した鋒をもたない八角輪宝に対して八鋒輪宝とよばれている<sup>1)</sup>。なお、裏面にはまったく文様は見あたらない。時期については、輪宝そのものからは判断できないが、同時に出土した資料は平安後期から鎌倉時代のものである。

京都市内の発掘調査において輪宝が出土することは珍しく、仁和寺金堂跡出土の例<sup>2)</sup>を除くと最初のものであろう。また、奈良県興福寺菩提院大御堂から輪宝が数点出土している<sup>3)</sup>。これらは、地鎮・鎮壇具として埋納されていたと考えられており、今回の例も同様に使われたものかもしれない。



第45図 古銭拓影 (番号は第12表に一致)



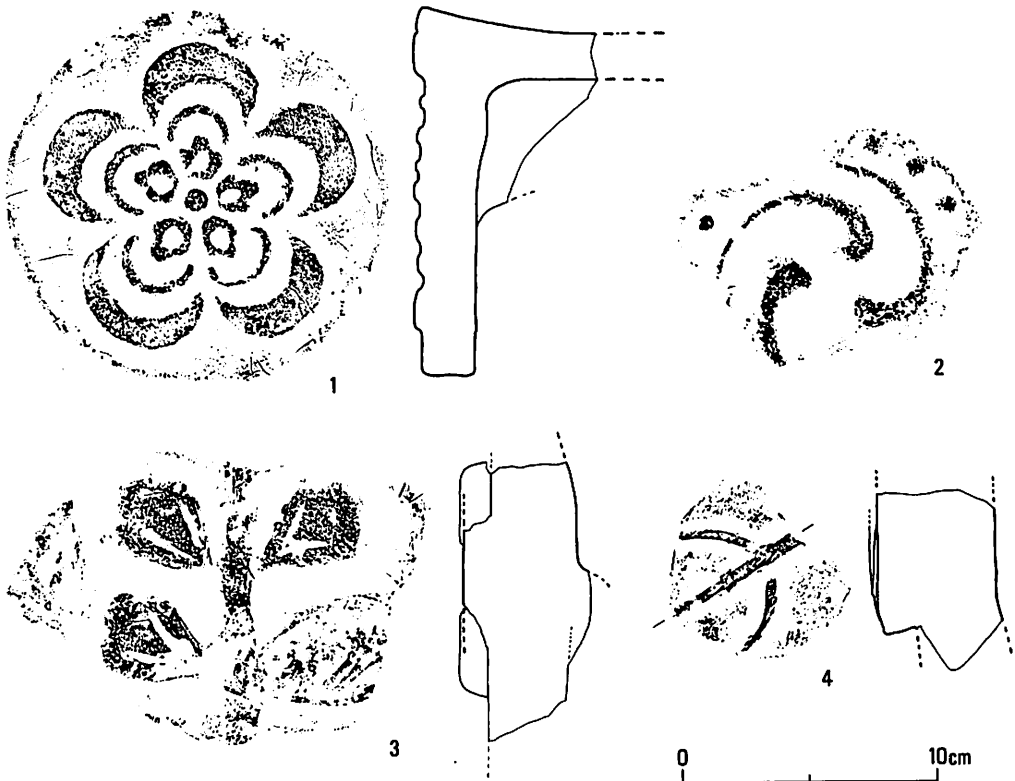
第46図 石帯・瀬戸内型土錘実測図

5. 金箔瓦（第47図）

第47図1は、5葉の木瓜文をもつ軒丸瓦で、10L区第1層最下部より出土した。暗渠出土の例(第35図1)に比べると、外縁がなく文様も大きい。また、中央の「×」印がなく、瓦当面はていねいに調整される。瓦当上面から丸瓦部凸面にかけてはタテ方向のナデ、瓦当周縁はていねいなヨコナデが施されている。瓦当裏面はナデ調整であるが、下半の外周には強いナデ痕が明瞭に認められる。胎土は若干の砂粒を含むが良好で、焼成も硬質である。表面は黒灰色、内面は灰色を呈す。金箔は残存状態が悪く、その範囲は不明であるが、金箔を貼付するための漆の残存状態から、おそらく文様にのみ施されたものと思われる。この金箔瓦は、その木瓜文から織田信長の手による二条城関係のものであろう。

同2は、左巻三巴文の軒丸瓦で7F区第3層から出土した。外縁と下方約3分の1を欠くが、一部に珠文が認められる。胎土には砂粒、径2～3mmの小石を含むが、焼成は良好である。外面は黒灰色、内面は灰白色を呈す。金箔はわずかに残る程度であるが、ほぼ全面に施してあったものと思われる。

同3・4は、いずれも桐の文様を配した鬼瓦の破片である。3は桐上部、3本の花茎の中央



第47図 金箔瓦拓影・実測図

## 102 第6節 その他の主要遺物

茎の一部で、棒状の茎の左右に花を配している。花は花卉を表わすV字状の刻みをもつ。4は桐左下部の葉の先端部の破片である。3の金箔がV字状の刻みの中に一部残存するのに対して、4ではほぼ全面に認められる。両者とも裏面にはタテ方向のナデで調整される。また、3の裏面には鬼瓦裏面の把手の一部が残る。胎土は、どちらも砂粒を含むが良好で、焼成も硬質である。色調はどちらも外面が黒灰色、内面が灰白色であるが、4の方が全体に黒っぽい感がある。3は9F区第4層中より、4は6E区第3層中より出土した。どちらも、豊臣秀吉の聚楽第に関係するものと思われる。

### 6. 石造遺物（図版第44下・45）

安土桃山時代の遺物として、金箔瓦とともに若干の石造遺物が出土している。仏像や石塔の突出部分を打ち欠く等して石材として転用されたものであり、本遺跡の南方約500mに検出されたところの二条城に関係のあるものである。二条城は織田信長が足利義昭のために築いたもので、烏丸線関係の発掘で堀跡からは、打ち欠かれた仏像が多数検出されたが、本遺跡の石造遺物もこれらと同一視されるものである。

図版第44下は石仏である。高さはそれぞれ70.2cm, 59.8cmを測る。これらの他に上半身を欠く石仏も1点出土している。いずれも東北地区攪乱層出土である。

図版第45-1・2は五輪塔の火輪である。1は一辺27.5cm, 高さ18.0cmを測り、側面に梵字が認められる。2は一辺23.0cm, 高さ13.4cmである。どちらも西南地区攪乱層より出土した。なお今回の調査ではこれらの他に数点の火輪が出土している。

同3～6は、宝篋印塔の一部と思われる。3は笠で、最上部の相輪の下に置くものである。一辺80.2cmの方形で、高さは50.6cmを測る。四隅の隅飾は打ち欠かれている。東北地区攪乱層出土。4は、笠の下に位置する塔身である。側面に梵字が認められるが、輪郭は作っていない。一辺45.5cm, 高さ33.0cm。東北地区攪乱層から出土した。5も東北地区攪乱層より出土した基礎である。この下に反花座を置く場合も多いが、基本的にはこれが塔の最下部にあたる。一辺66.8cm, 高さ48.5cmを測る。上端の段型は2段。側面には輪郭をとり、さらに内側に格狭間を設け、三茎蓮華文を刻んでいる。ここで特に注目されるのは、三茎蓮華文が刻まれていることである。これは、いわゆる近江式の石塔基礎側面の装飾法の一つであり、いくつかの文様のパターンが知られている。この例は、中央の茎に蕾を、左右の茎には下向きの葉を配している。そして、この文様が鎌倉時代から室町時代初めにかけて盛行したことから、この基礎もほぼ同様の時期のものとして判断される。6は反花座である。一辺43.0cm, 高さ13.0cmを測る。西南地区攪乱層出土。これらの他に、側面に梵字のある格狭間を設けた基礎や、宝塔の軸部と思われるものなどが出土している。

### 7. 組紐用錘具（図版第46上）

江戸～明治時代の遺物で、中央のくびれた糸巻状の土錘であり、組紐を編むために用いられる錘具である。長さ4.2cm, 太さ2.3cm, 重量34gの小型品から、長さ6.3cm, 太さ5.2cm, 重量126gの大型品までバラエティーがある。この上に和紙を貼って使用する。

組紐は正倉院御物にすでにみられるが、京都市中において家内工業的に盛んに作られるようになるのは、江戸時代以降のことであることが、これらの錘具から推定される。サイズ・重量のバラエティーは製品のバラエティーを示唆するものであろう。

現在ではツバキ製糸巻の芯に鉛をとかしたものが使われているが、この交代は明治前期であるらしいが、不明確である。

#### 8. 泥メンコ（図版第47下）

江戸中期から出現する子供の玩具であり、多種多様の文様をもつ。

この他伏見人形等近世以降の町人生活を如実に示す資料も少なくない。編年の整備の上に新たな展開の予測される近世考古学の興味深い新研究分野である。

#### 註

- 1) 石田茂作『仏具編』(『仏教考古学論攻』第5巻, 東京, 昭和52年)。
- 2) 註1。および, 毎日新聞社編『考古Ⅱ』(『重要文化財』第29集, 東京, 昭和51年)。
- 3) 森郁夫『密教による地鎮・鎮壇具の埋納について』(『仏教芸術』第84号掲載, 東京, 昭和47年)。
- 4) 内膳町の調査(昭和53年, 平安会館敷地)や二条城関係の調査では, 多数の木瓜文金箔瓦が出土している。そして, この軒丸瓦に対応する軒平瓦として文様をもつ例をあげている(平良泰久他『平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要』(『埋蔵文化財発掘調査概報1980—3』所収, 京都, 昭和55年))が, 今回の調査でも金箔ではないが, 同文の例が出土している。
- 5) 川勝政太郎『日本石材工芸史』(京都, 昭和48年), 第2編第3・4。

## 第7章 むすびにかえて

本遺跡はすでに記したごとく、平安後期の土御門烏丸内裏跡であり、江戸時代の水戸藩邸跡である。禁門の変の舞台にもなった地域でもある。そして本報告書では平安後期の遺構・遺物ばかりでなく、近世の遺構・遺物についても、不十分ながら多くの頁を費やすこととした。

京都市内の発掘は、往々にして近世の層を十分に検討しない傾向がある。そして重点が平安京関係の遺構・遺物に置かれていることは否めない事実である。これはまた理由のないことではないが、日数との関係で切り捨てられる近世の遺構・遺物にも、重要性がない訳ではないのである。

東京等における近世遺跡の調査に比べると、京都における立遅れは明らかである。本遺跡の発掘に関しては、当初より角田文衛館長の諒解のもとに、こうした従来の傾向に若干でも是正を試みるつもりであった。これが本報告書作成に当って成功したとは考えないが、その試みの跡を少しでも多く盛りこみたいと考えたのである。

水戸藩邸では『大日本史』の編纂史料の書写作業が行なわれ、禁門の変により焼失する等、平安京関係とともに全国レベルで問題になることも少なくない。しかしここから出土した遺物には、もっと京の町家の生活に密着したものも少なくないのであり、今後大いに発展させたい研究分野である。すなわち、全国レベルの大テーマとは別の、京都の町というレベルでの、いわば地域研究である。こうした近世都市の考古学的研究は、また、民俗学・民具学の時代的遡及でもある。そして考古学という学問の一つの側面である物質文化史が自己完結するのである。

こうした側面とは別の、歴史学の本質にもとづいて提出されたのが角田文衛博士による『古代学』の構想であることは広く学界周知のことである。一見この構想とは矛盾するかのように見えるが、京都市内の発掘においては、現実問題として近世層の調査なしに、平安京関係遺構のみを発掘することは不可能である。こうした現実的問題に対処すべく、近世考古学を主対象とした第4研究室の設置に、角田館長は英断を下されたのであるが、筆者の転出により日を見ることはなかった。しかしこうした事情も、永い古代学協会の歴史の一コマとして大切であると考え、角田文衛博士の深い学識に敬意を表しつつ書き残すこととした。

### 謝 辞

本遺跡の発掘は約半年間という長期間にまたがり、実に多くの方々の御協力を仰ぐことになった。特に終始御指導を賜った館長角田文衛博士、および遺物整理・本報告書作成段階に御協力下さった研究部主任片岡肇助教授、および戸田建設の現場主任である中村敬三氏に対し、衷心より謝意を表す次第である。

また発掘作業の遂行に多大な御協力を仰いだ、橋本庄次氏はじめとする調査補助員・作業員の皆様に対し、深謝の意を表する次第である。

調査補助員

山下武久，大河憲二，秋庭裕，盛本勲，近藤孝夫，鈴木俊則，三宅憲明，原田雅裕，上野修一，片山淳子，神戸佳文，木村滋，藤田幸大，岩元広祐，高慶孝，甲斐泰弘，杉裕之，大西智文，植松なおみ，河田智子，袁輪淳子，岩元雅毅

資料整理，報告書作成については，上記の方々の他，下記の皆様のお世話になった。あわせて謝意を表する。

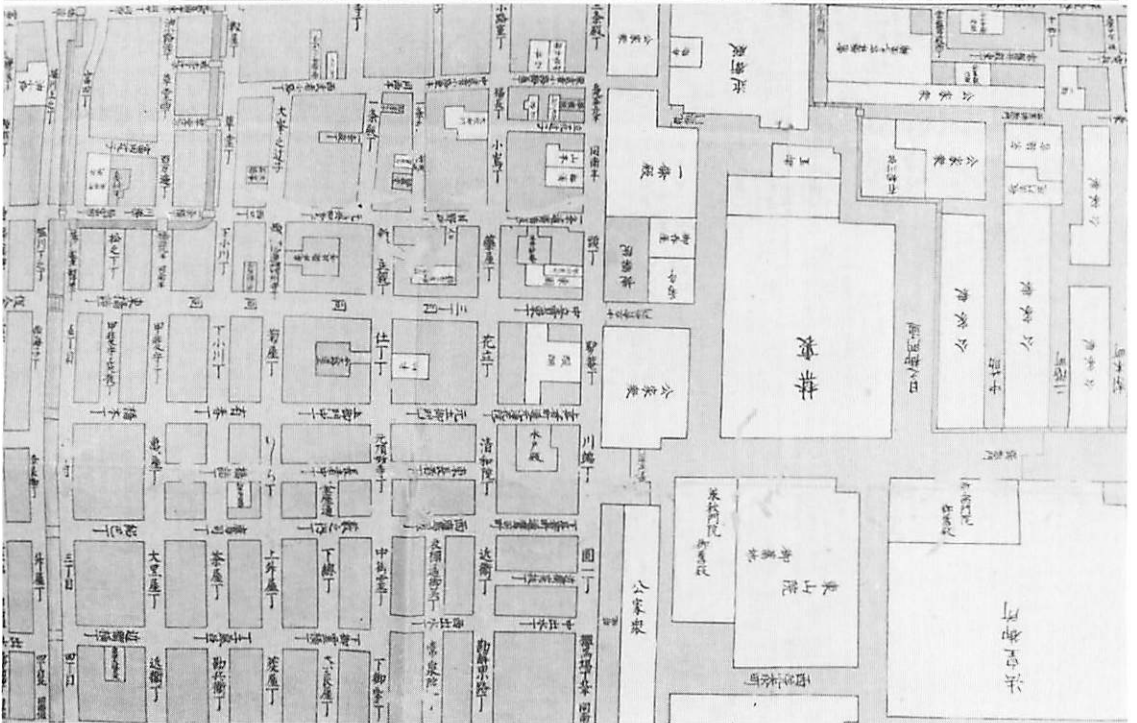
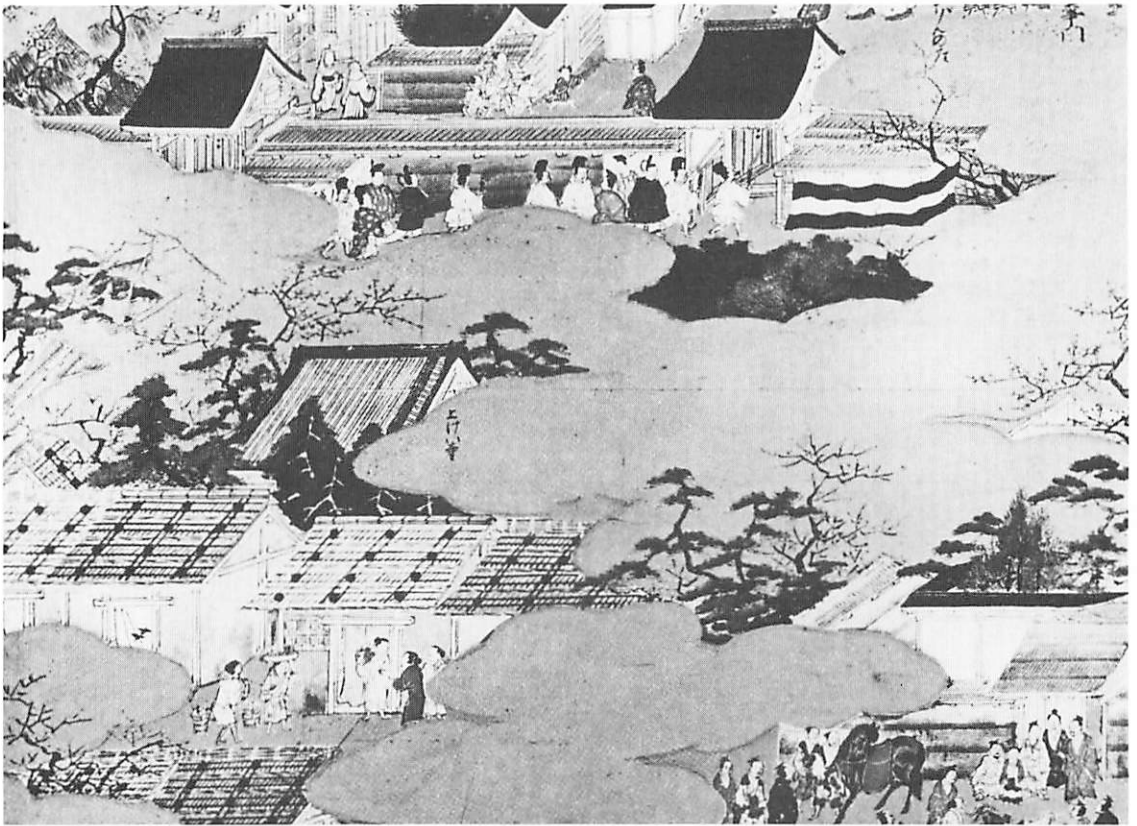
田村尚美，森はる美，田中千代栄，西村(旧姓・八木)美智子，田中聡 (敬称略)



# 版 图



上：遺跡の現況(KBS京都放送会館，東北より) 下：付近にみられる石碑

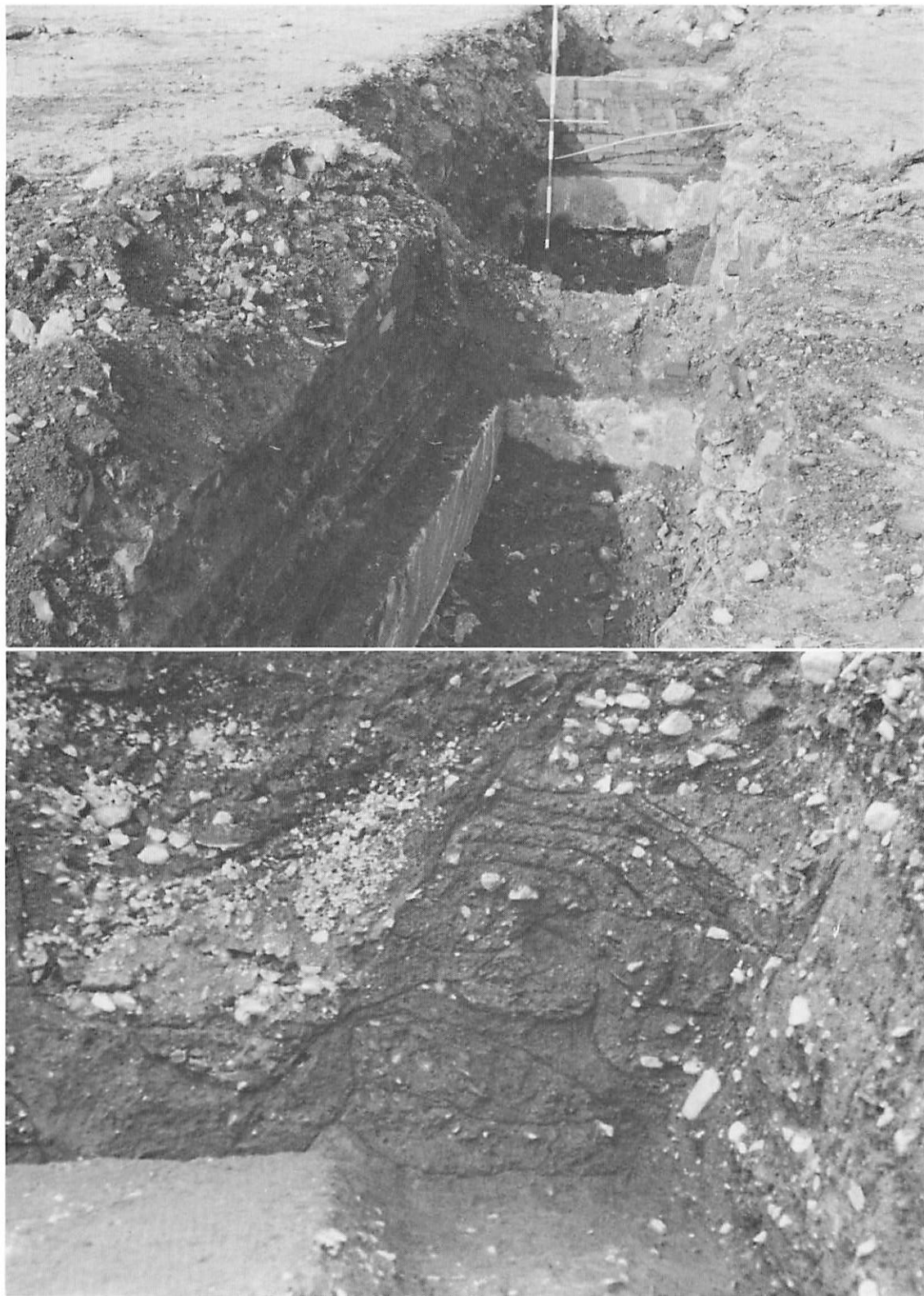


上：上杉本『洛中洛外図屏風』 下：『洛中洛外図』（享保6年頃成立，平安博物館蔵）

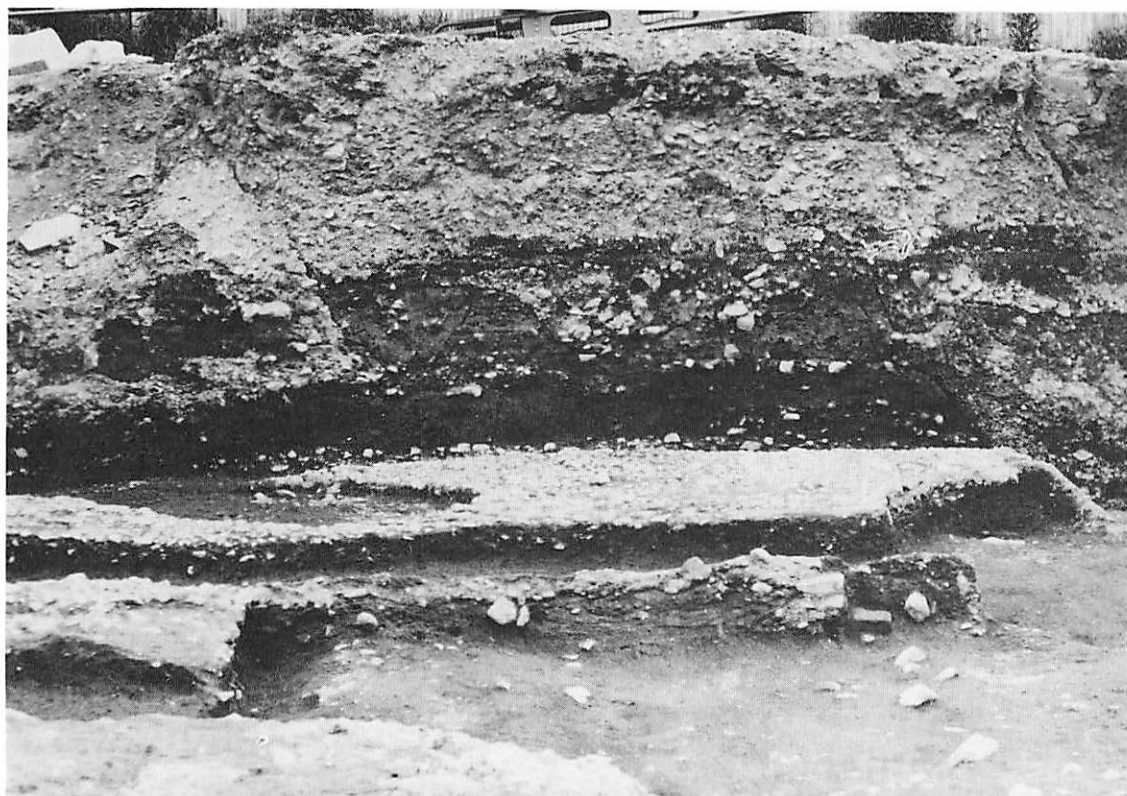


発掘前の遺跡全景(上：南より，下：西より・右上方に蛤御門)

図版第 4

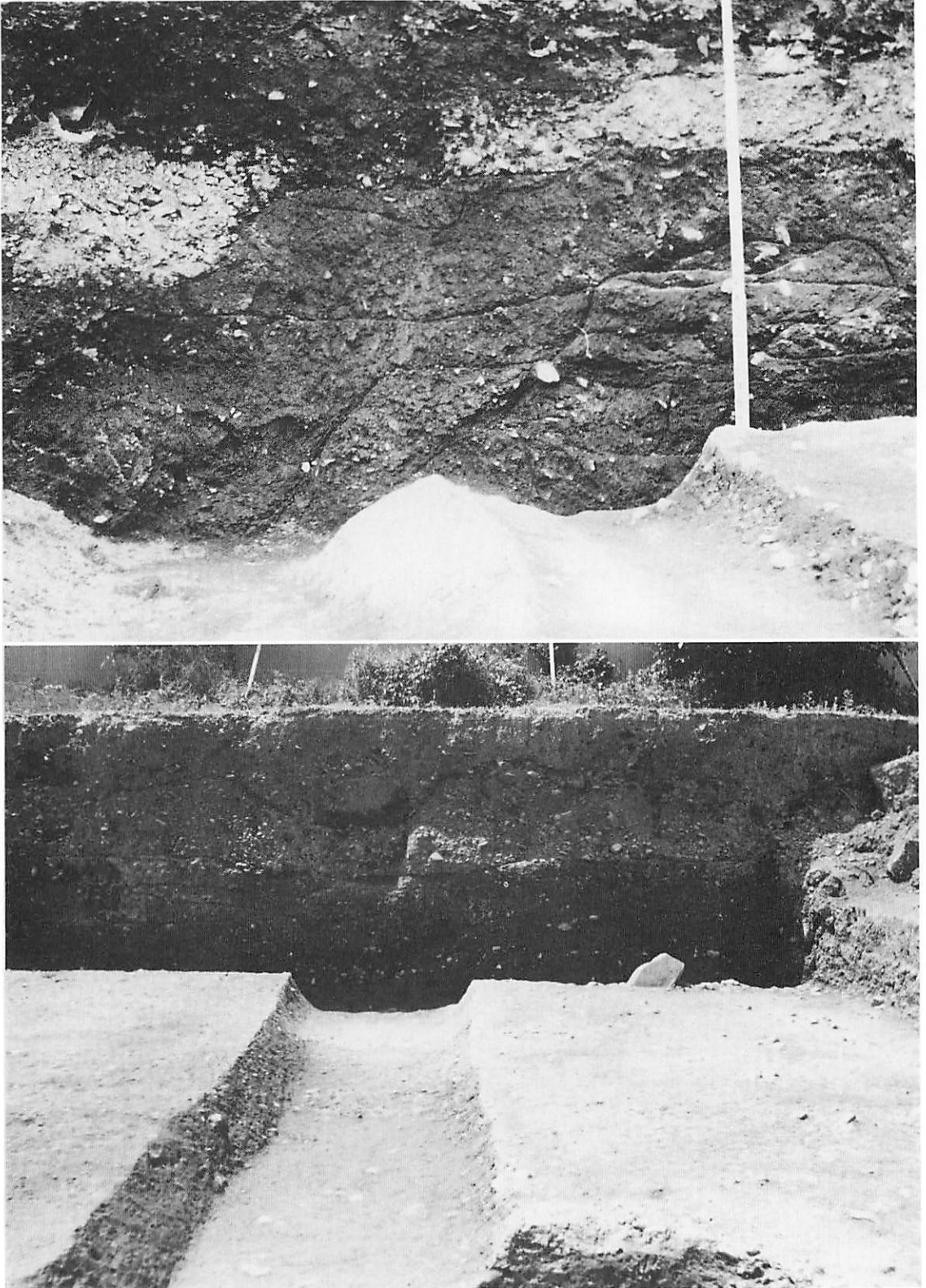


上：東トレンチ(南より) 下：西北地区西壁断面と溝4(東より)



上：東北地区北壁断面と土御門大路面(南より) 下：同西壁断面と溝 3・4(東より)

図版第 6



上：東北地区南壁断面と溝 2 (北より) 下：西南地区南壁断面と溝 8 (北より)



西南地区全景(上:西より, 下:東より)

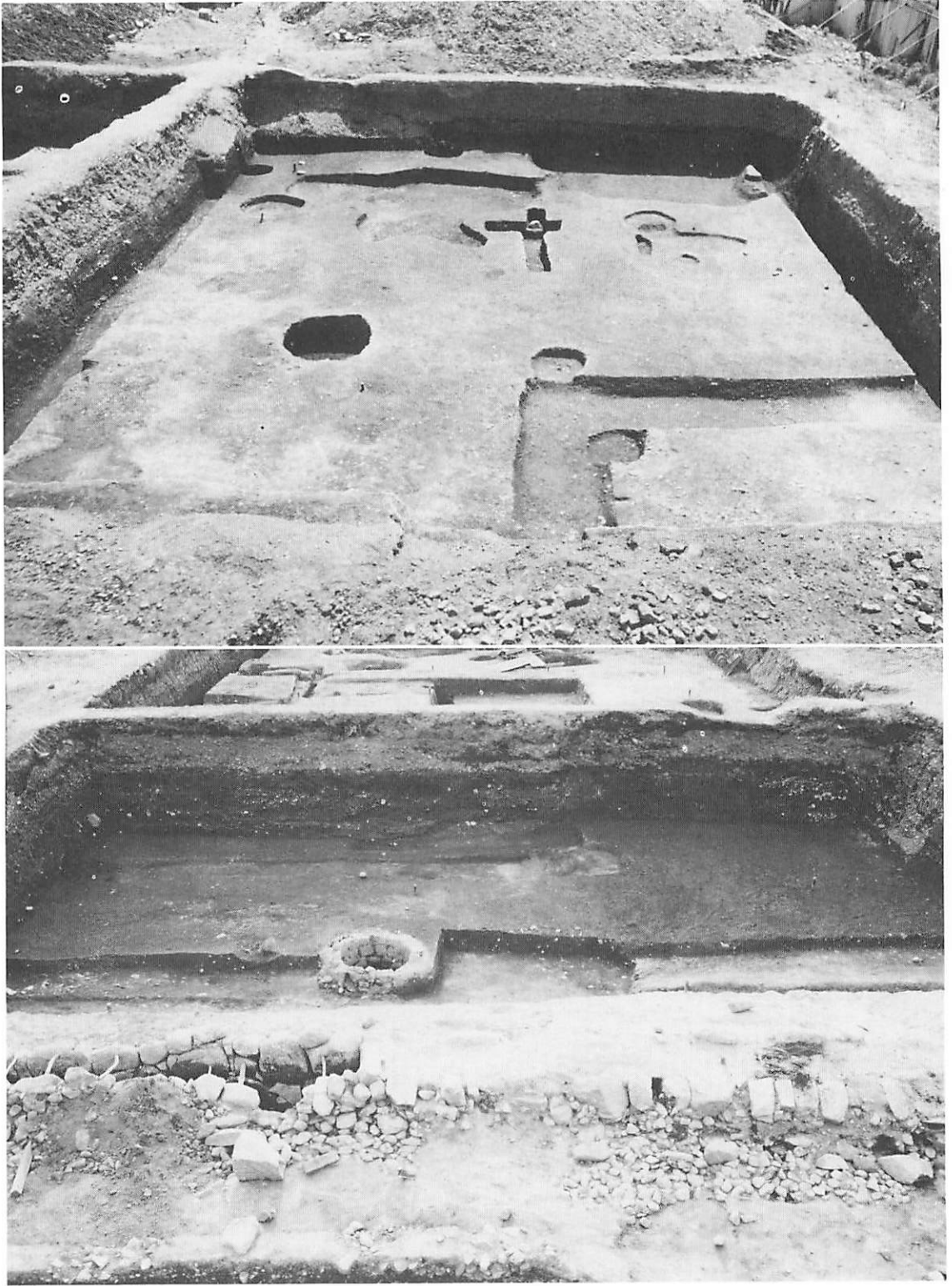




溝9(9・10J区, 9・10K区付近, 上: 東南より, 下: 西南より)



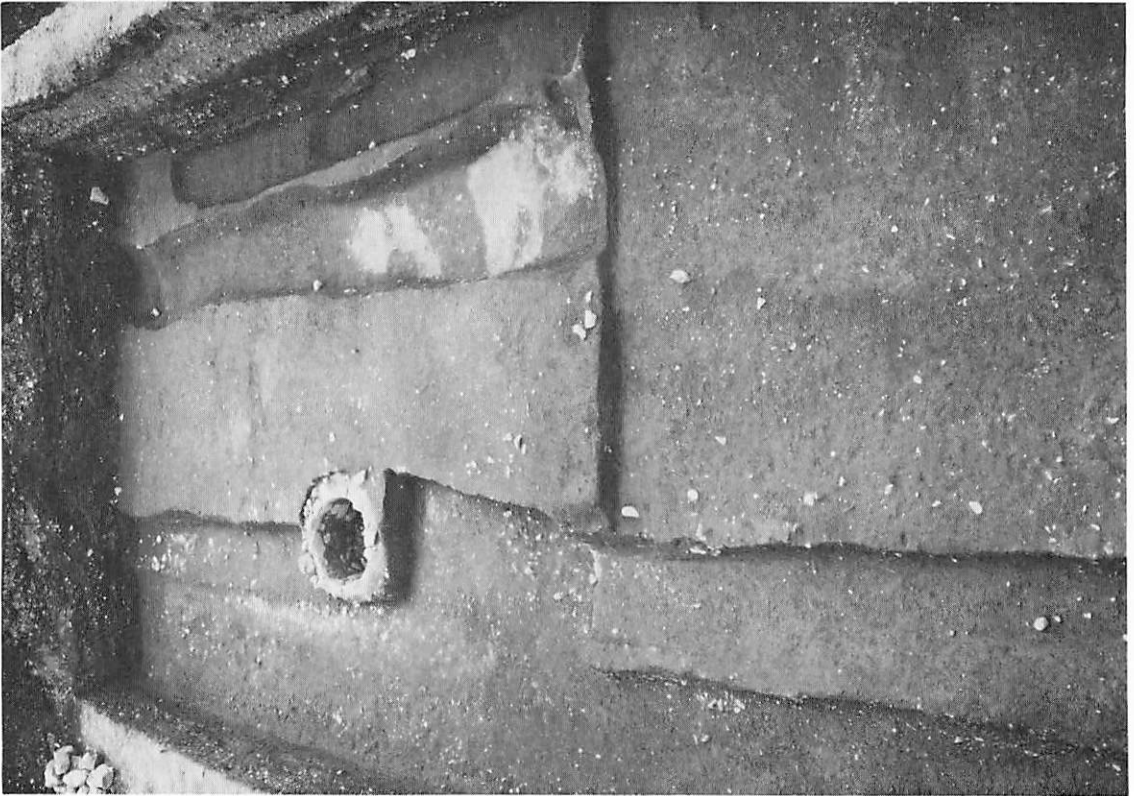
上：溝10・11(東より) 下：7・8G区の石列(西より)



上：西南地区終了状況(西より) 下：東南地区終了状況(東より)



上：東北地区終了状況(南より) 下：西北地区終了状況(西より)



左：東南地区における溝1・2（北より）  
右：東北地区における溝2～4（北より）



上：東北地区における溝2～4(南より) 下：東南地区における溝1・2(南より)



上：溝1北端(南より) 下：東南地区南壁における溝1断面(北より)



上：東北地区における溝2(北より) 下：東南地区北壁における溝2断面(南より)





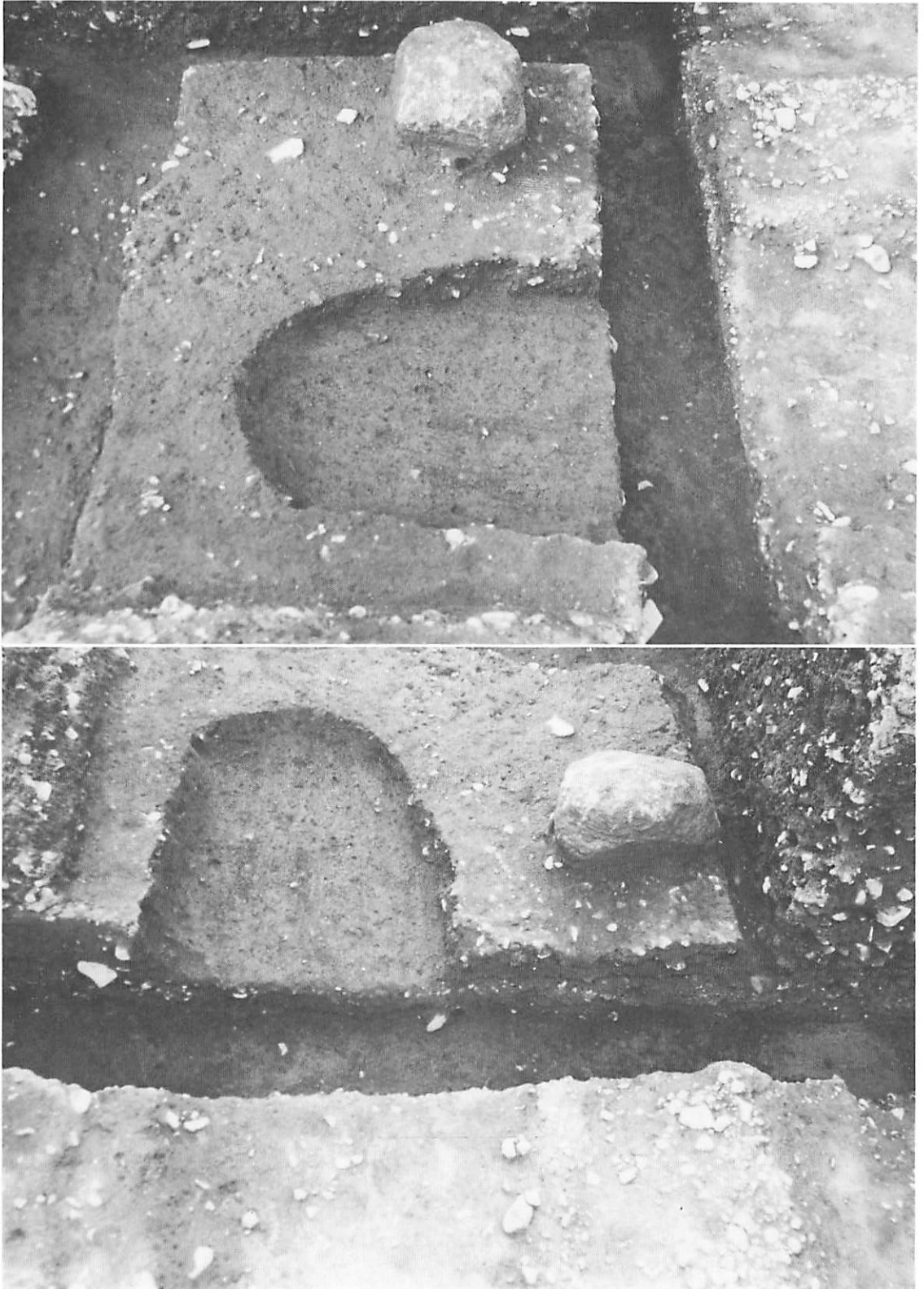
土御門大路道路面と溝 3・4 (上：東南より，下：北より)



土御門大路道路面と溝3・4(上:南より, 下:東より)



上：溝3・4(東より) 下：同断面(東より)



溝3 西部(上：南より，下：東より)



西北地区における溝4・6(上:東より, 下:西より)



西北地区における溝4 (左：東より, 右：西より)



左：溝8(南より) 右：石垣1・2 全景(北より)



石垣1(上:北より, 下:南より)





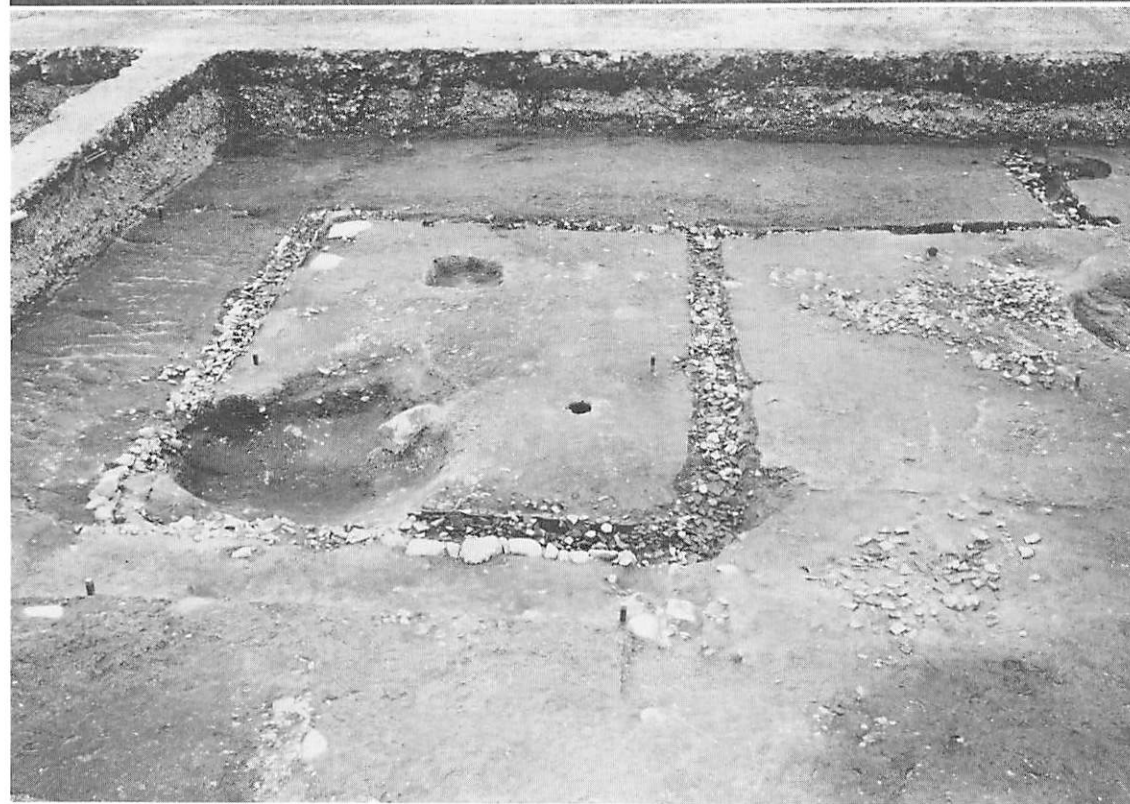
上：石垣1(東北より) 下：石垣1と2(東北より)



石垣1(上：8C区，下：6C・7C区，ともに東より)



上：石垣1に伴う礎石(9C区，西より) 下：石垣2(東より)



暗渠1(上:南より, 下:北より)



上：暗渠1（東より） 下：同主要部（南より）



上：暗渠1東溝(北より) 下：同西溝(南より)



上：暗渠1南溝(東より) 下：同西南隅(東北より)



暗渠1 東南隅(上：北西より，下：東南より)





上：暗渠1 東北隅(西南より) 下：同北西隅(東南より)



上：暗渠1北溝北側(南より) 下：同東溝西側(東より)



上：暗渠1内の礎石(西より) 下：同c-d 断面(東より)



上：暗渠 1 i-j 断面(北より) 下：同 e-f 断面(南より)



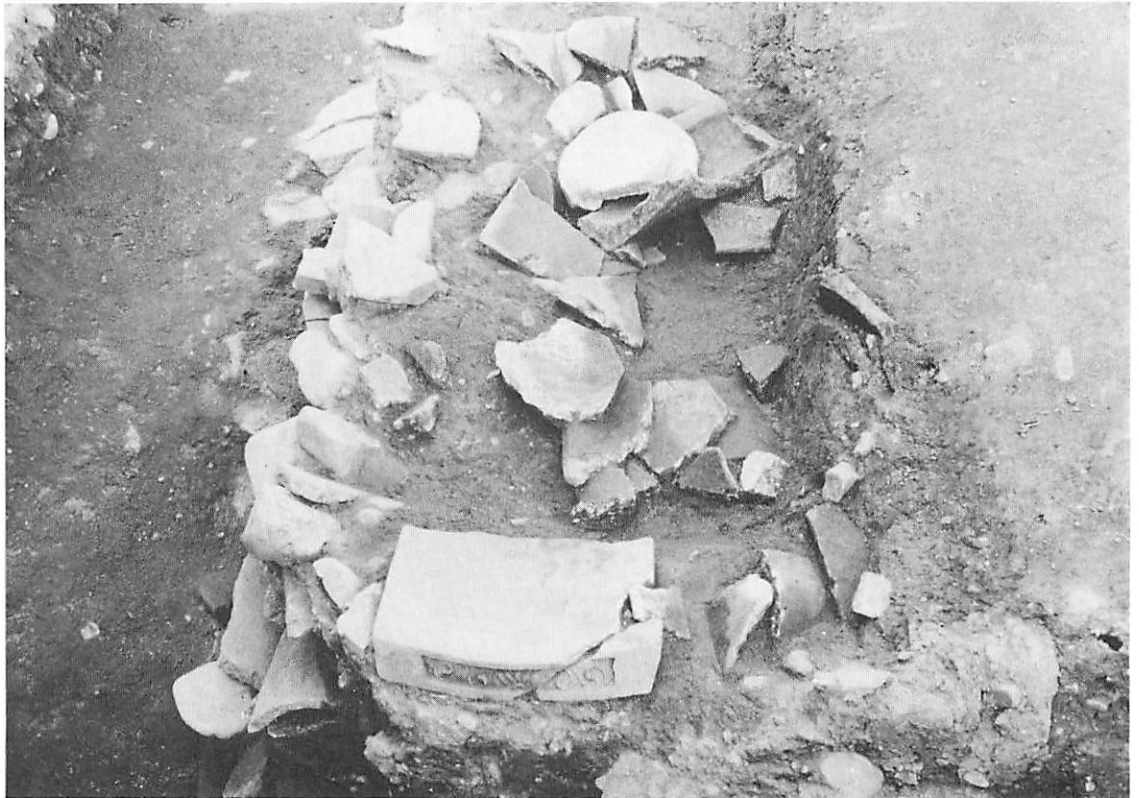
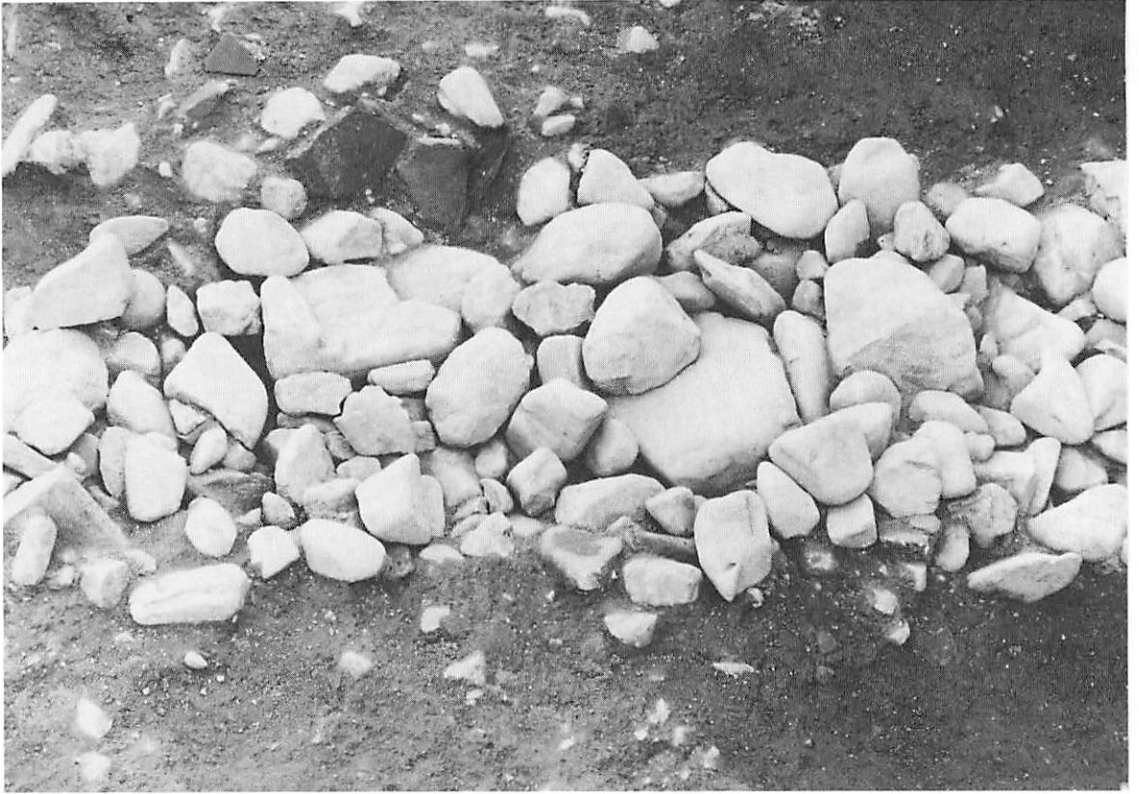
暗渠1延長溝(上：東西溝，南より，下：南北溝，東より)



暗渠2(上:北より, 下:南より)



暗渠2 東溝(上：西より，下：東より)



上：暗渠2東溝(西より) 下：同北溝(東より)

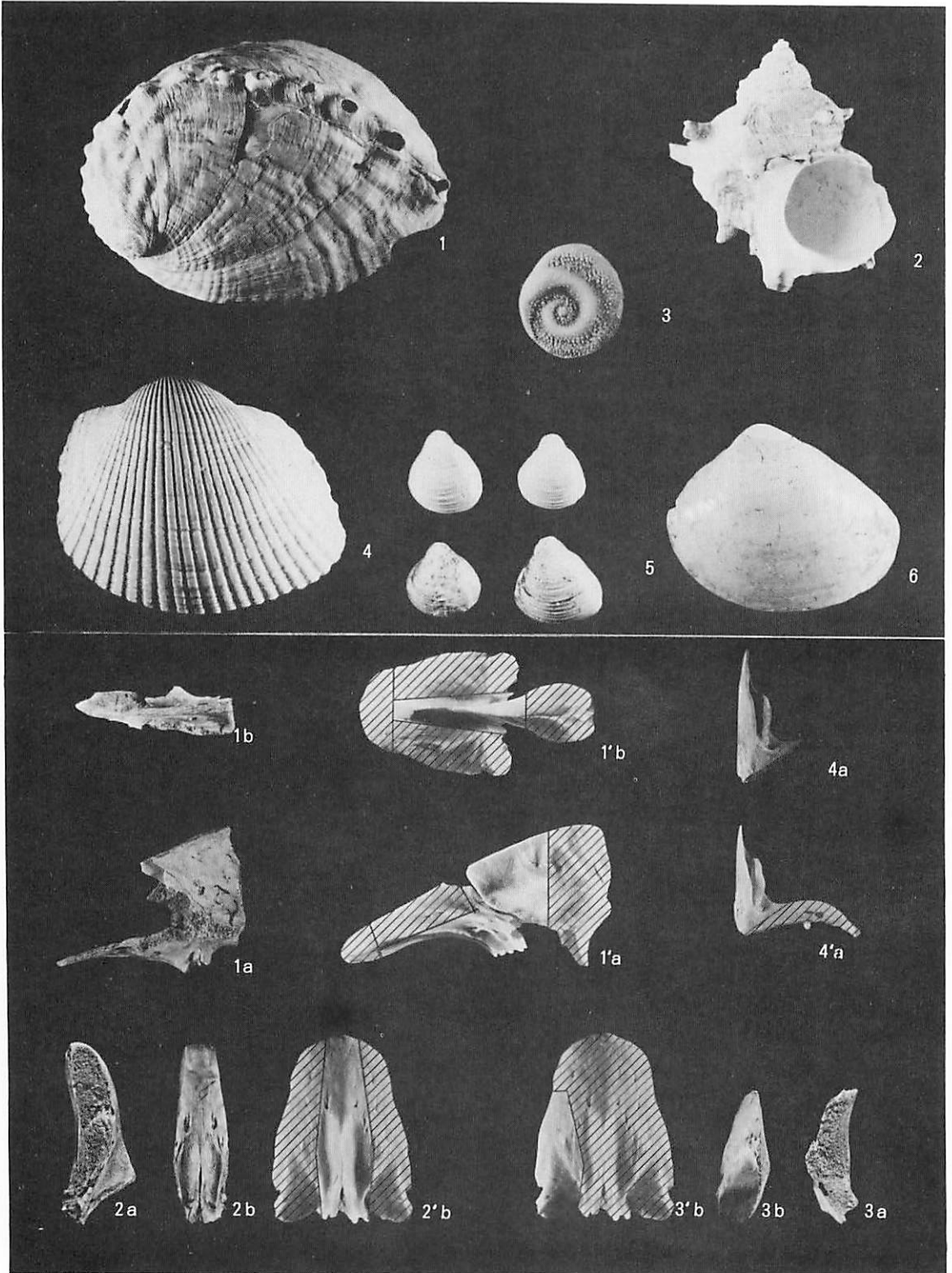




暗渠2断面(上：東溝，下：西溝，ともに北より)



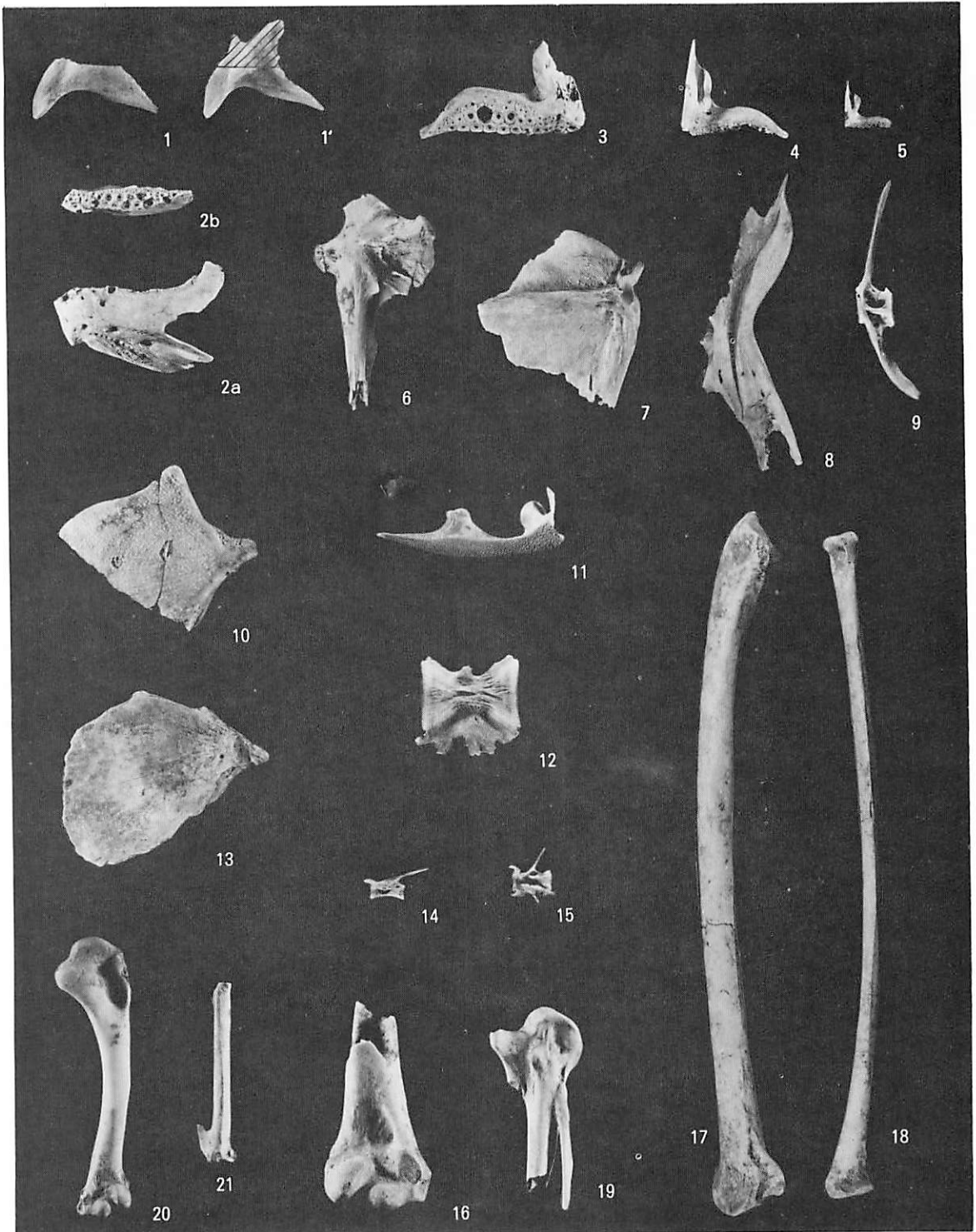
土塚78断面(上：北より，下：西より)



土壙78出土自然遺物・1

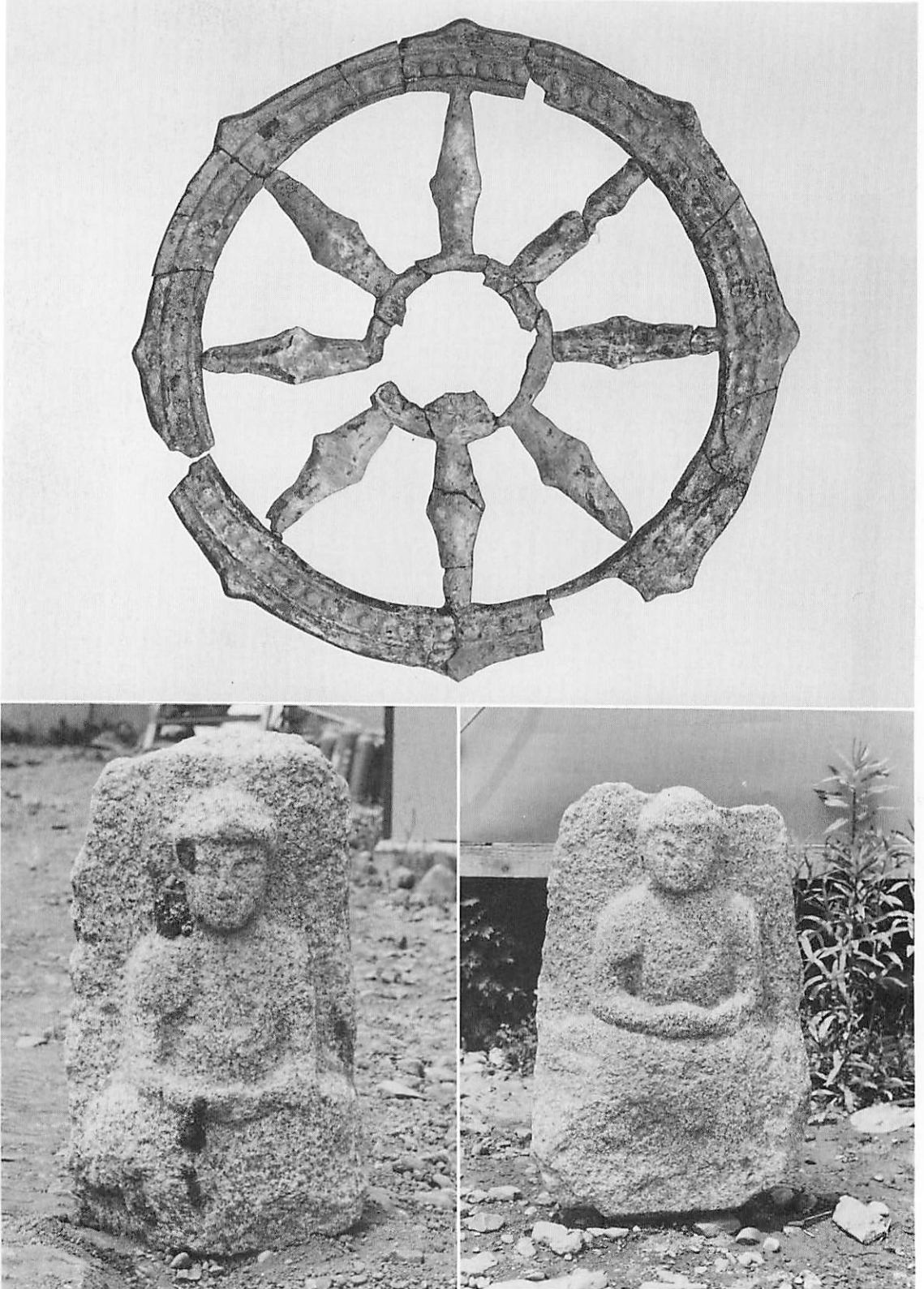
上：貝類 1：メカイアワビ，2：サザエ，3：同蓋，4：アカガイ，5：セタジミ，6：ハマグリ  
(縮尺1/2)

下：魚骨 1：マダイ前額骨+上後頭骨，2・3：同前額骨，4：右主前顎骨  
(a・側面観，b・上面観，1'～4'・比較標本，斜線は切られた部位，縮尺2/3)

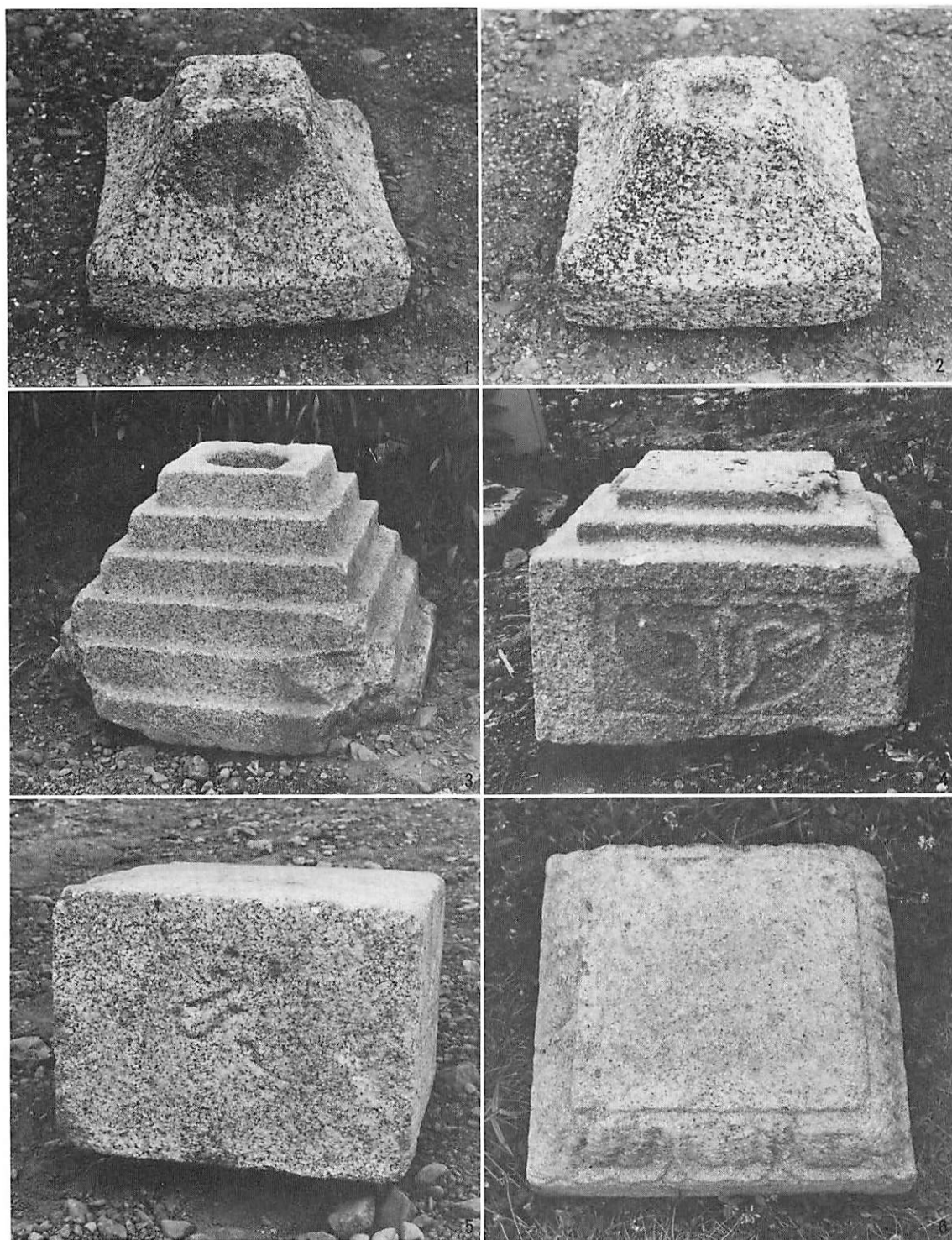


土城78出土自然遺物・2

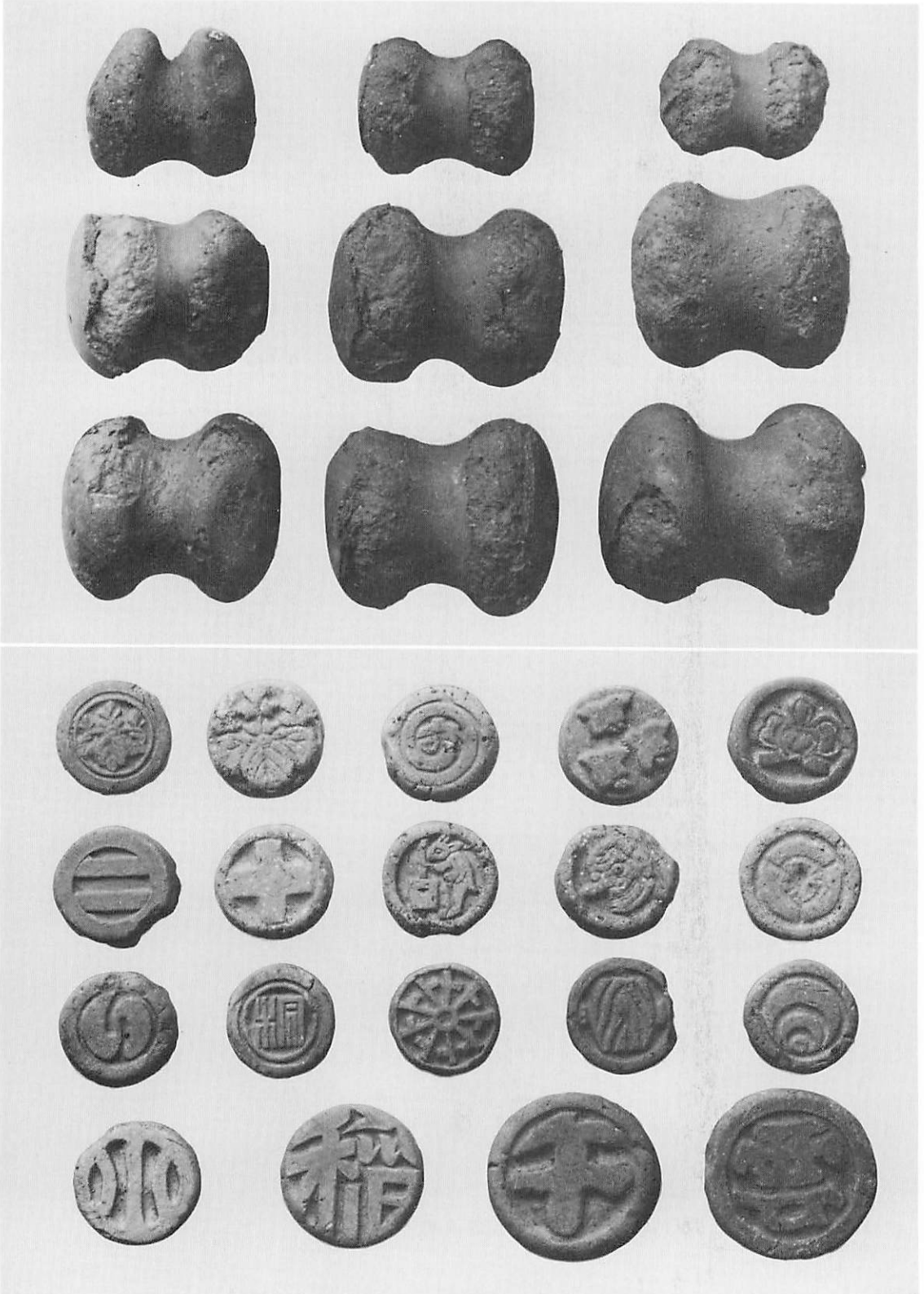
- 1 : マダイ右口蓋骨, 2 : 同左下顎歯骨, 3 : 同左主前顎骨, 4・5 : 同右主前顎骨,  
 6 : 同右舌顎骨, 7 : 同左主鰓蓋骨, 8 : 同右擬鎖骨, 9 : 同脊椎骨, 10 : フナ左主鰓蓋骨  
 11 : スズキ左主前顎骨, 12 : ブリ脊椎骨, 13 : ボラ左主鰓蓋骨, 14 : カマス脊椎骨,  
 15 : サバ脊椎骨, 16 : マガン右上腕骨, 17 : 同右尺骨, 18 : 同右桡骨, 19 : 同右中手骨,  
 20 : マガモ左上腕骨, 21 : 同右中手骨 1 (縮尺2/3)



上：輪宝 下：石仏



石造遺物



上：組紐用錘具 下：泥メンコ

---

平安京跡研究調査報告 第10輯

平安京土御門烏丸内裏跡

—左京一條三坊九町—

発行日 昭和58年12月20日

編集 名古屋大学文学部 渡辺 誠  
平安博物館考古学第2研究室 南 博史

発行 財団法人 古代學協會  
604 京都市中京区三条高倉  
振替京都8-850番 TEL. 075(222) 0888

制作 ビクトリー社

---



PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. X

EXCAVATIONS AT THE IMPERIAL RESIDENCE

OF TSUCHIMIKADO-KARASUMA

IN THE CAPITAL HEIAN

—— THE NINTH INSULA, REGIO III,

DECUMANUS I IN THE PARS ORIENTALIS ——

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXIII